家族のエネルギー

より幸せな家族になるには

ガブリエル・カルボ 著
ダナン・マーリー 監修

サンパウロ

FAMILY ENERGY

HOW TO RELEASE IT

GUIDE BOOK

BY

GABRIEL CALVO

FIRES, Inc. 1425 Otis Street N.E. Washington D.C. 20017 U.S.A.
© Gabriel Calvo. 1992

＊著作権法によって、本書あるいはその一部を、著者からの書面による許可なしに複製することは、いかなる手法によるものでも禁じられています。

本書は、フランシスコ会聖書研究所の許可を得て、フランシスコ会聖書研究所訳注聖書を主に使用いたしました。(場合によってFAMILY ENERGY 本文より適宜訳出している部分もあります。)

はじめに

―著者から読者へひとこと―

親愛なる読者の皆さま

今皆さんが手にしておられるこの本は、抽象的な「家族」概念についての本ではありません！　そのような本はたくさんありますし、すばらしいものも数多く書かれています。ところで、現代のごく一般的な家族に即しかつそのような家族が実践するために書かれたものといえば、どうでしょう？　とりわけ、人生の新しい生き方を懸命に探し求めている家族が使うのにふさわしい本は……？

家族というものの中に「神の愛の炎」が存在していることを発見して以来、過去三十年にわたって、私は、司祭としての全生涯を夫婦と家族に対する奉仕にまったく捧げ尽くしてまいりました。

私は、人生の秋を迎えています。夫婦のためのワークブック『顔と顔とを合わせて』を書き終えた今、さらに、私が手をのばしうるあらゆる家庭のドアを叩き、その家庭の心を奮いたたせ、彼らの中に眠っている神の愛のはかりしれないエネルギーを目覚めさせたい！との渇きを、深く、感じております。

ですから、まさにその目的のためにこそ、この本はあるのです。家族が、自分たちの中に眠っている「家族のエネルギー」を見いだし解き放つ……。こうしてはじめて、新しい世の中――つまり、だれもが幸せで

ある今は見ぬ未来世代――を造りあげるという奉仕を実践していく……。これを現実のものにするために、この本を書きあげました。

皆さんが心の準備さえしていただければ、私のほうはもちろん準備(スタンバイ)しております。皆さんのご家庭に入らせていただくことは、いつでも、私の心からの望みとするところです。こころよくご許可をいただけるのでしたら、いつでもどうぞ……。

いかがでしょうか？

神の祝福を贈ります。

この本の著者

もくじ●家族のエネルギー

はじめに　1
導入として　ライアン夫妻とその家族　5

第一部　私たちがより幸せな家族になるために　11
第1章　家　族　13
第2章　幸せな家族　27
第3章　家族として歩む幸せへの道のり　36
第4章　創造的な通じ合いを実践するための鍵　46
第5章　愛のエネルギーを放出するために　54
第6章　家庭で神を発見するために　63
第7章　心をスパイラルのように開いて踏みだしていくために　70

第二部　食卓を囲んで　77
第1章　私たちの家族の現状　79
第2章　セルフ・ポートレート――自画像　81
第3章　共に成長するために　86

第三部　みことばを囲んで　117
第1章　聖書　119
第2章　わくわくさせられる家族の物語　129
第3章　神の掟　139
第4章　知恵のことば　144
第5章　深遠なたとえ話　150
第6章　いやしの奇跡　158
第7章　よい知らせ――福音　166
第四部　人びとに手をさしのべるために　177
第1章　他の家族を発見するために　179
第2章　コミュニティーに参加し一丸となって働くために　189
第3章　家族へのチャレンジと直面し取り組むために　191
第4章　家族問題のルーツと取り組むために　217
第5章　愛の証し人として生きるために　228
第五部　さらに生かし続けるために　231
おわりに　239

導入として

ライアン夫妻とその家族

この本は、カルボ神父様にとって、結婚および家族に対する三十八年におよぶ奉仕職の集大成としては、二冊目になる最新作です。この歳月を歩んでつかんだ知恵・愛・希望のエッセンスが抽出されまとめられています。最初の著作である『顔と顔とを合わせて』は、夫婦のためのものでした。今回の著作『家族のエネルギー』は、その名が示すように、家族のためのものです。

ガブリエル・カルボ神父様は、一九六一年にマリッジ・エンカウンターを創始されました。そのころから、「夫婦の関係を築きあげていくことは、きわめて重要なことではあるものの、最初の一歩にすぎないのだ……」と認識しておられました。そのため、一九七六年には、単に夫婦にとどまらず、個人や家族のための奉仕でもある「FIRES（ファイアーズ）」を創設されました。

FIRESは、

Family（家族）
Intercommunication（通じ合い）
Relationships（関係）
Experiences（体験）
Services（奉仕）

の頭文字をとったものです。「家族は、深く通じ合い、ふさわしく関係を活かすならば、すばらしい体験が得られ、そのときこそ、奉仕するようになります」というのが、その意味するところです。

カルボ神父様は、この本が、家族と名がつくかぎりどの家族にも手に入れてほしい！　と望んでおられます。そこで、なんとかしてあらゆる家族に通用するものにしようと全身全霊を尽くされたのです。最近数年のうちに、家族というものの状況は著しく変わってきています。片親の家族が激増したことは、そのひとつの例と言えるでしょう。神父様は、「あらゆる家族をその家族たらしめている大切な要素は何であるか」を、苦心して識別されました。そこには、「家族がどのような構成であるかないかにかかわらず、この本が、その家族それぞれにとってふさわしい助けとなるように……」という心からの祈りがありました。

結婚および家族に対する奉仕職を始められた最初のころから、神父様は、多くの家族と親しく知り合っていました。それらの家族との深い友情を体験したからこそ、結婚および家族に対する奥深い認識をカルボ神父様は発展させていかれたのです。私たち家族もその恵みに浴しました。

一九八〇年、カルボ神父様がワシントンＤＣに住んでおられると、うかがいました。さっそく私たちは、神父様と彼の助手であるホセ・ヘルナンデスを、家族の夕食会に招待したのです。信仰あついこのふたりの人物との、ひじょうに深みのある愛に満ちたかかわりをもつようになった、これが最初でした。それ以来何年も、この関係は成長し続けています。

ＦＩＲＥＳのプログラムのひとつ、「家庭におけるファミリー・エンカウンター」を、カルボ神父様、ホセ、そして五人の息子たちと一緒に体験したのは、一九八二年のことでした。当時二十三歳で軍隊から戻ったばかりの息子から、そのとき、「今まで一度も、父さん母さんから愛されていると感じたことはなかった……」と言われました。ひどいショックでした。しかし、私たちだけでなく、兄弟であるほかの子どもたちも、温かく彼に手をさしのべたのは、ほんとうに心あたたまる体験でした。彼は今、すばらしく成長し充実

しており、平和・喜び・愛を獲得しています。今では、「愛されている」と彼が実感しているのは、一目瞭然です。

カルボ神父様は、「人びとが、外見や些細なことに惑わされず、家族関係の核心にまで迫ることのできる」よう助ける能力をもっておられます。この「家族のエネルギー」を体験されれば、「なるほど！」と読者の皆さんも納得されることでしょう。

このワークブックは、単に読むためのものではなく、むしろ、実践されるべきものです。各見出しがひとつの単位になっていて、課題の質問がついています。カルボ神父様に与えられている最高の賜物のひとつは、より深い理解度と成長を私たちがものにできる……、そんな最適な質問を投げかけることができる特別なタレントです。ですから、どうか、彼の質問に答えてみてください！

このワークブックは、互いにかかわりをもっている人のために書かれましたから、家族の一人ひとりが内省を続け、課題の質問に答えていくことは、とても肝要です。家族のエネルギーは、それぞれ、一人ひとりの中に内蔵されているのです。「ぎりぎりの臨界点」にまで行きつくためには、一人ひとりが自分の中に埋もれている炎を燃え立たせなければなりません。そうすれば、皆で集まったとき、共同体にさしだせるだけの何かをそれぞれ手にしていることになるでしょう。

（＊1）原文＝"reach critical mass"「家族の中に存在する神の愛のエネルギーが解放されるまで」の意。「家族のエネルギー」を核融合で比喩的に表している。臨界点（臨界圧力・温度）に到達すると核融合反応が生じる。

私たちがそれぞれ、ありのままの自分と今どのような状態にあるのかをまず紙に書き、それを分かち合ったとき、すごいことが起こる！　とわかりました。こうしたことで、どれほど私たちが緊密に結び合わされたかは、感嘆のあまりあいた口がいつまでもふさがらないほどです。

心しておかなければならない大切なことがあります。それは、このエネルギーの解放は、決して強制することができない、ということです。創造的なあらゆる追

求と同じように、このエネルギーは、愛深く心をかけ、受け入れのある雰囲気の中でこそ、最高度に発揮されるようです。年をとるにつれ、私たちがしなければならないことは、家族の他のメンバーを愛し受け入れることにつきる、とわかってきています。私たち家族の心を必要に応じて変えてくださるのは、主がしてくださることです。

私たち夫婦が結婚して三十六年経ちました。五人の息子のうち四人が結婚しています。孫も十人います。私たちの結婚の最初の数年は、あたかも転覆寸前の船のようでした。四番めの子どもが生まれてから四か月間私たちは別居して暮らしました。そこから抜け出るのは、つらく、険しい道程でした。しかしながら、一九七一年にマリッジ・エンカウンターに参加したことで、私たちの夫婦関係は大いに改善されました。神と互いに対する愛のうちに、一致を見いだしたのです。

私たちの家族それぞれに対してしてくださっているさまざまなことゆえに、神に心から感謝しています。

私たちの息子のトムは、感受性が豊かで、優しく心の温かい子です。彼に抱きしめられると、愛されていると実感します。彼の妻のシンディは、すばらしい人で、精神的に成熟しており、息子にとって信仰におけるすばらしい友です。ふたりには、六歳、五歳、三歳、一歳の女の子がいます。

マイクは、あけっぴろげで、愛深く、つねに「変わろう！　成長しよう！」と頑張るタイプです。物腰の柔らかい彼の妻ナンシーは、惜しみなく与える性質の子です。彼女の創造性は、まったく驚くべきものです。このふたりのために、祈ってください。現在、別居中なのです。娘がおり、六歳と四歳です。

リックは、思慮深く、エネルギッシュで、頼りがいがあり、広い心の持ち主です。人の話に耳を傾けることが驚くほどうまい子です。だれにでも、リックは好かれます。

テリーは、いつもきちんと定期的に電話をしてくる子で、連絡を絶やしません。父親の保守的な傾向と、母親ゆずりの、リスクを顧みず飛びこんでいく強い意志をうまくミックスした性格です。彼の妻マリアは、オープンで正直な性格。驚くほどさわやかな子です。八歳の養子の男の子、七歳の女の子、四か月と二か月

になる息子たちがいます。

ケビンは、私たち家族を一致させるすばらしい才覚をもっています。ユーモアのセンスに富んでおり、そのうえ、率先して自ら何でもやるタイプです。妻のスーザンは、才能があり、かわいらしく、誠実な、まさに愛すべき神の子という感じです。子どもができることを待ち望んでいます。

現代の一般的な家族として、私たちは、よりよく互いを受け入れるように努力し、もっと深いきずなを互いに造りだそうと、倦むことなく助け合っています。

この導入を書くため準備をしているとき、息子のひとりからノートが届き、それは、私たちの心に深く響くものでした。こう書いてありました。「他人に手をさしのべる心をもつあなたがたに、ほんとうにありがとう！　と言います。ふたりに対する愛と感謝の気持ちから、さまざまな機会に何度涙を流したか知れません。あなたがたは、ほんとうにすばらしい……、まさに救いです。ぼくは、それに値しない小さな者にすぎない。でも、こんなに幸せであることを心の底から喜んでいます」

まさに、これこそ、FIRESの精神なのです。愛をもって手をさしのべ、隣人の肩をたたいて励まし、はぐれてしまった人を支え、奪いとり傷つける輩(やから)に、もう一方の頬をもさしだし、普通とは違う人の苦しみを思いやる……。

こうしてこそ、より深く一致するようにと私たちの心に備えられている、巨大なエネルギーを体験することができるのです。

義理の関係は、私たちが家族として成長していくうえで、神のご計画のたいへん重要な部分を占めています。私たちの息子は、かなりタイプの違う女性と結婚しました。私たちがすべきは、その違いの中にある美しさを見いだすことです。

息子たちはそれぞれ、自分と私たち夫婦を主に近づけさせてくれることになる女性をめとったのです。何という恵みでしょう！　つまり、私たちは、今までの自分たちの世界観に閉じこもらず、義理の娘たちがもっている肯定的な性質を心から認め、彼女たちがありのままでいられるよう励まし、愛をもって助けの手を

さしのべなければならないのです。特に、そうするのがもっとも難しいと感じるときに……。

このワークブックは、すべての人が使えるものです。皆さんの家族がどのような状態にあっても構いません。だれにでも通用する知恵が各ページにぎっしりつまっています。カルボ神父様は一人ひとりの個性に合わせて、自己との出会いが家族の一致のためにどれほど重要であるか、示してくださいます。

このワークブック『家族のエネルギー』は、家族がそれぞれに、あるいは何組かの家族がグループとしてやっても、その成長の良い道具となりうるでしょう。

個人でこのワークブックに取り組んでも、変化し成長することができます。あるとき、読んでいるうちに、家族のうちのひとりがほかの子に比べて疎遠になってしまっていることに気づきました。何もかしこまらずすぐ電話し、「やあ、元気か？　おまえのこと、大切に思っているよ」と言ってあげました。すると、ただちに、前より親密でいっそう深いつながりができるようになりました。

自分の殻を出て手をさしのべることは、いつでも、大きな実りをもたらすものです。ごく小さなことに、大きな意味があるのです。

私たちが一致するうえで、縁遠くなってしまうことと忙しすぎることは、ただちに解決すべき問題です。

私たち夫婦は、家族が再会できるチャンスを毎年つくることに決めました。共同体として、よりいっそう一致成長していくつもりならば、共に集う時間は不可欠です。

私たちの土台は、家族です。主の呼びかけに応えたカルボ神父様は、私たち家族が、人の子であるイエス様とそしてお互いに対してより一致できるよう、導いてくださいました。このことを、よき牧者である主に感謝いたします。

読者の皆さんのために祈ります。どうか、皆さんが、より深く充実した家族生活に向けて扉を開くことができ、そのときこそ、「家族のエネルギー」を解き放つことができますように。

まさに、そのエネルギーはすでに生じつつあるのです！

第一部　私たちがより幸せな家族になるために

毎日のように、
数えきれないほど多くの人びとが、
満たされず不幸な家をあとにし、
家庭では見いださなかったものを求め
巷で四苦八苦しています。
これは、厳然とした事実です。
皆さんは、どうでしょう？
もし、自分たちは「まさにそれだ！」
と言われるなら、
この本は皆さんにぴったりのものです。
どんどん先に進んでください。

「いや、自分たちはちがう」
と言われるのでしたら、
それでも、
どうか読み進めてください。
そうすれば、
幸せな家庭の秘訣を
他の人に分かち合うことができるようになるからです。
そのとき、
皆さんのほうも大いに満たされるでしょうから。
準備はいいですか？

第1章
家　族

ある絵描きのお話をいたしましょう。自分の仕事にどうしても飽き足らなくなってしまったこの男、ある日妻にこう言いました。

「世界中でいちばんかけがえのない、もっとも美しいものを探しに出かけようと思う。おれは、どうしても、その絵を描かなきゃならんのだ」。

絵描きの旅は、世界中を股にかけたものでした。美しいものをたくさん目にしました。しかし、満足することはありませんでした……。自分が探し求めているものを見いだすまでにはいたらなかったのです。

ある日のこと、結婚式へと急ぐ花嫁を呼び止めました。「教えてほしいんだ！　世界中でもっとも美しいものって、何だと思う？」嬉しさと喜びに輝く花嫁に、やおらこう尋ねたのです。花嫁は躊躇せず答えました。「愛よ！」

失望して、絵描きはまた旅を続けました。愛なんて描けるわけがない……。

それからしばらくして、今度は、戦場から帰還する兵士と出会いました。「兵隊さんよ！　世界中でもっとも美しいものって、何だい？」「平和！」と、こうひとこと言うなり、兵士は家路を急ぎ歩み去りました。

またまた、絵描きは失望してしまったようです。平和なんて描けるわけがない……。

さらに旅は続きます。あるとき、説教に向かうひとりのラビに出会いました。（そうだ！　聖職に就いているこの人なら、おれを助けてくれるに違いない！）しかし、ラビはあっさりこう答えました。「信仰こそ、世界中でもっとも美しいものに決まっとる！」

いったい、どうやったら、信仰を絵に描くことができるっていうんだい？

絵描きは、この旅がむだ骨に終わったと感じて、家に戻ることにしました。心も体も弱りきっていました。

家にたどりつくと、妻が温かく迎えてくれました。あの花嫁が教えてくれた「愛」がそこにあるではありませんか！

わが家は何もかも、ほっとできる感じでした。まさに、あの兵士がもっとも美しいものだと言っていた、穏やかな「平和」に満ちています……。

そして、絵描きを見あげる子どもたちの目には、ラビが言いきった「信仰」が宿っていました。

おれが描きたかったものは、ここにあったのだ……。おれの家族、おれの家庭……。絵描きは最高傑作をものにするに違いありません。

この世に暮らすあらゆる男女に課せられた
もっとも重要な仕事とは、
まさしく、
信仰・愛・平和に彩られた、
そんな家族を造りあげること……。

家族とは何でしょうか？①

家族におこるさまざまな出来事や、家族・家庭の何たるかについて、定義したり描写したものは山のように存在します。もっとも重要なそれらのうち、いくつかを以下に選び出してみました。

家族とは

▽社会を形成する根底となる要素。自然発生的かつ原初の共同体。

▽最古から存在し、人間としての生活習慣にもっとも深く根ざしているもの。きわめて流動的であるが、同時に、変わらない伝統的な側面をもっている。

▽人が、「自分はだれでどのような者になろうとしているか」を学ぶ場。

▽少なくとも文明の発祥以来、人類がもち続けてき

た、生物学的に基本となる共同体。
▽世界の中核を成し、社会の魂とも呼びうるもの。
▽神のご計画。神が最初に造られた社会的形態。神の最高傑作。
▽将来世の中を背負って立つ世代を温かく育(はぐく)み、加えて、年老いた人たちの生活習慣をも後世に残すよう、最初に働きかける人びと。
▽エネルギー・生命・愛を生みだす、主要でもっとも力ある源。
▽生命を維持する、根本的なシステム。
▽二世代以上の人たち、あるいは異なった年齢層の人びとに、彼らをとりまく環境からもたらされるさまざまな必要がきちんと満たされるよう、もっともうまく構成された枠組み。
▽人類の起源。
▽家の共有・経済的協力・子どもを産み育てること、によって性格づけられている生活共同体。
▽一般に、血縁あるいは法律的な縁故関係をもつ人びとによる小さなグループで、互いに対する特別な情緒的きずなで結ばれている。
▽親密さ・帰属意識・家庭的な安心感の何たるかを知り始める、最初の人間関係。

家族生活を生き生きと営んでいる人を
紹介してください。
その人こそ、
根っからの幸せものです。

家族とは何でしょうか？②

▽ごくふつうの人たちの、基礎となる集まり。
▽人間共同体の土台となる形。
▽すべての人のルーツ。
▽神が世の中に造りたもうエネルギーの中心源。
▽信仰と希望の学舎（まなびや）。
▽愛・奉仕・自己犠牲を学ぶ場。
▽顔と顔とを合わせての通じ合いを学ぶ場。
▽直接で親密な交わりを学ぶ場。
▽人間らしさを学ぶ場。
▽自分らしさと成長を学ぶ場。
▽世代同士が交わり、影響を及ぼし合う場。
▽過去と未来のかけ橋。
▽新しい文化を生み出す種であり、その苗床（なえどこ）。
▽人類史上もっとも重要なリアリティー。
▽私たちにとって、まず何をおいても第一にあげられるニーズ。もし、家族というものが存在していなかったなら、発明してでも手にしようとしたに違いないほどの必要。
▽正義のスパイラル〈らせん〉[*1]。
▽愛のスパイラル。
▽一致のスパイラル。
▽安心と平穏の空間。
▽喜びの空間。
▽平和の空間。
▽聖書によれば、神の救いの計画における鍵。
▽「小さな教会」

（＊1）スパイラル〈らせん〉＝円は閉じたものであるのに対し、らせんは開かれたもの。限りなく上昇し広がっていく。「○○のスパイラル」とは、「○○が、開かれたらせんのように限りなく広がり、外界にもたらされていく」の意。

家族とは、
将来の種子、
将来の希望です。

望ましい家庭とはどのようなものでしょうか？

▽私たち自身の心の奥深くにある、愛に満ちた幸せいっぱいのすばらしい感じ。ひじょうにはっきり体験しているにもかかわらず、ことばでは表現しがたいもの。

▽嵐のときの逃れ場。

▽何をしたか、何をもっているかで愛されるか否かが決まるのではなく、ただありのままの自分であるがゆえに愛される場。

▽人が真摯に扱われ価値あるものと見なされることに関し、安全な場。

▽和解と平和の場。

▽何にもまして通じ合い分かち合うことを必要とする人たちでできた、生きた共同体。

▽一対一を基盤にして世話する関係。この世話は、時に応じて親か親代わりのだれか、あるいはまったくの他人が行います。このような世話には、複雑ではあるが一貫した心理が働いています。その心理的な働きによって、人間は一人前になり、自分が育った家族から巣立っていけるよう促されるわけです。

▽家族の成員の、肉体的情緒的必要（ニーズ）が満されるよう、段階的に成長する一単位（ユニット）。ニーズには、次のようなものが含まれます。

――愛されるニーズ。価値ある者と見なされるニーズ。それから、人を愛し、価値ある者と見なし、信頼することを学習するニーズ。

――人にコントロールされるニーズと、自らをしたがわせる（セルフ・コントロールする）ことを学ぶニーズ。

――ひとりの人間として――男性として女性として――、ある人の喜びあるいは可能性を受け入れるニーズ。こうしてついには、次なるニーズとして、家族以外の人びとに目を向けそこに身を投じていくことになるのです。

▽ふたり以上の人たちが平和と喜びのうちに互いに支え合う場。
▽他のメンバーに頼ることのできる場。
▽創造性が発揮される所。まさしく、私たちが家庭にいることは、私たちの真の姿なのです。
▽愛が生まれる場で、私たちは、そこで、無条件で自分が愛されていることを知ることができます。
▽私たちの心のある場所。
▽自由にいつでも出入りできる場所。入場券を買う必要などまったくありません。
▽神の愛の神秘的エネルギーが隠されていて、解放されるのを待ち望んでいる場。

家庭とは、
つまり、
神の神秘の何たるかを
まったく言い表わしたもの。

家族のもつ多彩な表情

模範的な家族というと、存在しうるそのような特定のモデルはたったひとつだけであるかのように思いがちです。これでは、不公平ですし、現実に見合ったものともいえません。家族には、バラエティに富んださまざまな顔があるものです。

異なった場所、時において、家族というものは、さまざまな表情をもつのです。変化し続ける個人のニーズ、変幻自在の社会、移りゆく時を映しだす「鏡」と言えるでしょう。つまり、あらゆる種類・タイプの家族が存在します。時代の流れを歩みながら、家族はさまざまな顔に変化してきているわけです。

家族の表情は、この三十年来、目まぐるしく変わりつつありますが、社会の根底を成す一単位（ユニット）としての役割は、あいかわらず続いています。

伝統的で唯一であった今までの家族のモデルは、あらゆる多彩さをもつ万華鏡のように今日的な様相をそなえてきました。つまり、大家族構成から核家族の流行、さらに、両親のいる家族から片親—独身、別居、離婚、未亡人あるいは妻を亡くした夫—の家族へ、後添いの親、異なる人種間の結婚など、多くの異なった伝統、宗教、国、人種、文化、文明を通じて、このような様変わりがあります。

父系あるいは母系重視の価値観をもち、農業中心の時代から、工業・電気・テクノロジーを重視する時代へと、家族は変遷してきました。そして今、家族は、エレクトロニクス・メディアがもたらす爆発のショックに見舞われつつあるところです。そしてさらに、はるかかなたに、まったく新しい家族像がかいま見えたようにも思われるのです。私は、それを、「核融合的な家族」と名づけたいと思います。「核融合的な家族」は、真理と愛の文明を基盤にしているものです。

世界中のあちらこちらで自覚されてきていることがあります。それは、『家庭』とは、愛と心の成熟とを学び成長させていくための場であり環境である」という認識です。

ですから、きわめて重要なのは、「家族とはどのようなものでしょうか？」という漠然とした問いではなく、『私たち』というひとつしかない具体的な家族にとって、家族の現実とは、どのようなものでしょうか？」ということです。ほんとうのところ、現代の家族には何が起きているのでしょうか？　基本的に見て、現代の家族は、家族といえるでしょうか？　現代の家族は、どのような表情をもっているでしょうか？

しばしば、私たちは、自分自身がどのような者であるかを知りませんが、また、「自分たちの家族がどのようなものか」もわかってはいないのです。つまり、自分たちの家族に意識的になる必要があるわけです。私たちを魅きつけるあらゆる事柄は、一点に集中しています。私たちの家族としての体験です。

最後に、言われて初めてハッとするのは、どの家族も三つの世代にまたがっている、という事実です。

つまり、

1　二つの家族から、今の私たち家族の両親それぞ

れが生まれました。

2　父親・母親・子どもで構成されている、今の私たちの家族があります。

3　今の私たちの家族の子どもの、そのまた子どもが、将来の家族を造るのです。

迷うことなく、
私たちは、
自分たちの家族を誇りにしなければなりません。
自分たちの家族を心に留めていなければなりません。

変わりつつある現代の家族

家族は、滅びてしまったのでしょうか？　あるいは、事実、死につつあるのでしょうか？

いいえ！　家族というものは、いつの時代も生き抜いてきました。社会の基本を成す単位（ユニット）として、家族の役割は他に代えがたいものです。つまり、もちろん、家族は滅んでもいませんし、また死につつあるわけでもありません。人間の他の営みの大部分と同様、進化しつつあるのです。

だれでもみな承知しているように、私たちは、変化に富んだ世の中に暮らしています。変化こそ、私たちの時代を特徴づけるものといえるでしょう。早いテンポで、変化が繰り返され、それにつれ幾度となく方向転換が行われる……。世界がこのように変わり、人間が進歩していくにつれ……、家族の姿もまた変化していきます。

多くの人が家族というものを誤解し、「家族は、動きのない静的で固定された存在である」かのように考えがちです。しかし実際は、家族は、動きのない固定されてしまったものではなく、むしろ、ダイナミックな体をもった生き物であり、たえまない進化のうちに生きています。家族は、己が周りのさまざまな出来事によって大きく影響されます。

人間の営むあらゆる制度のうちで、もっとも普遍的かつ土台としての、家族……。家族を構成するメンバーが受けるあらゆる変化は、ただちに家族にひるがえり、切っても切れない影響をもたらしています。経済的・社会的・宗教的・政治的・軍事的あるいは人種的なあらゆる衝突、緊張関係、抑圧、不安定な状況……などの変化。

家族は、人間としての生活体験の基本でもあり、世の中の危機を自ら体現したものともいえます。実は、その危機が、より人間らしい生活へと家族をいざなっていくのです。

つまるところ、ほとんどの家族が危機を体験します。しかし、家族が危機を体験したからといって、その家族が崩壊してしまうということではありません。変化するのは結婚や家族生活の表面上のある部分で、根幹はいつまでも残ります。

危機[*1]が、変化と成長をうながす機会となり得ます。危機はまた、神が、ご自分の救いの計画に立ち戻るよう呼ぶ、招きの声ともいえるでしょう。

（＊1）「危機」の文字そのものが、「危険」のみならず、「機会」でもあることを示しています。

実際、私たちが今の社会を生き抜いていくことはつまり、結婚と家族の生活の質というものを追い求めていくことであります。こうしてこそ、家族というものは、新しい機能を見いだしていくことになるでしょう。こうしてこそ、家族は、価値観の新しい体系を育む土としての役割を果たしうるにちがいありません。

家族とは、いわば、変容という十字架を負いつつも決して滅びることのないエネルギーなのです。

家族は、イデオロギーを超越したものです。

家族は、持続するものです。

つまり、
家族という存在が消滅してしまうなど、
考えられません。

現代の家族に起こりつつあることは？

現代の家族が変化しつつあるということは、多くの人びとの認めるところです。しかしながら、その変化の本質を真に理解しているのは、ほんのひとにぎりの人にしかすぎません。

今緊急に必要とされているのは、一般の家族における現実の状況を見直し、理想ばかり追いかけ、おそらくはロマンチックに飾られてしまった家族像を、地に足をつけた現実的なものに置き換えることです。

現代の家族は、新しい社会文明へ向けて、根本から変化し移行する過渡期をすごしています。近代的な家族像に、昔ながらの伝統的な価値観や性格が失われつつあるのは事実です。新たな社会のニーズと変化が近未来の地平に顔を出しつつあり、それに見合った新しい価値観と性格を見いだそうと、家族は奮闘しているところなのです。

現代の家族は、ばく大な災渦とも直面しています。未婚の母や私生児の扱い、結婚の機会の減少、不倫の一般化、親になることを避ける風潮、親としての責任の放棄・怠慢、子どもを無視する傾向、家庭崩壊、片親家庭、家庭内暴力、身寄りのない老齢者の問題など。

家族は、執拗に圧倒的に挑戦を受けつつあるのです。離婚、妊娠中絶、避妊、シングルマザー、アルコールや麻薬の中毒、配偶者や子どもへの虐待、家出や捨て子、青少年の非行、自殺、メディアからの情報による洗脳など。このリストは、日増しに勢いを増しつつあります。

しかしながら、全体を眺め渡してみると、力強く生き残るための新たなエネルギーが存在している証拠も、また見いだされています。

現代の多くの家族は、結婚と家族生活に対する新しい視点（見方）をもっています。たとえば、夫と妻の間に見受けられることですが、より平等な立場をもつようになっています。自分のことをいっそう自由に表現できるようになり、個人での決定権が対等です。仲間意識と友情が大切にされ、信用と信頼を互いにいっそうもつようになりました。かつてなかったほど、相互に助け合い、支え合い、一致と相互満足が大切にされています。

さらに、今日の家庭の多くでは、親にだけでなく子どもにもまた人格があることを認めるようになってきています。したがって、より自発的でオープンな姿勢、友情・自由・責任・理解・協力が、かつての伝統的な家族でそうだったよりいっそう、親子の間に見いだされるようになってきました。

子育ての概念でさえ、根底から変化しつつあります。すなわち、専横的で権威主義的な子育てのスタイルは、平等・尊敬・対話・奉仕に基づいた民主主義的なそれへと移行しつつあるのです。

今日、教育は、もはや、子どもたちの専売特許ではなくなっています。時代を先取りするセンスのある親たちは、子どもたちと並んで、自分たちも教育を受け続ける必要があることを発見しています。

家族は、もし、今の社会に生き残り、社会に奉仕し、まことの幸せをつかむことを望むならば、ひとつの体（ユニット）（単位）として共に成長していかなければならないの

です。

正直に言って、

今、私自身の家族に、何が起きつつあるでしょうか？

明日の家族像

現代社会における家族の姿勢は、未来志向型であるべきでしょう。「新しい家族（ニュー・ファミリー）」になるための準備として、過去の家族像、あるいは現代の家族像でさえ、それを見つめるだけでは誤りといえます。

社会に存在する人為的なあらゆる習慣は、さまざまな変化の波にはっきりと押し流されつつあります。家族という風習も、やぶさかではありません。数年前までは、ひどい災渦が突如訪れるだろう、と予言していた評論家たちも、今では、うわすべりではない希望が生まれてきつつある、と認め始めています。彼らは、ときには警告を発しつつも、こう言います。すなわち、「人間の生活様式としての結婚あるいは家族というものは、生き残るに違いないし、のみならず、より目覚ましい発展を遂げるだろう」と。

スタンフォード大学の心理学者ポール・ワツラウィ

ックは、こう言っています。「一世代が経過するうちに、家族を特別に重視する社会へと、我々は立ち帰っているだろう」。

家族療法士（ファミリー・セラピスト）である、ヴァージニア・サティルは、過去二十年間の結婚の流行を時系列に並べていちべつし、こう観察しています。「数年たてば、無政府主義によらない自由を享受する時代が来る。人は、より成熟さを備えたものとなり、総体的で新たな変化が訪れる。それは、男と女がどのようにかかわり合うことができるか、ということに関してである」。

考古学者のマーガレット・ミードは次のように確言します。「我々は、かつて、歴史から家族というものを消し去ろうという努力を幾度となく繰り返してきた。しかし、一度も成功することはなかった」。

教皇ヨハネ・パウロ2世は、使徒的勧告『家庭』の中でこう書かれました。「人類の未来は、家族の双肩にかかっている」と。

紀元二千年を迎えたとき、家族というものは、どのように変化しているでしょうか？　政治家や世界のリーダーたちのだれも、この問いに対して、私たちの納得いく答えを出してくれはしません。実は、その変化を決定づけるのは、世界中の数えきれないほどの家庭と、それぞれ個々人の生き方そのものです。「人生と成長にとって、家族は、欠かすことのできない土台であり必要な存在である」と信じる人びとこそ、家族の将来を決定づけていくでしょう。

したがって、今このときは、結婚と家族に信を置く人びとこそ現実をまったきまでに大切に生きている、と言える、そんな時代なのです。家族に将来性がある、というならば、―そして、実際確かに将来性があるわけですが―私たちこそ、その将来を築きあげていかねばならないでしょう。

家族が存在し続けていけるか否かは、その家族のメンバー全員にかかっています。特に親の役割は重要ですが、親以外のメンバーの役割ももちろん大切です。つまり、真の家族像にいっそう近づくため、家族のメンバーは、自分たちの家族を何よりもまず第一に置かねばならず、自分の時間・努力・エネルギーを分かち合い、提供しなければならないわけです。私たちが何を選択するかによって、将来の家族の姿が決まってき

ます。

家族の役割をまるごと実際に肩代わりできるものはありません。家族という存在なくして、文化というものは生き延びてくることはできなかったに違いありません。将来人類が家族という存在なしに機能できるなど、考えられません。

人類が存在するかぎり、今の世代は新しい世代にとって代わられなければなりません。機械もコンピューターも、人間の代役をすることはありえないでしょう。家族は、不滅です。家族こそ、未来そのものです。

心してください。

家族の将来は、私たち次第なのです。

第2章
幸せな家族

今まで見てきたとおり、
家族は、変化し続けているものです。
では、それぞれの家族に、
何か共通点があるでしょうか？
断言できることが、あります。
例外なく、どの家族も、
抗しがたいまでの、心の奥底からの切望を
抱いている、ということです。
すなわち、幸せでありたい、
幸せな家庭になりたい、という望みです。

ところで、どの家族も、
この共通の夢の実現を
手にし始めているでしょうか？
いまいましい現実ですが、
私たちがかつて体験し
見聞きしていることから推して、
この夢を実現している家族は、
ごくわずかにしかすぎません。
たいていの家族にとって、
家庭が幸せであるなど、
「かなわない夢」のままです。
なぜでしょう？
知り合いの幸福な家族をよく見てみると、
次のようなはっきりとした結論に
到達せざるをえません。
つまり、幸せな家族は、一夜にしてならず！
幸せな家族とは、
じっくり時間をかけて歩んできた
実りなのです。
それは、まず、両親の歩みから始まりました。

それから今度は、両親と子どもたちで、共に歩んだのです。

さて、ここまでくると、どうしても、こういう質問が出てくるはずです。

では、

▽幸せな家族とは、
　どのようなものなのだろう？

▽私たちは、家族として、
　一致することを望んでいるだろうか？

▽どうしたら、私たちは、
　幸せな家族の座に
　着くことができるのだろう？

このことを、これから見ていきましょう。

このワークブックをいちべつしますと、たくさんの質問が載っていることに、皆さん気づかれるでしょう。さらに、それらの質問には、とりあげられているすべての事柄に関し、具体的な「行動」をもって応えていく姿勢が求められていることもおわかりになられるはずです。「問題が存在しているとわかった」としても、それで充分とは言えません。課題を実践するための具体的な誓約をし、それを現実の生活で実行していかなければなりません。このワークブックの課題のどれにとりくむときも、重要なポイントとしてこのことを心に留めてください。

幸せな家族とは、どのようなもの？

幸せの概念は、きわめて複雑です。ですから、前述の三つの質問にふさわしい回答を見いだすためには、現代の一般的な家族をとりあげて見つめる必要があります。その最善の手段として、次の三つがあげられます。

1　ドアをノックしてみましょう

私たちから見て、ほんとうに幸せそうで、結婚と家族生活での幸せの秘訣を分かち合ってくれそうな、ごくふつうの家族を訪問するのです。

2　感謝し信頼の心をもって、

その輪の中に入りましょう

その家族の温かい雰囲気の中に入って、よく観察するのです。そのポイントは、「彼らが何を所有しているとか、どんな名言を言ったか」ではなく、「彼らが、どのような人たちで、何をし、どのようなかかわり方をしているか」にあります。

3　その家族の一人ひとりについて、

思いめぐらしてみましょう

彼らの共通な特徴は何だろうか？　そして、彼ら一人ひとりは、どういう違いをもっているか？　じっくり振り返るのです。

実はこれこそ、三十五年間に及ぶ司祭としての奉仕職において、私がやってきたことなのです。

今でも、世界中の何百組の家族との、「顔と顔を合わせて」の親密な関係は続いています。彼らは、私に、自分たちの家庭の秘訣を分かち合ってくれるわけです。

その家族こそ、私にとって、最高の学舎（まなびや）でした。私は、彼ら一人ひとりから多くのことを学習しました。

発見したことがあります。それは、

家族が、
健全で
活力ある

優れたものになろうとするならば、
幸せになりつつある道を歩んでいる、
ということです。
皆さんは、
どうしたらそういう家族になれるか、
発見してみたいとは思いませんか？

健全な家族になるために

幸せな家族になっていく総体的なアプローチにおいて、健全さは、家族が幸せであるための第一の条件です。

健全な家族とは、　どのようなものでしょうか？

1　愛に満ち、一致していて、オープンな心をもった健全な夫婦が、健全な家族の根っこであり土台となるものです。

2　お互いに尊敬を抱き、高く評価し合っています。

3　互いに信用と信頼のきずなでかたく結び合っています。

4　家族の一人ひとりが皆、ダイレクトで生き生きした通じ合いの心でつながれています。

5　家族の個々人が、それぞれの自尊心と自制心を保てるよう、互いに励まし認め支え合っています。

6　一方的に依存する、あるいはひとりよがりで行うより、むしろ互いに助け合いながら物事を行います。

7　遊びと好ましいユーモアの精神をもって、前向きで喜びにあふれた環境をつくり出します。

8　責任分担と協力の力を養い育てます。

9　家族の力を発展させ、もちものを上手に活用します。自分たち家族の伝統や習慣、家庭でのお祝いごとを大切にします。

10　ことばよりむしろ行いをもって、互いに教え合います。良心について、誠実について、忠実、真理、善、美について。

11　オープンな心ともてなしの精神に富み、どのように人に奉仕すべきか、自分の家族のメンバーを教育します。特に困っている人に対しての奉仕、ふさわしい具体的な助け方について教育するのです。

12　同じ神に共に祈りを捧げます。単なる神頼みではなく、彼らの祈りは、神がいてくださること、神のすばらしい賜物について感謝を捧げることが中心となります。

内省と分かち合いのために

1　家族としての健全さという視点から見て、私たちの家族は、どのような状態にあるでしょうか？

2　前述した、健全な家族の12の特徴のうち、私たちの家族はいくつあてはまっているでしょうか？

3　より幸せな家族に成長していくため、私たちの家族は、前述の特徴をどのようにして発展させていくことができるでしょうか？

活力ある家族になるために

幸せであるためには、体と同じで、健全であるだけでなく、力強くある必要があります。

活力ある家族になるために、何が必要とされるでしょうか？

1　自己認識（自分がかけがえのない存在であることを認める）。そのための、プライベートな時間と場所。
2　相互の尊敬と励まし。
3　心から（理性と情緒を総動員して）互いに耳を傾けること。
4　相互の信用と信頼を皆がもつこと。
5　各人をありのままに、また、各人がなりたい姿をありのままに、互いに受け入れること。
6　よりよい理解のために、相手の立場に立ってみること。
7　毎日の小さな奉仕や行いを通して、互いに愛し合うこと。
8　夫婦水入らずで、あるいは家族ぐるみで、定期的に対話を行うこと。
9　家族としての大切なひとときをすごすため、一緒に計画を練ること。
10　楽しみとレクリエーションのためだけに、一緒に時をすごすこと。
11　ものごとを一緒に行うこと。
12　わかりやすく融通性のある、家族なりのルールを作り出すこと。
13　夫婦・家族として和解をしばしば行うこと。
14　共に協力し合って、問題や危機に肯定的に取り組むこと。
15　分裂させることではなく、むしろ一致させることを探し求めること。
16　その時々のニーズにあった、助けと支えを探求すること。
17　オープンな心をもち、もてなしの精神に満ちた

家族であること。

18　神の掟に即して生き、そのご意志を果たすよう努めること。

19　家庭でもどこででも、共に神を賛美すること。

20　家族生活にとっての重要な時をお祝いすること。

内省と分かち合いのために

1　家族としての活力という視点から見て、私自身の家族は、どのような状態にあるでしょうか？

2　私の家族において、明らかに弱さを表す徴候となっているものは、何でしょうか？

3　家族の力強さを示すものとして、私の家族には、どのようなしるしがあるでしょうか？

優れた家族になるために

健全で活力に溢れた家族ならば、当然、優れた家族でもあるものです。優れているということは、何かのテクニックや方法論によりかかったものではなく、もっとより深いものに根ざしています。

どうすれば、優れた家族になれるでしょうか？

1　個人として成長し、家族に対しより貢献することによって。

2　お互いにより深くかかわり合うことによって。共にすごし、忠実と勇気に満ちた心をかけながら、お互いと家族全体を励まし支え合うことです。

3　家族としてのきずなを強化することによって。強く深い通じ合いと定期的な対話を体験するのです。お互いに対していつもスタンバイOKであるようにします。一緒にものごとをします。自己

奉献と喜びの精神のうちに、互いに奉仕し合います。

4　お互いに自分自身を分かち合うことによって。

あますところなく互いに分かち合うのです。確信、信条、感情、強さも弱さも、態度、価値観、ニーズ、選択、目標、優先順位、恐れ、関心、望み、夢など分かち合うのです。

5　共に聖書のみことばを読むことによって。

神の理想とご意志から見て、真に「優れている」とはどういう意味かを発見し理解するのです。

6　現実を十分ふまえて、家族あるいは家庭とかかわることによって。

争いが起こる可能性があることを十分認識し、口論がもちあがったとしても、肯定的かつ知恵深くそれに対処していきます。

7　ゆるしの精神をたびたび体験することによって。

自分自身の不完全さ、弱さ、限界を認識し受け入れるわけです。

8　お互いの接し方に関して合意したルールをもつことによって。

一個人として各自を認め、全員のその権利を尊重し、理にかなった家族のルールを発展させていき、家族でそれぞれ自分のすべき分担をもつことです。

9　家族外の世界への関心をはぐくみ育てることによって。

家族に閉じこもってしまうような悪循環を避け、さらに、いつでもどこでも人びとに開かれたかけ橋としての役割をもてるよう努めます。

10　他の家族で問題を抱えている人（困っている人）を一所懸命世話することによって。

必要に事欠く人に心から自発的に手をさしのべ、隣りの家族のために家事をボランティアでかってでたり、家族に関する政策が平等なものであるように働きかけたり、教会や何らかの共同体プログラムに参加するわけです。

内省と分かち合いのために

1　私たちは、家族としてうまく機能しているでしょうか？

2　優れた家族になるための前述の10のステップを見て、私は、何を考えたでしょうか？

3　私たちが、家族としての真実な実りをさらにもたらすためには、何がキーポイントとなりうるでしょうか？

第3章
家族として歩む幸せへの道のり

ここまでのところを、
しばらく振り返ってみましょう。
すると、
次のようなことが見えてくるでしょう。
つまり、
幸せな家族の特徴といっても、
ほんとうに数多く、さまざまだ！
ということです。
しかしながら、
健全で、活力に満ち、
優れた家族に共通する、
いくつかの実践的なポイントも
見えてきます。
すなわち、

人
関係（きずな）
通じ合い
愛
信仰
オープンな心
平和

が、それにあたります。
ですから、
現代の家族にとっての
幸せの鍵となる
この7つの重要なポイントを、
それぞれさらに
成長させていこうではありませんか!!

人として成長するために

家族を構成しているものは、人です。人は、ひとりぼっちではありません。ロビンソン・クルーソーのように離れ小島にひとりっきりで暮らすような存在ではないのです。別の言い方をしてみましょう。人は、ひとりでは生きることのできない完成途上の存在です。他人とのかかわりの中に生きるということは、どの人にとっても必須条件です。人間関係の中でこそ、人は個人となりうるわけですから。

家族において、一人ひとりのメンバーは、ユニークな人間です。私たちは、ユニークな存在として成長し成熟していかねばなりません。これこそまさに、家族が存在することの核となる目的です。家族が幸せになっていくには、人間らしい共同体が必要です。そのような共同体には、しっかりした自尊心と、他人に対するオープンな心が備わっているものです。これがなければ、家族の中であろうが外であろうが、健全で、活力に満ち、優れたきずなを築いていくことなど、できない相談です。つまり、家族が、「人間らしさを学習する場である」ことは、きわめて重要です。

自己認識

さて、健全な人として成長するための最初のステップです。それは、自分自身の中にあるすばらしい価値に目覚めることです。つまり、神の似姿（イメージ）として、私たちは創造されたということです。自分自身をよりよく知るためには、次にあげた質問について内省し答えていく努力が必要です。

▽私は、自分を、ひとことで言えば、どのような人だと思っているでしょうか？

▽何が、私の弱さであり限界でしょうか？

▽私の力と言えば、何でしょうか？

▽私は、どのような方向性をもって歩んでいこうとしているでしょうか？　何をするつもりですか？

適切な自尊心

では、活力に満ち、成熟した人間として成長するための、第二のステップです。それは、公平で、正しく、バランス感覚を備えた適切な自尊心を得ることです。この自尊心とは、以下の事柄に根ざしています。

▽自己を尊重する
▽自己に正直である
▽自己を受け入れる
▽自己を信頼する

自己をオープンにする心

健全で、力強く、優れた人間として成長するための、第三のステップは、これです。すなわち、自分自身だけではなく、神と他の人びとに対して開かれた心をもつことです。もちろん、まず最初に、自分自身の家族のメンバーから始めなければなりません。以下のことを分かち合うのです。

▽自分の感性と感情
▽自分の考えと望み
▽自分のもちものと、すること

内省と分かち合いのために

1　私は、成熟し生き生きした人でしょうか？（はい／いいえ）
「そうだ！」と言えるしるし、あるいは「そうではない……」しるしをあげてみましょう。

2　私は、自分自身をありのままに受け入れているでしょうか？（はい／いいえ）
そのことを示す肯定的あるいは逆の否定的なしるしをあげてみましょう。

3　もっと自分らしくなっていくために、私は、どのようなステップを歩まねばならないでしょうか？

きずなを深めるために

世の中に必要なことは、意味深い関係があること、そして、人びとが愛をもって互いに接することです。

現代にとって真の脅威といえる危機は、テクノロジー中心の未来や需要供給の流通、あるいはさまざまに決められる経済的政策などにあるわけではありません。

これらすべての問題、あるいは他のあらゆる危機というものも、それらのさらに奥底に横たわる問題に対する答えを見いだすならば、ただちにかつ効果的に解決されうるのです。根底的なその問題とは、つまり、人間関係にはばをきかすジレンマ、選択の難しさという問題です。人はみな、このジレンマの中で、理解・調和・協力・平和をもって生きられる道を共に模索しているのです。

より理解されるようになってきたものの、この根本的な問題は、決して、一足飛びに一挙に解決されるようなものではありません。むしろ、日ごろの地道な事柄から解決されるべき問題です。

より広い範囲で社会的にかかわりをもつ以前に、人びとは、核となるグループにおいて、個人的なかかわりを学ぶべきなのです。私たちは、その核となるグループのことを、家族とか家庭と呼んでいます。

親密なきずなを作るコツを個人が効果的に学ばなければ、結局、人間のあらゆる疎外、不信、孤立のタネとなります。

そのような状況から生まれた歪みと分裂は、さらにいっそう、あらゆるレベル・あらゆるグループに広がっていき、地域社会、国、果ては世界中の社会そのものをも破壊してしまうのです。

関係というものが、私たち一人ひとりにとってきわめて重要だというのは、まさに現実です。関係こそ、家族が家族たりえる「核」といえるものです。関係は、家族にとって、より親密で聖なる事柄なのです。

実際、神は、どの関係においても、その根底に存在しておられます。

神は、「ご自分にかたどり、ご自分に似せて」男と

女とを創造されました。私たちキリスト者はこう信じています。すなわち、神ご自身こそ、神秘的で、愛深く、永遠の「関係（きずな）」そのものなのだ、と。つまり、父と子と聖霊の完全な一致の「きずな」として。

神と他人に対する愛にあふれる関係（きずな）がないところ、私たちが平和のうちに暮らしえないのは、まさにこの理由によるのです。

心理学者エリック・フロムは、この現実を断言し、こう定義しています。

人間にとってもっとも深いニーズとは、
孤立の牢獄から脱け出ようとして
分裂という己が傷を克服することにある。
これをまったく達成しえないならば、
つまり、
それは、
「心が正常でないこと」を意味する。

家族のきずな

家族の幸せにおける最重要の要因のひとつは、そのきずなの質（クオリティー）です。一対一の関係のことです。

本質的にみて、家族とは、家族同士の愛に溢れたきずなであり、家族のメンバーと隣人、そして神との関係（きずな）のことです。

関係（きずな）が生まれ育っていく場所としてふさわしいのは、家族です。関係（きずな）を学ぶもっとも最初の土台となる場は、家族なのです。自分自身の家族との人間関係がどのようなものであるかによって、家族以外の人びとあるいは神とのかかわり方は大きく影響されます。

離婚、妊娠中絶、家出、遺棄、結婚や家庭の崩壊、アルコールや麻薬の中毒、性的虐待、非行などに代表される今日の悲惨は、家族・家庭のきずなが破壊され、冷えきってしまっている状況を示す、その徴候となるものです。

家族のきずなが愛に満たされているならば、「家族」は「家庭」としての役割をもつようになるのです。

ある先生がクラスの子どもたちに「幸せって、どのようなもの？」と質問しました。ひとりの子がこう答えました。「お父さんと一緒に海岸を散歩しているとき、それが幸せ。ほかの人じゃないの。ただ、お父さんと私だけのとき」

愛に満ちたきずなとは？

▽家族を家族とする、その「核」となるものです。

▽神の愛のエネルギーを解き放つ秘訣となるものです。このエネルギーは、どの（結婚している）夫婦、どの家族、どの家庭の中にも隠されているものです。

▽聖書によれば、神の神秘の本質です。

▽結婚の秘跡をまっとうしている姿・模範です。多くの神学者がこう主張しています。

▽寛容な共同体にとっての心（精神）です。現代の、考古学・心理学・社会学の専門家たちはこう言っています。

▽人間の危機・衝突・問題・戦争を解決する唯一の手段・道。

Q 内省と分かち合いのために

1　私の家族は、愛に満ちた関係（きずな）を大切にしているでしょうか？（はい／いいえ）

それを肯定するしるし、あるいは逆のしるしをあげてみましょう。

2　私は、自分の家族の一人ひとりと、どの程度深くかかわっているでしょうか？

3　神と私との個人的な関係（きずな）は、どのような状態でしょうか？

4　よりよく愛する人になるため、私には、何ができるでしょうか？

新しい家族のきずなをめざして

現代の多くの家族における、夫婦・親子・兄弟姉妹間のかかわり合いに、確かな革命が起きつつあります。家族のきずなは、よりよい方向に向かって、根底から変革しつつあるのです。この変革こそ、現代の社会変革の根本をなすものです。つまり、

▽より民主的で、よりオープンな家族・社会へ。
▽現在だけでなく将来に対しても、より深い関心をもつ家族・社会へ。
▽家族と、家族のきずなのもつ可能性に、より目をすえた家族・社会へ。

ですから、夫婦・親子・兄弟姉妹間のきずなは、次のようになっていこうとしているのです。

▽より意義深い人間関係に根ざしたきずなへ。
▽より自発的で、より率直なきずなへ。
▽より正直で、より真実なきずなへ。
▽より成熟し、より深いきずなへ。
▽よりダイナミックで、より責任あるきずなへ。
▽自分の殻を出て、いっそう互いに手をさしのべ合うきずなへ。
▽より民主的で、より自由に根ざしたきずなへ。
▽共にいっそう探求し続けるきずなへ。
▽神をより中心に据えたきずなへ。
▽より支えとなり、より実践的なきずなへ。
▽より満ち足りたきずなへ。
▽より豊かなきずなへ。
▽より平和に満ち、より喜びに溢れたきずなへ。

この変革をにぎる「鍵」とは、いったい何でしょうか？　より深く奉仕し合う、「家族」という名にふさわしい家族になるためには、さし迫ったニーズが存在しています。つまり、何かを所有したり何かを行うことに心をとらわれないようにするニーズです。そういうとらわれた心こそ、家族の堕落と不一致の主要な原因なのですから。

通じ合いを強めるために

さて、今度は、現実にしっかり目を向けながら、家族の関係に関して正直な疑問を投げかけてみようではありませんか。

▽調和した家族関係を実際に満喫している家族を、私は、何組知っているでしょうか？　自分自身の家族も含めて、考えてみましょう。

▽家族の愛に満ちたきずなとは、一夜にしてできてしまうものでしょうか？

▽現代の一般的な家族に目を向けたとき、私は何を思うでしょうか？

▽現代の家族が抱えている危機、衝突、問題、頻繁におこるストレスに目を向けた場合はどうでしょうか？

▽親子の間にある、いわゆるジェネレーション・ギャップと言われるものについてはどう思いますか？　どうすれば、そのギャップを乗り越えることができるでしょうか？

▽家庭において増え続けている、さまざまな暴力についてはどうでしょうか？　配偶者や子どもの虐待、麻薬・アルコール中毒、ティーンエージャーの間に蔓延する婚外妊娠、家出や家族遺棄、青少年非行、犯罪行為や自殺増加の傾向など。

▽問題を抱え不幸におしつぶされているこのような家族が、そのきずなを建て直すためには、何がキーとなるでしょうか？

▽このような悲惨な精神的傷（トラウマ）を前もって防ぐため、家族には何ができるでしょうか？

▽どうすれば、家族は、いやしを体験することができるでしょうか？

このような苦痛に満ちた状況を体験し、それを克服してきた家族こそ、その体験と証しを通して、解決への答えを提供してくれます。

そうです！　悲惨を回避し、いやしをもたらす術（すべ）はあるのです。

家族のメンバー全員が、創造的かつ効果的な通じ合いをする！　これこそ、その術です。

通じ合い

通じ合いとは、

▽健全で、活力があり、ふさわしい関係をもつための必須条件です。

▽現代の家族にとって、もっとも重要かつ緊急を要するニーズです。

▽結婚・家族生活にとって、その土台石となるものです。

▽家族が、お金・時間・エネルギーの使い道を考える際、まず第一に優先すべき事柄です。

▽もっともはっきりと、愛を表現したものです。

▽主イエスがその弟子たちに命じた「おきて」です。

通じ合いとは、どのようなものでしょうか？

▽人と人とが心を通い合わせることです。家族の一人ひとりのメンバーと、間に何も介さず直接に通

じ合うのです。

▽家族の一人ひとりのメンバーがなろうとしている、あるいはなりたいと思っているものになっていくことを効果的に援助する、創造的なかかわり方です。

▽ふたりの人、ふたつのグループが、自分自身を与え合い、受け入れ合う一方通行ではないきずなです。

▽自分自身を分かち合う手段です。

つまり、次のような事柄を分かち合います。

考え　判断　信条　態度　感情
感覚　心の動き　恐れ　希望
期待　望み　失望　挫折　苦しみ
喜び　選択　目標　優先順位
意向　成功　失敗　強さ　弱さ
可能性　限界　疑い　誘惑　ニーズ
価値観　個人的体験　才能　賜物

▽共に家族ですごす時間です。

通じ合いがないならば、私たちは、成熟した人間になっていくことができません。逆に、身勝手な人間、ロボット、「物」になり果てていくのです。孤立と寂しさに終止符を打たねばなりません。

人と人が頻繁に心を通わせ合わないならば、そこには、家族あるいは共同体と言えるものは存在していないのです。

家族の中に創造的で実際的な通じ合いが欠けていると、きずなが破壊されるおもな原因となります。結婚は崩壊し、家族は分裂し、社会の悲惨が生まれてくるのです。

第4章
創造的な通じ合いを実践するための鍵

家族における通じ合いとは、
こう定義できるでしょう。
すなわち、
家族のメンバー間に生じる
「行い」と呼ばれるものを
集約したもの。
互いにかかわり合わず、
通じ合いをしないならば、
そこには、
家族らしい何物も存在していないのです。

この世に生を受けて以来、
通じ合いの回路は、
作動可能な状態です。
したがって、
家族としての通じ合いを強化するための
第一歩は、
「家族のメンバーが
かかわり合うということは、
『通じ合い』をすることなのだ」
と、肝に命じることです。
しかし、
家族の通じ合いを
創造的で
実践的なものにしていきたいならば、
それだけでは十分とは言えません。
ですから、
積極的かつ肯定的な、
さらなるステップに
進んでいかねばなりません。
つまり、

対話
和解
相互の信頼
のステップです。

定期的な対話

ことばを使うにせよ使わないにせよ、通じ合いにはたいへん多くの方法があります。話し合い、目での合図、触れ合い、何かのしぐさ、顔の表情、サインなど……。ことばを使った通じ合いのうち、もっとも創造性に富み効果のある手段のひとつは、対話です。

対話とは何でしょうか？

ふたりの人、あるいはふたつのグループの人たちが、言葉を交わし会話することです。尊敬と愛をこめて互いに耳を傾け合い語り合うのです。

▽聴く。創造的で効果がある対話を実践するために、「聴く」ことは、とっておきの鍵となるものです。真心から聴くことは、たやすいことではありません。実際のところ、「聴く」ために求められる秘訣は、それぞれの人の誠実さ、たゆまぬ努力、実

践することです。単に音として「聞く」以上のことが求められるわけです。耳を傾けるのと同時に、相手の目をしっかり見て、積極的に「聴く」姿勢です。

▽話す。つまり、自分自身の意見・信じていること・感情・生き方・判断・選択・関心・期待などを分かち合うことを意味します。

▽尊敬をもって。聴くときには、相手の話をさえぎることなく、礼儀とデリカシーのある態度で分かち合います。

▽愛のある態度で。単に頭だけで理解しようとするのではなく、おもに、心から相手に耳を傾け、分かち合うことです。さらに、聴き合い語り合っている相手の立場に立つよう努めるわけです。

▽定期的に。自発的に、週一・二回のペースで行います。

充実した時と誓約

熟練した夫婦たちの証しを聴いてみますと、対話がマンネリでなく深みのあるものとなるためには、充実した時間（だれもが生き生きと楽しむ時間）をすごす必要があることがわかります。加えて、家族のメンバー一人ひとりが、そのような時間をすごすために、自発的に自分なりの誓約を立てる必要もあるのです。充実した時間と誓約がなければ、対話するよい意向も空しく失敗する結果に終わってしまうでしょう。家族ぐるみでの対話は、メンバー全員の誓約として、第一に置かれるべき事柄です。

しっかり心しましょう。

私が時間を費やす場、
そこに、私の人生があるのです。
私の人生がある所、
そこに、私の愛が生まれます。
私が愛するならば、
そこに、
私の幸せが見いだされるのです。

ですから、家族と共にすごす時間があるならば、それが幸せなのです。

◎内省と分かち合いのために

1　家族で一緒にすごす時間を、実際のところ、私は大切にしているでしょうか？（はい／いいえ）
　具体的な体験をあげてみましょう。

2　私の家族では、どんな対話が行われているでしょうか？

3　私は、自分の家族の一人ひとりと心を通わせ合っているでしょうか？（はい／いいえ）
　具体的な出来事をあげてみてください。

頻繁に和解を体験する

ほとんどの家族の証しや体験によれば、「頻繁に和解すること」こそ、一致を実践するための前提をなすものだそうです。頻繁に和解し合えば、それこそ、家族の危機を脱するための鍵となり、家族に起こるあらゆる問題を解決する、その基礎をなすはじめの一歩となるのです。さらにこうも言えます。すなわち、「和解は、あらゆる心の傷をいやす最高の薬だ！」と。

事実、和解が唯一の手段となり、私たちは、家族の内外を問わず、自分自身・神・他人と平和でいられるわけです。

社会が平和でないというならば、それは、家庭に平和がないことが発端なのです。

和解とは、いったい何でしょうか？

ゆるし合い、また、ゆるしを受け入れ合う体験が、

和解です。ゆるすか、ゆるさないか、この選択は、現代の夫婦・家族にとって、大きなチャレンジとなっています。

ゆるしとは、どのような事柄でしょうか？

▽ゆるしとは、和解を和解とする「魂」ともいえるものです。

▽ゆるしは、人間ならではのものです。動物どうしに、ゆるしは存在しません。

▽ゆるしは、真の愛があるかどうか試すものです。

▽ゆるしは、神からのものです。謙遜な人に与えられる神からの恵みです。

▽ゆるしは、信仰による祈りの結果もたらされる実りです。

▽ゆるしは、ナザレのイエスの福音の神髄です。彼以前にも以後にも、イエスのように教え実践した人はいませんでした。したがって、

▽ゆるしは、イエスのまことの弟子であることを示す、第一の特徴です。

なぜ、ゆるしは、頻繁に実践されていないのでしょうか？

真心から人をゆるすのは、簡単ではありません。また、ときには、人からゆるしてもらうことは、さらに困難でもあります。ゆるしが実践されない原因の最たるものは、自己本位、あるいは、寛大な愛が欠如していることです。プライドや正直さに欠けていることが障害となり、すなおにゆるしてもらうことは難しくなります。

家族が和解を実践するための秘訣

配偶者同士・親子・兄弟姉妹・親戚などが、互いにゆるし合えるようになるためには、どうすればよいでしょうか？

次の事柄が、その秘訣となるでしょう。

▽自分に正直になり、謙遜であること。自分自身の犯した失敗・欠点・弱さ・限界・不完全さに意識的になることです。

▽自己を受け入れること。まず最初に、自分自身をゆるせるようになることです。

▽真の愛。そこには、自分本位な思いが隠れているようなことはありません。
▽神との親密な関係。真のゆるしを与えてくださるのは、神だけです。神の恵みなくして、真に相手をゆるし、そのとがを忘れることなど、不可能です。

内省と分かち合いのために

1　私たちの家族には、今以上の和解が必要でしょうか？（はい／いいえ）

相互の信頼

相互の信頼は、家族が幸せになるうえで、もうひとつの秘訣となるものです。一致し開かれた家族になろうと、前向きに歩む人たちは、皆そう言っています。しかし、たいていの家族はここでつまずいてしまうのです。互いにかかわりをもち、通じ合おうとする際、恐れと浅はかな思いにとらわれてしまっているのが現状です。そんなことでは、つまり、相互の信用と信頼がなければ、深い通じ合いや真の対話などできません。

相互の信頼とは、何を意味しているのでしょうか？
▽深い通じ合いを行うための必須条件です。真の出会いと発見をするために必要とされる条件なのです。
▽自分自身を他人に委ねることです。
▽真実の友情にとって、その基本的な要素です。

▽お互いにオープンな心でかかわり合うことです。
▽自分自身の個人的な体験を分かち合うことです。
▽自分自身・他人・そしてその関係に忠実であること
　　です。

相互の信頼は、どうすれば、
活発に働き始めるでしょうか？

相互の信頼は、通じ合いを一歩一歩積み重ねていった結果です。まず、ごく小さなことから分かち合い始めます。さして重要ではない事柄から始めるのです。自分自身の親密さと個人的な秘密を、少しずつ表していけるようになるためです。相互の信頼は、インスタントにできることではありません。

もうひとつ意識すべきことは、「信頼は、強要するものではない」ということです。それは、克ち取っていくべきものです。このことがわかってくれれば、だれかの信頼をものにしたいと心の底からそう思ったとき、その人は、愛と信頼をもって自分の秘密を打ち明け始めるようになるのです。そうすれば、失われた親密さも、ただちにそして容易に戻ってくることでしょう。

他人を心配させないため、人は打ち明けずに黙っているべきでしょうか？　こんな態度は、うそが常習となる結果を生むでしょう。たいていの場合「打ち明けない」のは、恐れのため、あるいは信用や信頼が足りない結果、本当の真実を言わない言い訳にすぎないのです。

しかし、ごく小さな事柄に耳を傾ける用意ができていたにしても、個人的な秘密を聴いてあげる準備までできているわけではありません。あまりにも早急に秘密を打ち明けられたがため、傷ついてしまうこともあります。そのような秘密を受け入れる条件を自分たち自身の中に整えなければなりません。そうすれば、ふさわしいときに、心からの誠実さをもって、互いの秘密を受け止めることができるでしょう。

信頼の相互通行は、善意と日々の積み重ねを要する技術なのです。

内省と分かち合いのために

1　家族のメンバーと分かち合うのが困難だと感じている私の体験には、どのようなものがあるでし

ようか？　なぜ、そう感じるのでしょうか？

2　自分自身の態度を成長させるために、私には、何ができるでしょうか？

第5章
愛のエネルギーを放出するために

どの家族の中にも
愛の神秘的なエネルギーが
存在しています。

もし、それが活動を始めるならば、
世界中に
真の愛の革命を
もたらすことができるでしょう。

しかし、

その内的エネルギーが、
人間の心に
愛の核融合反応を生じさせるためには、
家族全員が
真心から協力一致して
愛のエネルギーを
放出させなければなりません。

これは、
心からの愛をもって
互いに
自分自身を与えることを通して、
実践されるのです。

愛とは何か？

多くの哲学者・科学者・詩人らは、愛の何たるかを定義しようと模索してきました。しかしながら、ありきたりな方法では、定義することはとても困難です。個人的なレベルでは、愛の何たるかを、何となくわかってはいるのですが、実際にことばで表現するとなると、なかなかたいへんです。一般的には、次のように愛を定義することができるでしょう。

愛は、人生の目的・意義

私たちはだれしも、愛のために生まれてきました。愛され、愛することは、人生においてもっとも大きな体験です。これこそ、人生の目的なのです。

私たちの存在全体は、愛と結びついたものです。なぜなら、愛は、人間の幸福と密接に結びついているからです。真の幸福は、真の愛のあるところにのみ見いだされうるものです。

自分が実際には愛を探し求めているにもかかわらず、そのことには一切目を向けず、多くの人たちが、快楽・お金・権力を求めてひた走り、己が人生を浪費しています。愛のない人生には何の意味もない、というのはこの理由によります。

人間の中に秘められた神秘の本質

感嘆と驚嘆の気持ちをもって他の人を眺めるとき、あるいは自分には及びもしない考えや行いを、だれかがものにしていることに気づき、尊敬のまなざしを送るとき、さらに、他の人のすばらしさを畏敬の念をもって眺めるそのとき……、私たちは、愛の世界に足を踏みこんでいるのです。

ある人の中に神秘を感じとると、私たちは、その人の中の可能性が無限であることを認識し始めます。そして、表面にうかがいえない、より以上の何かが心の中に存在していることに気づくのです。

つまり、それは、「その瞬間、私たちは、その人の中に神の現存を感じとっている」ということなのです。

目に見ることのできないその神秘とは、神だからです。

ところで、私たち人間が心に抱く、こみいった考えや意見のすべてを超越して、聖書のみことばは、私たちにこう啓示してくださいました。すなわち、「神は愛である」と。さらに加えて、神は、男と女を「御自身にかたどり、御自身に似せて」創造された、とあります。

したがって、愛とは、愛の神秘的なエネルギーそのものです。それは、私たち人間それぞれの心の中に隠されているものです。その神のエネルギーは、発見され放出されることによって、宇宙を変容させる日を今か今かと待ちかねているのです。

真理と愛は、今は、隅に追いやられてしまっています。しかし今ここで、私は、真理と愛に裏打ちされた新しい文明の、新しい家族について思いをめぐらし夢見ながら、ティヤール・ド・シャルダンの預言的なことばを、皆さんのために引用したいと思います。

「いつの日か、
風・波・潮・引力を支配したそののち、
我々は、
神によって、
愛のエネルギーを
統率する日を迎えるだろう。
こうして、
歴史上ふたたび、
人は、
『火』を発見するに違いない。」

愛の意味

幸せな家族生活を営むための鍵の中の鍵と言えるものを見いだしたいのなら、現実に根ざした、愛の本質を発見し、家族としての自分たちの愛はどのような状態にあるか、見つめなければなりません。

おわかりでしょうが、これは、なまやさしい仕事ではありません。

真の愛の本質を歪める風潮が広く蔓延しています。それは、愛を、セックスの本能・性的魅力としてのみ見なす傾向です。これは、まちがったものです。なぜなら、真の愛を構成する本質的な要素のひとつは、「自由」だからです。本能は、とらわれたもので、そのままでは、「自由」ではありません。

また、感情や情緒の高まりを野放しにすることが、愛をつくりあげる！　というのもまったく違います。想像力（イマジネーション）は、どうでしょうか？　もちろんのこと、想像力が愛の要素であることなどありえません。イマジネーションは、現実を歪めてとらえてしまうからです。想像力は、知性によって司（つかさど）られるべきものです。知性によってこそ、私たちは現実を把握し知るべきです。こうすれば、イマジネーションは、愛の大河をつくる支流としての役割を果たすでしょう。

では、愛の本質とは、知性なのでしょうか？　だれかを愛するがゆえに、その相手を知らねばならない、ということはあります。しかし、「相手を知ったからといって、必ずしもそれが、相手を愛していることにはならない」というのは自明のことです。愛は、私たちの自由意思によるものです。ですから、知識が、愛を構成する重要な要素であるにせよ、知性のうちに愛が生じるのが基本であるとは言えません。

確実なことは、愛の核をなすものは意思の中に宿る、ということです。それぞれに備わっている意思の力によって、私たちは、知性によって発見した現実を、受け入れることも拒絶することもできるわけです。

受け入れたり拒んだりする選択の余地があるということから、つまり、「意思は、自由をその性質として

もっている」ことがわかります。自由に、私たちは何かを受け入れるのです。強制によるものではありません。人間の愛は、自由に基づくものでなければなりません。

したがって、愛を愛たらしめる核心は、自由意思による決意にあります。そのような決意なら、私たちはそれを「受け入れ」と呼ぶことができるでしょう。「受け入れ」は、ありのままの相手を丸ごと受容してしまうものです。

当然ながら、「受け入れ」には程度というものがあり、さまざまな認識や気づきに先導されていくものです。さらに、そこには、さまざまな心の動き、感覚や感情が伴います。

これこそ、普遍的で、かの有名な「愛している。(I love you.)」ということばの意味するところです。

私は決意しました。
私は、
ありのままに
あなたを受け入れます。

だから、
あなたに奉仕することは、
私の幸せです。

愛のもつ多くの次元

愛には、多くの表情があります。しかし、基本的には、三つがあげられます。自由な意思決定と受け入れによって生まれる、三つのおもな愛の形態をこれからあげてみましょう。

1　自己を愛する

聖書を読むとわかることですが、男女はもともと、神に嘉(よみ)された被造物です。なぜならば、男女は、神的光を反映する肖像(うつしえ)だからです。この神的光によってこそ、人間は、暗闇に輝き渡り、かけがえのない、高い価値をもちうるわけです。私たちの中の「自己」というものに価値があるのですから、自己に強い愛着を覚え、何とかそれを受け入れようとする傾向をもつとしても、ごく自然なことです。さらに、自己は、受け入れられることによって、確固たるものになっていきます。

これは、かたよりのない正しい自己愛の姿です。この愛は、自己本位とは相容れないものです。自己本位とは、自分をあまりに低く見すぎたり（自己卑下）、逆にあまりに自分を主張しすぎること（高慢）です。自己を正しく愛してこそ、隣人をふさわしく愛することができるのです。ですから、聖書は私たちにこう語りかけてきます。「自分自身を愛するのと同じようにして、他人を愛しなさい」と。

2　隣人を愛する

自己を愛する際、自分自身に価値があるからこそ、私たちは、自己を受け入れるわけです。隣人を愛する場合、私たちが受け入れなければならないのは、その人の中にある自己ということになります。その人の自己も、私たちと同様の価値をうちに有しています。なぜなら、彼らもまた、私たちと同じように、神の肖像(うつしえ)だからです。

ですから、私たちが隣人を愛するといった場合、つきつめていけば、神がその人の中に備えられた価値を

認め、受け入れ、さらに、自分たちも望んでいるその同じ善が、その隣人にも与えられるよう願う姿に集約されます。ですから、私たちが自身の統一を求め、それを確立していこうとするならば、隣人が自己を統合し、確立していくことをもまた願うべきなのです。

実際を見てみると、私たちが隣人に対して抱く愛には、さまざまな異なる種類が存在しています。エロティックな愛、友としての愛、結婚における愛、家族愛、共同体的な愛、さらに宇宙を包含するような愛まであります。

これらすべての愛は、神の愛に起源をもち、神の愛と内的かかわりがあります。神こそ、あらゆる真実の愛にとって、その共通の源となるものです。ですから、人間は皆、神によって受け入れられ愛されており、だからこそ、私たちはこの愛に感謝し、存在でき、人からも愛され、また人を愛することが可能なのです。

3　神を愛する

聖書によると、神は、私たち人間に価値があったから私たちを創造されたのではありません。愛そのものである神は、私たちを、愛される価値のある存在として造られたのです。聖アウグスチヌスは次のようにコメントしています。「私たちが善い存在だから、神が私たちを愛してくださるのではなく、神が私たちを愛してくださるからこそ、私たちは善きものなのです。」まず、神が私たちを愛してくださいました。事実、この源となる愛があってこそ、他のすべての人間的な愛は生まれたのです。

この何ともすばらしい事実を発見し、それを受け入れることが最初のステップとなり、私たちは、神を愛せるようになっていくのです。第2のステップは、神により頼み、個人にとっての創造者・救い主として神を受け入れることです。第3ステップは、神のご意志を実現させるために、神からの恵みを受けとることです。以上が、男女の神に対する愛の要約です。これ以上の愛は存在しません。

家族愛

愛がどのような状態にあるかを識別するためには、家族のうちに秘められている神秘に目を向ける必要があります。

第1。家族を構成する主要な要素に的をしぼります。つまり、神、配偶者、両親、息子あるいは娘たち、兄弟あるいは姉妹にです。

第2。その要素が互いにどのように影響し合っているか、その状態を識別していきます。

第3。家族の一人ひとりの中で眠ってしまったままの、愛のエネルギーの種子は、今どういう状況下にあるか調べていきます。愛が実体験としてあるかどうか見極めることは、それぞれの関係の状態を調べるための「はかり」として、しばしば有効です。

第4。家族として、神を今、どのように受け入れているか探り、発見します。

第5。自分の家族がどの程度まで心を開いているか、評価を下します。

このワクワクする冒険に踏みこんでいく手助けとして、以下にあげた、家族愛のそれぞれの次元について内省し深めていくことは、たいへん役立つでしょう。

1　結婚における愛。配偶者同士の愛です。家族愛の土台をなすものです。聖書によれば、結婚における愛の要素は、神に根ざしたものです。要素を具体的にしてみましょう。愛情・尊敬・認識・世話・優しさ・親密さ・セクシュアリティー（男女それぞれの特性を活かして補い合うこと。セックスに限定されない）・受け入れ・通じ合い・理解・信頼・友情・真実さ・貞節・無条件さ・誓約としての一致・子ども・神・他人との分かち合いおよびオープンさなど。結婚における愛は、愛における三位一体的神秘です。すなわち、神と男と女の間に交わされる愛に満ちたきずな。

2　親としての愛。結婚における愛は、自分たちの

子どもたち（息子や娘たち）に対する愛の土台を造るものです。実際、子どもは、結婚における愛の実りとなるものだからです。親としての愛の主要な要素は、次のとおりです。すなわち、尊敬・認識・受け入れ・理解・責任・世話・自己奉献・励まし・信頼・正義と自由・ゆるしを願いまたゆるしてあげること・慈しみと思いやり・耳を傾け子どもたち全員から学ぶ態度・忍耐と堅忍・誓約……、そして、いつでも心の扉を開いていることです。

3　子としての愛。両親に対する、息子・娘としての愛は、次のような事柄に特徴づけられるでしょう。すなわち、尊敬・オープンさ・真実さ・正直・積極的に聴く姿勢・信頼・忠実・従順・責任・支え合い・認め合い・感謝・ゆるしを願いまたゆるすこと・協力……、そして、両親が年老いたとき、その世話を惜しまないことです。

4　兄弟姉妹としての愛。兄弟姉妹の間にある愛は、次のようなことばで表されるものです。すなわち、尊敬・団結・守りと支え・世話……。さらに次の金言は特徴的です。「あなたは、自分自身を愛するかのように、あなたの隣人を愛しなさい。」

家族愛を深めていくためには、
どうすればよいでしょうか？
ナザレのイエスが、
その答えをもっています。
「私があなたがたを愛したそのやり方で、
あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

第6章
家庭で神を発見するために

家族とは、
神が発明されたものです。
家族を創造した神は、
彼らが幸せになることを望んでおられます。
神は、どの家族の中にも住んでおられます。
神のことなど
まったく気にもかけない家族の中にさえ、
神はおられるのです。
いったいだれがこんなこと、
信じられるでしょうか？

私たちが暮らすこの社会は、
物質・快楽・テクノロジーを
価値観の中心に据えています。
物質こそ、すなわち、食物・衣料・家・
車・機械・お金・肉体的快楽こそが、
「約束された土地」であるというのです。
物質的な事柄は、
私たちにとって真に偶像なのです。
気づいていようがいまいが、
これは、事実です。
一方、
現代の数えきれない男女らは、
家庭を満ち足りない不幸な状態に
打ち捨てたままです。
家庭で見いだしえない何かを探して、
家庭の外を徘徊します。
しかし、それでも、見つけられないのです。
なぜ？
聖アウグスチヌスは
自著『告白録』の中で、

私たちに賢明な回答を示してくれます。

「主よ、
あなたは、私たちを、
ご自身のために造られました。
ですから、
あなたのうちに休むその日まで、
私たちの心は憩いを知りません」。

神は、
ぜいたく品、得がたい何かなどでは
断じてありません。
神は、
私たちにとって、
心の奥底にある切迫したニーズなのです。
なぜなら、「神は愛」だからです。
神なしには、真の幸せはありえません。
幸いなるかな、
共に手をとり、
神を探し求める家族たち！
彼らは、見いだすであろう！

共に神を探し求めるために

家族生活を成長させ、より幸せになることを目指して真摯な努力をつみかさねても、一向に効果が見えてこない、といった場合、私たちには何ができるのでしょう？

自分たちの結婚・家族生活にとって神など重要ではないと見なし、そのために、神が私たちの家庭生活の主（あるじ）としてふるまえないならば、私たちにできることが何かある、などといったい言えたものでしょうか？

何かを失くしてしまったり、だれかが迷子になったりしたら、いったい何をするでしょう？　言うまでもなく、何とかして探し出そうと努力するのではないでしょうか？

ですから、私たちは個人、夫婦あるいは家族として不幸せだ……と思うならば、一緒に神を探すよう努力してみようではありませんか！

共に神を探し求めるためには、どうすればよいのでしょうか？

家族ぐるみで神を探し求めるためには、さまざまなやり方があるわけですが、多くの家族が体験し、また証している内容から推して、次のことは特に強調しておきたいと思います。それは、「家族としての霊性」を確立するニーズがある、ということです。これは早急に何とかしなければならないニーズで、家族生活と信仰とのはざまにある溝を埋める橋渡しとなるものです。具体的に考えてみましょう。

1　家族の一人ひとりが、神との個人的な関係（きずな）をもつことを、何にもまして優先するのです。なぜなら、神に近づけば近づくほど、私たちはお互いに親密になっていけるのですから。

2　信仰を深めること。人生の意味を見いだすためのいろいろな手段を開発し、さらに、神のご計画における自分たちの存在理由を理解することを通してやっていきます。

3　神の掟を守ること。この掟は、私たちの心に書き記されているのです。

4　和解を実践すること。家族の一人ひとりがお互いに、そして神とも、和解を体験するのです。

5　家庭で、共に祈り、神に賛美を捧げること。短くとも、毎日続けましょう。

6　神のみことばに、共に耳を傾けること。定期的に、みことばによる分かち合いをします。

7　家族に起きた出来事を振り返って見つめること。神のみことばに照らして、振り返ります。ある特定の出来事を通して、主が私たちに何を言わんとしておられるか、識別するのです。

8　家族ぐるみでの参加。たとえば、週に一度、小教区・教会における祈りや賛美の集会、あるいは、信仰教育や使徒的活動に、共に参加するわけです。

9　開かれた心をもち、もてなしの精神を活かすこと。信仰は、行いによって実践する必要があります。

10　家庭で、神の愛を祝うこと。できるかぎり、実行しましょう。特に、神が私たちにしてくださったことや贈物に対し感謝を捧げましょう。

⑤内省と分かち合いのために

1　私たちの家族あるいは家庭にとって、神は、どの程度重要だといえるでしょうか？

2　私たちは、家族ぐるみで、共に神を探し求めているでしょうか？（はい／いいえ）

そうであるしるし、あるいは、逆のしるしをあげてみましょう。

聖書、神の生きたみことば

神は、さまざまな手段を通して私たちに語りかけておられます。通じ合いという観点から見ても、神ほど偉大な方はおられないでしょう。神が私たちとかかわられコミュニケーションをとろうとされるとき、私たちの理性・情緒・良心、あるいは自然とか実際の出来事・貧しい人や問題を抱えている人たち、さらには聖書を用いられます。

そう！　聖書―神の書―は、神の生きていることばです。世の中のニーズにとって、なくてはならないことばなのです。

日々醜悪なニュースが絶えませんが、その中にあって、聖書こそ、真理に根ざし、励ましとなり、希望に満ちた「幸福の訪れ」、つまり「福音」なのです。

聖書ほど、宇宙を包含するメッセージをもつまでに魅力に溢れたものは、ほかにありません。

聖書は、ちょうど鏡にたとえることができるでしょう。私たちの目が開いていて、耳もきちんと聴こえるならば、聖書のどこかのページに、私たちは自らを写しだすことができ、自分たちの今の生活にピッタリのメッセージを見いだすことができるはずです。

聖書がもたらしてくれるひらめき（インスピレーション）やその権威が、総合的に土台そのものとなって、私たちは、そこに、健全で活力溢れる幸せな結婚、あるいは家族生活を築きあげていくことができるわけです。

家族がどれほどの実りを結んでいるかは、その家族の一人ひとりが、どれぐらい心から、神のみことばに耳を傾けているか否かにかかっています。何よりもまず、神のみことばに耳を傾け、それを生き、愛し、そこに自らを与えるならば、私たちの生活の中心は神！ということになります。したがって、他の事柄は、落ち着くべきところに落ち着くでしょう。

多くの家族が私に「家庭で聖書を読むというのは、努力するだけの価値があることだ！」と言ってくれました。家庭で聖書を読むことによって、家族は前進し、安定し、すべての人びとに、光と力強さと平和をもたらすことができるわけです。

朝晩それぞれ五分間とったとしても、さして長くはありません。そして、神を賛美することで、その日一日を始めそして終えるのは、善いやり方です。とりかかりとしてまず、一日に朝夕二回各五分間から始めましょう。そうして、その時間から精神が何らかの実りをくみ取れるようにしようではありませんか！

私たちの家族の将来は、相反するふたつの「ことば」が激しく戦った、その結果次第なのです。この世が提供する「ことば」は、ラジオ、テレビ、映画、マス・メディアなどを通して猛威をふるいます。対して、神の「みことば」は、神の力強い愛のエネルギーをもって世を席巻するでしょう。

この戦いに勝つのは、いったいどちらでしょうか？

その選択の鍵は、家族が握っているのです。だれも、ふたりの主（あるじ）に同時に仕えることはできないのですから。

内省と分かち合いのために

1　私の家族では、聖書が重要な役割を占めているでしょうか？（はい／いいえ）

具体的な体験をあげてみましょう。

2　現実に私が耳を傾け、したがっているのは、具体的にどの「みことば」ですか？

3　私たち家族が共に「神のみことば」に聴き、それを実践するうえで、どのような困難さあるいは障害があるでしょうか？

祈る家族になっていくために

祈るか、祈らないかは、つまり信仰の問題です。

信仰は、神が与えてくださる贈物（ギフト）です。神が信仰を与えてくださるのは、謙遜かつ誠実な心を抱いて神を探し求める、単純な人にです。

神ほど、優れた通じ合いのできるお方は、ほかにおられません。だれとでも、通じ合うことがおできになります。独身の人、夫婦、家族、地域社会、国、宇宙とでも、同時に通じ合うことがおできになるのです。

神は過去も未来も超越し、だれに対しても、いつも「今」であられます。神は、神秘中の神秘であり、あれこれ八方手を尽くし、さらには歪んだやり方でさえあっても、飽くことなく私たちだれもが探し求めているのは、実はこの「神」なのです。

ナザレのイエスがされた驚くべき啓示によれば、神

とは、「家族」なのです。「家族」である神は、ご自身の肖像(うつしえ)である「家族」と通じ合いたいと望んでおられるのです。

すべての家庭のドアを、神はノックし続けておられます。どの家族とでも神は交わりをもちたいのです。というのは、神は無条件の愛をもって、どの家族をも、かけがえのないものとして愛しておられるからです。

ここにこそ、家族の祈りの、家族の祈りたるゆえんがあります。すなわち、家族の一人ひとりと、神との会話。神は語られ、神は聴かれる。そして家族は、日々の生活をもって、神に聴き、神に応えていくのです。

時間が、常に問題にされます。とりわけ、家族全員が集える時間を探すのは、問題です。だれしも、いろいろな他のことにかかわっています。たとえば、野球の練習だったり、学校の宿題、個人的な約束事、デートとか、テレビの番組など……。

しかしながら、一度、家族ぐるみで共に祈る！　と決めた以上は、何とか時間をやりくりして、祈るべきです。さあ、やりましょう！

長々と時間をとる必要はありません。一日にちょっとの時間さえあれば、始めるための十分な時間といえます。時が経つにつれ、家族生活に欠かせない特別な事柄になっていくでしょう。

ナザレのイエスがされた、力に満ちた約束をここに引用するのは、ふさわしいと思われます。

「もう一度、あなた方に言っておく。
もしあなた方のうちふたりが
地上で声をひとつにして、
何ごとかを祈り求めるならば、
何であっても、天の父は、
それをかなえてくださるだろう。
私の名によって二人三人が集まるところ、
そこに、私はいるのだ。
その真ん中に！」

内省と分かち合いのために

1　私たちは、「祈る家族」でしょうか？（はい／いいえ）

第7章
心をスパイラルのように開いて踏みだしていくために

幸せな家族に共通する
もうひとつの特徴は、
自分たちだけで閉じこもっていない！
ということです。
幸せな家族は、
外界に目いっぱい開かれていて、
だからこそ、風通しよく、
外からも中からも見通しがきくのです。
愛の第一の条件が親密さにあることを、
幸せな家族はもちろん知っています。
しかし、
同じ時間に暖炉を囲むだけが
家庭の役割であるとは
思っていません。
幸せな家族は、
家庭というものを、
離着陸する滑走路以上のものとして
とらえています。
つまり、
いつでも、
自分たちのルーツがそこにあることを
心しているのです。

オープンな心で手をさしのべるために

幸せな家族といっても、その幸せを生活において満喫したいならば、次の条件を欠かせません。すなわち、自分たちの殻に閉じこもらず目を外に向けて、周りの人びとと分かち合って暮らす必要がある、ということです。

オープンな心があるか否かは、健全で、活力に満ち、優れた、つまり、幸せな家族であるかどうかを見分ける鍵となるものです。オープンな心とは、生き生きと愛に満ちて、いつでも他者を歓迎する、そういう生きざまを意味します。

社会というものから切り離して「家族」を考えることには、無理があります。

家族同士の関係がどのようなものであるかは、彼らがその暮らしを営んでいる「社会」がどのような状態にあるかに依存しています。例をあげてみましょう。金こそあらゆる価値のうちでナンバーワンの位置を占めている、そんな社会においては、社会的責任の何たるかを子どもたちに教育することは、たいへん難しい。そんな競争中心の社会において、人びとが協力し合うことを、いったいどうしたら教育できるというのでしょうか？

家族は、共同体として、その家族自体では完結した存在ではありません。家族は、私たちが「社会」と呼んでいる、より巨大な共同体の根底をなすものです。自分たちの家族以外の場所で、何らかの活動を営んでいくべきです。社会とのきずなを保ち続けるためです。こうして、家族が出発点となり、正直・誠実・責任・対話・尊敬・忠誠・正義を、社会の中に造り出していく必要があるのです。

神の創造をじっくり観察してみると興味深いことがわかります。神の創造は、あたかも閉じた円の中でなされたようなものではなく、スパイラル〈らせん〉のように開かれたものであるということです。空を見上げ、うずまく星くずを眺めてみましょう。神は、閉じた円のような存在ではなく、生命と愛に満ちた、生き

たスパイラルなのです。その神ご自身が、ご自分にかたどりご自身に似せて「家族」を造られたのです。つまり、生命と愛の共同体として造られたのです。家族が自分たちの殻に閉じこもらず、社会に奉仕し、世界を変容させていくためです。

一方では、私たちのほうが、しっかり心しなければならないこともあります。家族で暮らしている人もいれば、ひとりで暮らしている人もいますが、そのだれもが皆、家族に対する志向をもっている、ということです。

私たちはだれでも、家族的ニーズを抱いています。関係をもつニーズ、励まし、受け入れ、尊敬、支えに対するニーズがあるのです。親密さや、兄弟として、姉妹として、父として、母としての役割に対する求めがあるのです。

どんな人にも、道（手段）が必要です。その道を通して、人びとは、他の人との家族的な関係に生きるようになれるわけです。

家族というものに対する思想や概念は、構造として見ると、シンプルで単一の形というのでは片づけられない、より豊かなあるものを含んでいます。

家族がどのような構造をもっているかは、私たちが考えかかわっていかねばならない事柄ですが、半面、具体的な現実にも絶えず立ち戻る必要があるのです。その現実の中にこそ、私たち家族ならではの、ダイナミックな（生きた）姿があるのですから。では、どうしたら、この家族らしさをより豊かにし、まわりに表していくことができるでしょうか？

オープンな心で、手を家族の外にさしのべていくため、その実践的なやり方について、次に考えてみましょう。

もてなしの精神を活かすために

他の人に奉仕する、そのやり方は数知れません。しかし、たいていの場合忘れられがちで、もっとも単純なやり方があります。もてなすことです。

もてなすとは、どういう意味なのでしょうか？

「もてなし」とは、次のように定義されます。いわく、「あたたかく寛大に客を歓迎すること。見知らぬ人、あるいはその土地に不慣れな人に、意識的によくし、開かれた慈しみに満ちた心で接すること」

家族的なもてなしとは、自分たちのもっているあらゆるものを分かち合うことです。時間も、家庭も、お互いの心の奥深くをも。

画期的な著書（"The Wounded Healer"＝傷ついたいやし手）の中で、ヘンリー・ニューマンは、こう書いています。「放浪する民が過ぎ越していくかのように、我々は暮らしている。孤独な旅人を多く擁する砂漠にいる。いっときの心の平安、一杯の冷たい水、ちょっとした励ましに、彼らは飢えている。それがあれば、自由を探求するこの神秘の旅を、彼らは続けられるのだ。」

「もてなし」とは、家族ならば、だれでもすぐ手に入れることのできる、すでに備えられた徳なのです。「もてなし」は、家族ならではの事柄です。家族そろって、毎日の何気ない出来事の中で実践することができるもの、なのです。

提案！　もてなしの精神を活かすための条件

まず第一に、単純で謙虚な心が必要です。相手に印象づけようなどと考えないことです。何でもうまくやろうなどとしすぎると、自発的な精神を損なうことになりますし、「客など連れて来なきゃ……」などと思う結果になってしまうのです。

次に必要なのは、開かれた心をもっていることです。先走って判断してしまうようなこと（先入観）を避けるのです。外面（そとづら）がどうあっても、だれだって、自分の

家庭ではありのままの姿でいる時間が必要だ！　と考えることです。「もてなし」は、招待するとき、ホスト（受け入れ）側の生活スタイルを相手によって換えることではありません。お客が自分ならではのユニークさを見つけることができるような、そんなチャンスを提供する、いわば「贈物」こそ、「もてなし」です。もし、私たちが手をさしのべて自分たち自身をお客に分かち合うことにすれば、今までとは違った観点から彼らに目を向けることができるようになるはずです。そうすれば、彼らは、自分たち自身に対する新しい見方を得ることさえできるかも知れません。オープンで愛に満ちた精神こそ、その鍵となるものです。

家族がもてなす際、子どもにとっては、大人の「たいくつな」会話に耳を傾けることが余儀なくされ、大人にしてみれば、子どもの「たわごと」を忍耐強く聴くことが要求されるでしょう。しかし、「もてなし」の心があるならば、子どもは、自分の親を誇りに思うでしょうし、親の態度のおかげで、子どもの友だちも、歓迎されていると感じるものです。

つまり、「家族でもてなす」とは、こういう意味なのです。すなわち、親は、子どもの友達がリラックスできるようにしてあげ、一方子どもは、親のお客様に対して礼儀正しく耳を傾ける、ということです。

だれかが家庭を訪問してきたときには、その年齢、あるいはだれが招待したかを問わず、その人を家族全員のお客様であると考えるべきです。

実際、明らかにもてなしの精神があると思える家庭では、私たちは、家族全体から受け入れられていると感じるものです。これが、健全で、活力に満ち、優れた、つまり幸せな家族の特徴となるものです。

平和をつくりあげるために

一致し、開かれた家族にとって、その真剣な誓約となるのは、平和をつくりあげることです。一致し、開かれた家族にとって、これは、彼らならではの特別な神からの賜物（カリスマ）です。真の平和は、ほんとうの正義があるところに実るものであると、彼らは、自分たちの体験を通して実感しています。したがって、とりまく環境に正義と平和をつくりあげていくため取り組もうと、一致し、開かれた家族ならば決心を固めます。

事実、私たちの現代社会には、真の平和がありません。なぜなら、現代の家族・家庭のほとんどには正義と平和が存在していないからです。さらに、多くの家族・家庭に平和が存在しないのは、つまり、家族の一人ひとりの心の中に、平和がないからです。なぜでしょうか？　それは、その家族のメンバーどうしが、神との個人的な関係（きずな）をもっていないからです。神こそ、正義と平和の造り手なのにです。

したがって、平和をつくりあげるために第一に実践すべき事柄は、自分自身の内面に深く分け入りそれを見つめることです。このように自分自身を探求すれば、ありのままの自分自身をありのままに受け入れ尊重しよう！　という気になってくるでしょう。私たちは、まったくの善人でも、まったくの悪人でもありません。未完成な存在で、神を必要としているものです。私たちが個人的にもつ神とのきずな、さらに人びととの関係が鍵となって、自分自身の内面に平和が訪れ、平和をつくりあげていく家族（ピースメーカー）に育っていけるわけです。

この貴重な鍵は、では、いったいどうしたら手に入れることができるのでしょう？　アッシジの聖フランシスコの代表作である、すばらしい祈りがあります。この祈りから、私たちは、その鍵を見いだし、平和をつくりあげる家族になっていくためのヒントを得ることができるでしょう。

「主よ、

私を、あなたの平和の道具にしてください。
憎しみのあるところに、愛をもたらせるように。
傷ついたところに、和解を、
疑いあるところに、信仰を、
望み絶えたところに、希望を、
闇に、光を、
寂しさには、喜びを、
もたらせるようにしてください。

ああ、神なる主よ、恵みを！
そうすれば、
慰められるより、慰めることを求め、
理解されるより、理解し、
愛されるより、愛することを
求めるようになるからです！

なぜなら、私たちは、
与えることを通して、受け、
ゆるすことを通して、ゆるされ、
さらに、死ぬことによって、
永遠のいのちに生まれるのですから！」

第二部　食卓を囲んで

第一部でじっくり観てきましたように、家族愛なくして、私たちは、真の幸せを得ることができません。私たち家族の愛の本質は、私たちが家族として分かち合いをすることにあります。したがって、幸せな家族になるための第一のステップは、家族における通じ合いと対話を強化していくことです。

このワークブックの第二部では、読者の皆さん一人ひとり、さらにその家族の方々に、食卓を共にするというすばらしいチャンスを提供したいと思います。こうしてこそ、皆さんの家は、しあわせな家庭になっていくわけです。まさにこれが、この第二部の目的とするところです。

食卓を囲むに際し、することは？

この「食卓を囲んで」を利用するに際し、家族のメンバー全員で、心から誠実に「食卓を囲んで」集う誓約をします。

そのためにまず、家族がみんなで集まる前に、個人で時間をとり、各自「課題」について内省し、その答えを自分のノートに書くことになります。

次に、積極的に参加するためには、「食卓を囲んで」

を実践するたびごとに、全身全霊で聴き、分かち合うようにします。

第三に、自分に与えられた賜物をふんだんに分かち合いながら、「食卓を囲んで」を実践する毎回が、愛と喜びに溢れた平和なお祝いになるようにするのです。

家族に、家で一緒に暮らしているわけではないメンバーがいる場合も、毎回の「食卓を囲んで」に参加できるよう工夫しましょう。

適当な時期を選び、愛をこめてノートを送ります。課題について内省した自分自身の答えを添えて、送ります。

これがきっかけで、「食卓を囲んで」のたびごとに、家族のだれかが、愛深いレポートと共に手紙を交換するという、すばらしいチャンスを生むことになるでしょう。

「食卓を囲んで」を実践した多くの家族は、すばらしい実りを結んでいます。ですから、読者の皆さんにもこれを分かち合いたいわけです。同じような実りを皆さんも手にしてほしいのです！　皆さんにチャレンジし、また、皆さんを励ましていきたいと思います。

第1章
私たちの家族の現状

「食卓を囲んで」の準備段階として、自分たちの家族の現状を、できるだけ明確にしておくことは有益でしょう。次の課題の質問について、各自内省し分かち合えば、自分たちの家族の姿を浮き彫りにすることができます。

1　私たちは、自分たち自身を一致した家族だと見なしているでしょうか？
2　私たちは、お互いに愛し合っているでしょうか？
3　私たちは、幸せな家族でしょうか？
4　私たちは、オープンでもてなしの心のある家族でしょうか？
5　私たちは、一家団らんのときを楽しんでいるでしょうか？
6　私たちは、お互いに心を打ち明けているでしょうか？
7　神は、私たち家族にとって重要でしょうか？
8　私たちは、通じ合うための誠実な努力をしているでしょうか？
9　私たちは、快くすぐにゆるし合うでしょうか？
10　私たちは、お互いに和解しようと頻繁に努めているでしょうか？
11　私たちは、お互いに理解しようと努めているでしょうか？
12　私たちは、お互いをありのままに受け入れようとしているでしょうか？
13　私たちは、お互いに尊敬しているでしょうか？
14　私たちは、お互いを信頼しているでしょうか？
15　私たちは、自分たちの家族の関係を優先しているでしょうか？

16　私たちには、家族として奉仕する心があるでしょうか？

第2章
セルフ・ポートレート――自画像

自分自身が幸せであることは、
家族で幸せになっていくための
出発点となるものです。
そうあるべきなのです。
第一のステップです。
健全で、活力に満ち、優れた、
つまり、幸せな人になるためには、
自分の奥深くある「自己」を
知らねばなりません。
一人ひとりが
自分のありのままの姿を
発見するのです。

読者の皆さんが、
このワクワクするような冒険に
とびこんでいけるよう、
これからのページは、
大きな助けとなるでしょう。
皆さんに要求されることは、
自分自身に正直であることと、
最後までやりとおす意志です。
すなわち、
課題を使ってしっかり内省し、
質問に対する答えを
自分のノートに書いていくことです。

さあ、
「食卓を囲んで」分かち合う準備は、
いいですか！

自己との出会い

ここで個人的に行う内省の目的は、家族のメンバーそれぞれが、自分自身を、ひとりの人間としてしっかり見つめることです。こうして、健全で活力に満ちた自画像（セルフイメージ）を自分のものにするのです。

自分自身を深く知らないということは、つまり、自分に対する正直さ・意識のあり方・賞賛・知識・受け入れ・理解・コントロール・信頼・敬意を欠いていることになります。これでは、自分自身の家族のだれとも、深いかかわりをもつことはできないはずです。

自己を知らないことこそ、家族の通じ合いと対話がうまくいかない場合の、原因の第一として考えられるものです。これがもとで、自分の生活に深い空虚感を覚え、孤立を感じ、不幸せになるのです。

こういう状態は、危険です。あらゆる類いの「逃避」「中毒」のワナに陥ってしまうかもしれません。ひどい場合は、自殺ということもあります。

そんな危険から逃れるための選択はできます。自分自身の奥深くある「自己」と正直に出会う体験こそ、それです。さあ、まいりましょう。

質問

1　「私」を簡潔にしかも過不足なく描写するとしたら、どう言えるでしょうか？

2　自分自身のどこが、もっとも嫌い、あるいはもっとも好きでしょうか？
　なぜ、そう思いますか？

3　何が原因で、私は幸せあるいは不幸せになるでしょうか？
　なぜ、そう思いますか？

4　私の人生で、もっとも重要なものを三つあげるとしたら、何でしょうか？

5　もっとも重要な私のニーズは、何でしょうか？
　なぜ、そう思いますか？

6　私が抱えている問題で、いちばん大きなものは何でしょうか？　私は、その問題にしっかり取り

組んでいるでしょうか？

7　私は、自分の家族から愛されていると感じているでしょうか？　簡単に説明してください。

8　私が家族に対して自分本位にふるまっていると言える、はっきりした徴候として、どのようなものがあげられるでしょうか？

9　私の最高の親友といえば、だれでしょうか？　理由をあげてください。

10　私は、どうして生きていきたいと思うのでしょうか？

11　私にとって、人生の目標とは、何でしょうか？

12　私は、心の底から神を信じているでしょうか？（はい／いいえ）

なぜ、信じているのでしょうか？　あるいは、信じてはいないのでしょうか？

注意

以上12の内省の質問のうち、私はどれを自分の家族に分かち合いたいと思いますか？　次の「食卓を囲んで」で分かち合う内容です。

ラブ・レターを書くために

ここでは、家族はそれぞれ、何種類かの手紙を書くことになります。手紙を書くことによって、自分自身（つまり、自分の理性・情緒・意思・霊）のコンディションを整え、相互にゆるし合い、和解による心のいやしを「食卓を囲んで」体験するのが、この段階の目的です。

自分自身に宛てて

多分皆さんは、このようなことをしたことはないでしょう。よいチャンスです。この「ラブ・レター」の目的とするのは、鏡に映った自分を直視し、ありのままに自分自身を受け入れることにあるからです。さらに、自分自身に関して何でも、わかったこと、考えたこと、感じたことは、書き留めておくのです。よい部分、悪い部分、素敵なこと、醜いこと、嬉しいこと、

不愉快なことなど何でも……。手紙のしめくくりは、自分自身のよい部分は誉めてあげ、悪かったことに関しては自分自身をゆるしてあげるようにしましょう。

次のことを忘れないようにしてください。自分自身との和解を体験しないならば、人がゆるしてくれたときにすなおにそれを受け入れることも、あるいは他人をゆるすこともできないのです。

この手紙は自分のためだけのものです。だれかに分かち合う必要はありません。

神に宛てて

皆さんは、神様とよくおしゃべりしているかもしれませんし、違うかもしれません。どちらにしても、神に「ラブ・レター」を書くように、皆さんは招かれているのです。神について感じたこと、考えたことを何でも、この手紙の中に書くことができるのです。さらに、自分が神から必要としていること、あるいは期待していることも書けるでしょう。忘れないでほしいことがあります。神は、私たちの創造主であり、無条件に私たちを愛しておられるというのがそれです。私たちがしてしまったことが何であっても、神からのゆるしを得られないと思いわずらう必要はありません。

お望みならば、この手紙を家族の人に分かち合うこともできますが、しなければいけないわけではありません。

家族の一人ひとりに宛てて

さて、家族のメンバー一人ひとりに宛てて「ラブ・レター」を書くための準備が、万端整いました。

この手紙の中心になるポイントは、三つです。

1　家族のメンバーのもっともよい部分を認めてあげます。

2　家族のメンバーが自分にしてくれたよい事柄について、感謝します。

3　家族のメンバーに対して自分がしてしまった悪かったことについて、ゆるしを願います。

自分が書いた家族のメンバーにだけ、この手紙は渡しましょう（分かち合いましょう）。

一単位（ユニット）として、家族に宛てて

家族全体に宛てて、ラブ・レターを書きましょう。次のいくつかのポイントが、ヒントになるでしょう。

1　自分の家族でもっとも高く評価していることについて書きます。

2　自分の家族からもらったすべてのことについて、感謝のことばを書きます。

3　自分がしてしまった家族を傷つけたことについて謝ります。

この手紙は、次の「食卓を囲んで」の際、分かち合うことができます。

第3章
共に成長するために

そうです！　皆さんのご家族は、いまだ、建設途上にあるのです。家族であることは、生きるプロセスであり、完成するまでは、動いていくことが要求されるかかわり合いなのです。皆さんのご家族は、まだ完成してしまったわけではありません。

人生は、成長するためによき機会を提供しています。成長することこそ、人生を歩むうえでの基本原則です。成長が契機となり、家族の生活は豊かになります。

事実、家族がよりどころとなって、人はそこで共に成長していくことができるのです。

今日、否定的な方向に進んでいってしまう家族は、あとを絶ちません。家族の亀裂は深まっていき、それにつれ、失望、挫折もますます進んでいきます。

家族であるということは、私たちがさらに、ますます成長していくため、そのすばらしい機会を提供してくれます。でも、単に成長するのではありません。「共に」成長するのです。

家族に生じる成長には、たくさんのいろいろなタイプがあります。

身体的な成長
- 子どもたちの背丈が伸びていく
- 新しい子が生まれて家族が大人数になっていく
- 家族のみんなが年齢を重ねていく
- 新たなニーズが生じ、支出もかさんでいく

能力における成長
- 家族のみんなが、意思決定・選択において学習し賢くなっていく
- それぞれが才能や技術を高め、新しい活動に共に取り組む

心の成長
・お互いに、愛・尊敬・関心を示す
・お互いが、チャレンジし合い、励まし合い、支え合う
・心の奥深くある感情や夢を、お互いが分かち合う

社会的な成長
・家庭の外でも、友情のあついきずなを大切にする
・隣人に心を配り、人びとに奉仕する

霊的な成長
・創造性を発揮する
・神を探究し、共に祈りを捧げる

幸せな家族になりたいなら、このようなあらゆる面で成長していかねばなりません。

絶対的に言えることがあります。家族が成長していくことは、自分たちの暮らす社会に貢献することに、ほかなりません。

家庭が養い育てる場であるには

オリエンテーション

成長しつつある家族ならば、「養い育てる」という機能がつきものです。家族同士が他のメンバーの成長を気にもかけなくなれば、その家族全体は、問題を抱えているのです。

たとえば、こうです。

家庭が「養い育てる」場であるならば、家族の一人ひとりは、ふさわしい自尊心をもつことができるようになります。家庭が問題を抱えてしまっているならば、家族の一人ひとりは、自分を無価値なものと見なすようになっていきます。

家庭が「養い育てる」場であるためには、どうすればよいでしょうか？

この問いは、この章全体の大見出しともいえるもの

です。

しかし、先に進む前に、次のことをしておくのがよいでしょう。

1　以下の質問について、内省すること。

2　自分のノートに、個人的な答えを書くこと。

3　これをもとに、再度「食卓を囲んで」を祝いましょう。

質問

1　私たちの家族は、成長しているでしょうか？（はい／いいえ）

成長しているといえる徴候、あるいは、成長しているとはいえないしるしをあげてみましょう。

2　「養い育てる」場という観点から自分の家族を見た場合、私は何を思うでしょうか？

3　私が成長・成熟していくために、家族はどのような形で助けてくれているでしょうか？

4　私の家族のうち、もっとも私を力づけてくれる人は、だれでしょうか？

5　霊的な成長をものにするため、私が必要としているのは、どのような助け、あるいは援助でしょうか？

6　家族が手をとりあって成長していかねばならない、主となる問題は何でしょうか？

7　それらの問題を克服していくために、何をすればよいでしょうか？

私たち家族の現実を直視するために

私たち家族の現状は、どのようなものでしょうか？この段階は、家族がより幸せをめざすうえで、きわめて重要な部分です。とはいうものの、一筋縄ではいきません。

なぜかというと、私たちは皆、恐れを抱いているからです。自分たちの危機、いざこざ、問題などの真の姿を見るのが恐ろしいのです。なぜなら、私たちは、変わることを余儀なくされるからです。変わらなければならないと考えただけでビクビクし、今のままでよいとばかりに、現状にしがみついてしまうわけです。

しかし、さまざまな危機・衝突・問題が家族に亀裂をもたらすことがあっても、そのおかげで、より密接な成長した関係に踏み込むこともできるのです。このことを認識すると、たいへん勇気づけられるではありませんか。

自分たちの家族のありのままの姿を直視するためには、次のことが求められます。

1　自分自身に正直であること。
2　実際の危機・衝突を家族で協力して何とかしていこうという意志。
3　自分たちの抜き差しならない問題に立ち向かう勇気。
4　問題の根底にある原因を真に探求する姿勢。
5　自分たちが変わっていくための創造的な手段を選択する知恵。

以下の質問は、このための助けとなるでしょう。まず、内省して、ノートにその答えを書き、自分の家族の他のメンバーに分かち合うための準備をします。

質問

1　私は、自分の家族と正直にかかわっているでし

ょうか？（はい／いいえ）
その証しとなるものは、何でしょうか？

2　自分の家族が危機に陥ったり、仲たがいが起きた場合、私はどうするでしょうか？

3　私たち家族は、今、抜き差しならない問題を抱えていますか？（はい／いいえ）
その原因は何でしょうか？

4　自分たちの抱えている問題を解決するため、一緒に手を取り合ってできること、あるいはすべきことは何でしょうか？

5　私はそのために、個人的には何をすることができるでしょうか？

家族の内なるエネルギーを発揮するには

オリエンテーション

現代の社会でエネルギー危機が叫ばれているのは、周知の事実です。だれもが、この状況に苦しめられています。

しかし、目に見えるエネルギーだけが、問題のすべてではありません。もうひとつのすごい力を秘めたエネルギーが存在します。目には見えないものの、実際に存在しているのです。

愛のエネルギーがそれです！

このエネルギーは、人間の大きな可能性です。男女両性の心の中に眠っています。このエネルギーは、その源に神をもちます。愛そのものでおられる神によって、絶えず創造の業のうちにあるからです。

そして、神のご計画にそって、ひとりの男性とひと

りの女性が「顔と顔とを合わせて」出会うならば、いつでもこの愛のエネルギーはその活動を開始するのです。

まさにこれこそ、家族の聖なる起源なのです。

大きな問題が横たわっています。はたして、現代の男女は、自分たちの結婚、あるいは家族の生活において、この神的愛のエネルギーを働かせているだろうか？　という問題です。

この究極の問いに真摯に答えることは、私たちが暮らす、物質中心で、快楽礼讃、自己中心の社会から、まったく新たな社会・文明、つまり、正義と愛の文明に過ぎ越していくための、最初の鍵となるものなのです。

究極のこの大問題に、回答を出すための準備はいいでしょうか？

ちょっとしたヒントとして、この本の32ページから38ページ（第一部・第2章の「活力ある家族になるために」「優れた家族になるために」、第一部・第3章の「人として成長するために」）を読んでから、以下の質問に答えるといいでしょう。

質問

1　私の心の中にある愛のエネルギーは、今どのようになっているでしょうか？

2　私たち家族のうちにある愛のエネルギーは、どのようになっているでしょうか？

3　真の「愛の共同体」になるために、私たちは何ができるでしょうか？

さあ、この宿題をやり終えたら、次の「食卓を囲んで」の準備が完了した！　というわけです。

私たち家族のきずなを深めるために

このワークブックの最初のほうで申しましたが、

1　構造的にみると、家族とは、健全で活力に満ちたきずなのことです。

2　家族の関係（きずな）は、一夜にして完成してしまうものではありません。

3　幸せな家族とは、きずなを愛に満ちたものとして発展させている人たちです。

したがって、私たちが家族のきずなを深めていく際にも、きずなの現状を評価することが勧められます。「きずな」とは、ふたりの間に生じる、心と心の交わりのことで、「きずな」それぞれの組み合わせは、特別でふたつとない（自己の）分かち合いを意味すると認識したうえで、実際の評価をしていくわけです。

めいめい自分自身の立場から見て、自分の家族には、いったいいくつのきずなが存在しているでしょうか。「きずな」には、「与える」「受ける」という二つの関係があります。また、神を信じている人にとっては、神も家族の一員です。ですから、この場合、家族の一人ひとりの立場から見て家族のきずなの数を知る計算式は、（家族の人数－1）×（家族の人数）です。

このことを心に留めて、18ページから24ページ（第一部・第1章「家族のもつ多彩な表情」「変わりつつある現代の家族」「現代の家族に起こりつつあることは？」）を読み返せば、次にあげた課題の質問について内省し、自分の答えをノートに書くために、よりよい準備となるでしょう。

その後、次の「食卓を囲んで」に、家族の他のメンバーと集まるわけです。これらはとても重要なことなのです。つまり、こうしてこそ、自分たちの家族のエネルギーは、正しく方向づけられ、家族のきずなを成長させていくことができるのですから。

質問

1　自分の家族のメンバーそれぞれと自分との、個

人的関係は、どのように評価できるでしょうか？（すばらしい／とてもよい／よい／ふつう／とぼしい／ない）

2　神と自分との関係は、どのように評価できるでしょうか？（すばらしい／とてもよい／よい／ふつう／とぼしい／ない）

3　自分の家族の中で、私がもっとも親しいのは、だれでしょうか？　その理由は？

4　自分の家族の中で、私にとって、かかわりをもつのがもっとも難しいのは、だれでしょうか？　なぜ、そうなのでしょうか？

5　自分の家族のメンバーそれぞれに対して、私は、何を期待しているでしょうか？

6　自分の家族のメンバーは、私に対して何を期待していると思いますか？

7　家族の一人ひとりとの関係を成長させていくために、私たちは何をすべきでしょうか？　あるいは何ができるでしょうか？

私たち家族の通じ合いを強化するために

家族の関係を養い育てていくための最高の方法とは、いったい何でしょうか？

家庭における、前向きで実践的な通じ合いこそ、家族の関係が、健全で、活力に満ち、優れて、愛に満ちたものとなる秘訣です。このことは、私たちが自分の体験を振り返ってみれば、あるいはこのワークブックの36ページから53ページ（第一部・第3章「家族として歩む幸せへの道のり」から第一部・第4章「創造的な通じ合いを実践するための鍵」）を通して、わかっておられることと思います。

したがって、この第二部における次の部分は、自分たち家族の通じ合い（その質）を向上させていけるよう、皆さんを励ますことをその目的としています。

家族で共に歩む大切な冒険にふみだすにあたって、

皆さんの次の「食卓を囲んで」のよき準備となるよう、個人的に内省しノートに書くため、いくつかの質問が用意してあります。

質問

1　通じ合い

家族の一人ひとりと私たちは、どの程度深くあるいは頻繁に通じ合いをしているでしょうか？

2　尊敬

私は自分の家族のメンバーを、ひとり残らず尊敬しているでしょうか？（はい／いいえ）

もし、尊敬していない人がいるならば、どうしてでしょうか？

3　聴く

私は自分の家族のメンバー全員に、耳を傾けているでしょうか？（はい／いいえ）

もし、しっかり聴いていない相手がいるなら、どうしてでしょうか？

4　受容

私は自分の家族のメンバー全員を、心から受け入れているでしょうか？（はい／いいえ）

もし、受け入れていないならば、なぜでしょうか？

5　理解

私は自分の家族のメンバーみんなを、理解しているでしょうか？（はい／いいえ）

もし、違うならば、なぜそうなのでしょうか？

6　信頼

私は自分の家族のメンバー全員を、信頼しているでしょうか？（はい／いいえ）

もし、信頼しきれていないとしたら、どうしてでしょうか？

7　援助

私は自分の家族に、ひとり残らず助けの手をさしのべているでしょうか？（はい／いいえ）

もし、必ずしもそうでないならば、なぜそうなのでしょうか？

8　平安

私は自分の家族一人ひとりとのかかわりにおいて、平安を感じているでしょうか？（はい／いいえ）

9　愛

私は自分の家族全員を残らず、愛しているでしょうか？（はい／いいえ）

もし、必ずしもそうではないならば、その理由は？

10　信仰

私は神と深い通じ合いをしているでしょうか？（はい／いいえ）

もし、通じ合っていないならば、そのわけは何でしょうか？

家族で対話するために

家族が通じ合いを深めていくための手段はたくさんありますが、中でも、家庭で対話することは、その最高の部類に属するものです。

家族で対話を実践していくとき、家族のメンバーのうち、ふたりだけが対話する場合と、家族のメンバーが全員一緒になって対話する場合があります。

しかし、どちらの場合も、何であれ対話の前に、自分なりの内省、さらに、それを書き記しておくことは、きわめて意味があると知っておくべきです。

もうひとつ重要なことがあります。家族で対話をする場合は、何をおいても大切にし、それを実践することです。

家族での対話は、高い優先順位をもつものです。自分の時間、自分のお金、自分のエネルギー、どの次元をも、家族での対話に集中させるべきでしょう。

質問

1　家族での対話があるときにはいつでも、私は心からオープンに分かち合っているでしょうか？（はい／いいえ）

2　対話を実際に行うとき、どのような困難さが、私にはあるでしょうか？

3　私たち家族の対話から、私は何を期待しているでしょうか？

4　私たち家族の対話があるとき、私がいちばん気にいっている話題は何でしょうか？

5　私たちの家族には、何らかの「タブー」になる話題があるでしょうか？（はい／いいえ）
　どのような話題ですか？

6　私は自分の感情、関心事、失望したことを分かち合っているでしょうか？（はい／いいえ）

7　一般的に、私は、肯定的にものごとを見ていくほうでしょうか、それとも悲観的なほうでしょうか？
　なぜ、そうなのでしょうか？

8　私は自分たち家族を一致させること、あるいは亀裂を深めることに関し、どちらをも分かち合うことを望んでいるでしょうか？（はい／いいえ）
　その理由は？

9　家族での対話があるごとに、私は身も心もしっかり参加しているでしょうか？（はい／いいえ）

10　私たち家族の対話から、私は何を得ているでしょうか？

以上の質問のそれぞれに正直に答えを出したら、しっかりノートに書いてください。そうしたら、次の「食卓を囲んで」の準備ができたことになります。

家族の充実した時間を絶やさないために

このワークブックの冒頭で紹介したのでおわかりでしょうが、過去三十年間、いたるところで家族は巨大な変化を体験してきました。家庭をあとにし、家族から離れていく傾向は、増加の一途をたどっています。

家庭をあとにするこの傾向が引き金となり、家族で共にすごす時間は必然的に減少してきています。たいていの家族がバラバラになってきているわけです。家族のメンバーがそれぞれ、仕事や何らかの活動、ボランティアやレジャーに介入しすぎることで、こうなってしまったのです。

このような外での活動に参加する機会が増えれば増えるほど、家族ですごす時間は減っていきます。以前にはあった、家族で毎日すごす時間にしても、個人的な仕事などにとって代わられ、減少してしまいました。多くの家庭では、日に一度夕食のためといっても、一緒にいることがないほどです。

幸せに暮らしている家族の体験と証しによれば、家族生活の優先順位を高くすれば、一緒にすごすための時間と「場」を確保することができるのです。この場合の「時間」とは、皆にとってもっとも貴重な時間のことです。余った時間、という意味ではないのです。

何とかスケジュールをやりくりして、個人的な仕事、社会的・宗教上の活動を制限する必要があるかも知れません。仕事や活動が慢性的に幅をきかせ、自分たち夫婦や家族の時間を犠牲にさせないようにしましょう。皆さんが、一緒にすごす時間をもてばこそ、家族・家庭であることの意義をしっかり深めていくことができるでしょう。

質問

1　一日のうち、私は自分自身と神のための時間をどの程度、あるいはどのようにして確保しているでしょうか？

2　だれに、あるいは何に、私は人生のいちばん貴重な時間を使っているでしょうか？

だれに、あるいは何に、私は人生の余った時間を使っているでしょうか？

3　私たち家族の共にすごすひとときは、優先されているものでしょうか？　それとも、余った時間で行われているものでしょうか？

4　家族のだれかと一緒にすごすとしたら、私はどうやってすごしたいでしょうか？　だれと？

5　家族として平和に暮らすこと（家族の調和）と、自分なりの事柄とのバランスをとるために、私には何ができるでしょうか？

6　家族で一緒にすごす時間を充実させるため、私たちはどうすればよいでしょうか？

7　家族水入らずのとき、私が心からもっとも大切にしていることは、何でしょうか？

なぜ、それを大事に思っているのですか？

8　家族での年中行事になっていることから、何かを省くとしたら、私は何を省きたいでしょうか？

なぜ、それをやめてしまいたいのですか？

9　家族の恒例行事として、私がぜひとも加えたいことは何でしょうか？

なぜ、それを加えたいのですか？

10　今よりシンプルなライフ・スタイルを選べば、家族に何らかの益がもたらされるでしょうか？

具体的に説明してください。

毎日の些細な事柄について対話するために

鳥は飛ぶために、魚は泳ぐために生まれてきました。同じように、人間は、お互い分かち合うためにこそ、生まれてきたのです。

もし、私たちが分かち合わないならば、私たちは苦しみ、病気になり、最後には、内的に死んでしまうのです。

対話の体験をよいものにするためだからといって、私たちは、必ずしも驚天動地に値する特別な出来事を分かち合う必要はないのです。日常生活でだれにでも起こりうる、ちょっとした事柄がとても大切なのです。

多くの家族の体験によれば、もし、私たちが些細な事柄を積極的に分かち合おうとしないならば、大きな真剣な事柄を分かち合うことは不可能だろうということです。

以下の質問についてよく内省し、答えをノートに書きましょう。

質問

以下のそれぞれの質問について、三つ答えを書いてください。

1　私が見るのが好きなものは？
2　私が見るのが嫌いなものは？
3　私が聞きたいのは？
4　私が聞きたくないのは？
5　私の好きな匂いは？
6　私の嫌いな匂いは？
7　私の好きな味は？
8　私の嫌いな味は？
9　私が触れたい、あるいは手にしたいものは？
10　私が触れたくない、あるいは手にしたくないものは？
11　一週間のうち、私が気にいっている曜日は？
　その理由は？
12　毎週末のすごし方で、いちばん好きなことは？
　それはなぜでしょうか？

和解と平和を体験するために

平和は、不正・暴力・戦争・死と対立するものです。この対立は、世界中いたるところにあるチャレンジです。この対立は、だれの家庭でも起こるチャレンジなのです。

正義・平和・生命がうずを描きつつ生じるのは、どこからでしょうか？

答え！　私たちの家庭から！

私たちの住んでいるこの社会には、正義がありません。私たちの家庭に正義がないからです。

街や都市の通りには、平和がありません。私たちの家庭の中に、平和がないからです。

どの国、どの大陸同士も和解していません。夫と妻が、親と子が、兄弟姉妹が和解していないからです。

皆さんは、息も絶え絶えのこの社会で、平和をつくる人になりたいとは思いませんか？　それにはまず、皆さん自身の家族で、ピース・メーカーになるよう努力してください。

自分たちの家族において、和解を体験したいと思いますか？　それならば、心の深みにある自己が、平和であるようにすることです。

27ページから35ページ（第一部・第2章「幸せな家族」）、46ページから53ページ（第一部・第4章「創造的な通じ合いを実践するための鍵」）をもう一度読んでください。

そして、自分の家族のメンバー一人ひとりに、ラブ・レターを書いてみましょう。あるいは、以下にあげた質問について、よく内省し、ノートにその答えを書きましょう。

質問

1　ゆるさなかったり、ゆるしてもらおうとしなかったがために、自分の家族の者との関係を損ってしまったことが、私にはあるでしょうか？（は

い／いいえ）

どのような事柄に関して、そうだったと思いますか？

2　家族全体を傷つけてしまったことが、私にはあるでしょうか？（はい／いいえ）

どういう点で、そうだったと思いますか？

3　家族一人ひとりとのきずなを深めていくために、私は何を誓約したいと思いますか？

具体的なことを、書きましょう。

4　家族全体とのきずなに関して自分の行いを改善するため、私は何を誓約したいと思いますか？

実行可能なことを、書きましょう。

5　誓約を忠実に実行するためには、正直に言って、私には何が必要でしょうか？

お互いをありのままに受け入れるために

57ページ（第一部・第5章「愛の意味」）で、私たちは、次のような結論にたどりつきました。すなわち、「受け入れこそ、真の愛を完全に表現したものである」。

私たちは、私たちであって、それ以上でもそれ以下でもないということに、まちがいありません。

私たちは人間の尊厳という意味で、平等ではあるものの、多くの点で異なっています。すなわち、性別・性格・教育・文化・好き嫌いなど……。

違いがあっても、共に平和にすごすうえで障害となるわけではありません。ただし、私たちがその違いを受け入れるならばの話です。

他人をありのままに受け入れることは、難しいことです。しかし、同様に、私たちが、自分自身をありのままに受け入れることも、やはり難しい……。

一方では、まず最初に自分自身を受け入れないなら

ば、他人を受け入れることなど、だれにもできないでしょう。

ですから、次の「食卓を囲んで」を体験するに望ましい事柄は、「受け入れ」です。

質問

1　私は、自分なりの性格・性質・気質・不完全さ・弱さ・傾向・限界・望み・趣味なども含めて、自分自身をありのままに受け入れているでしょうか？（はい／いいえ）

受け入れているサイン、あるいは受け入れてはいないと言えるしるしを選び出してみましょう。

2　自分自身を受け入れるうえで、私がもっとも困難を感じるのは、何についてでしょうか？

なぜ、受け入れがたいのでしょうか？

3　私は、自分の家族の一人ひとりをありのままに受け入れるようになってきているでしょうか？（はい／いいえ）

「そうだ！」といえるしるし、あるいは「いや、ちがう……」と思えるしるしをあげてみましょう。

4　私は、家族のメンバーそれぞれから受け入れられていると、感じているでしょうか？（はい／いいえ）

「はい」「いいえ」どちらの場合も、その証しといえることを書いてみましょう。

5　私は、自分の家族全体をそのものとして、ありのままに受け入れているでしょうか？（はい／いいえ）

肯定・否定のしるしを選び出してください。

6　家族全体がありのままの自分自身を受け入れてくれていると、私は感じているでしょうか？（はい／いいえ）

7　私は、自分の心の深い部分で、「自分自身は、神に受け入れられている……」と思っているでしょうか？（はい／いいえ）

お互いを心の底から理解し合うために

今回の「食卓を囲んで」は、ほかのものと同様、どの家族にも通用するものではありますが、特にティーンエージャーや青年のいる家族にはピッタリでしょう。

世代間の溝（ジェネレーション・ギャップ）は、いつの時代でもチャレンジとなる現象ですが、現代の家族の大半にとっては、劇的なほどにはっきりと問題になってきています。

毎年、あらゆる年代層にまでまたがる、数えきれないほど多くの家族の人たち、すなわち、父親、母親、子どもたち、ティーンエージャーから青年、はては祖父母の世代にいたるまでが、自らの家庭には愛想をつかし、家庭の外に理解と愛を求めようとして家を離れていきます。

なぜ、皆、家から逃げ出してしまうのでしょうか？

たくさんの理由が考えられます。しかし、自分自身の家族が、自分を理解し受け入れてくれないことが、家を離れていく最大の原因です。

「家出」「家族遺棄」の問題の世話をし、その傷をいやし、奉仕する、ひじょうに多くの施設ができるのは、よいことには違いありません。しかし、適切な解決の道は、家庭の中にこそあるのです。「ころばぬ先の杖」という諺（ことわざ）があるではありませんか！

家庭で（！）、異なった世代同士の、愛に満ちた対話を実践しようではありませんか？　そうすれば、世界全体に、相互理解の輪がさらに広がっていくことでしょう！

質問

1　私たちの家族にある「ジェネレーション・ギャップ」のしるしと言ったら、何があげられるでしょうか？

2　個人的に、ときおり、ひとりぼっちだと思ったり、誤解されていると感じることが、私にはあるでしょうか？（はい／いいえ）

3　私は、自分自身を理解しているでしょうか？

（はい／いいえ）
「はい」「いいえ」の証しとなることをあげてみましょう。

4　家族の人の中で、だれが、もっとも深く私を理解しているでしょうか？

5　私がもっとも深く理解してほしいと思うのは、だれにでしょうか？

6　自分の家族のうちのだれが「自分はひとりぼっちだ」「理解されていない」と感じていると思いますか？

7　私がもっとも深く理解しているのは、だれでしょうか？

8　私にとってもっとも理解しにくいのは、だれでしょうか？

9　私たち家族の口論として、よくその中心となるのは、どのような話題でしょうか？

10　自分のことに関して家族からほとんど理解されていず、今後はもっと理解してほしいと思っている事柄には、どのようなものがあるでしょうか？

見すごされているニーズを分かち合い満たすために

今回の「食卓を囲んで」で、その目的となるのは、私たちが抱えている個人的、および家族としてのニーズを明確にし、家族同士でそれを分かち合えるようになり、こうして、お互いのニーズについて助け合い、支え合うことです。

ニーズが未だ満たされていないということが、不幸を生む原因として最たるものになることは、ひじょうに多くの家族において証明されています。

アルコール・麻薬・非行・自殺などの問題が、社会的現象になっています。この社会的現象の根源を探っていくと、自分自身を理解し、さらに、お互いを信頼する能力が人びとに欠如していることこそ、その原因であるとわかります。このような状況を防ぐためには、自分の家族に、自身の心のニーズを分かち合うことが

必要です。

家庭は、夫と妻・親と子・兄弟姉妹同士が心から信頼し合い、もっとも深い友愛のきずなを築く、特別の「場」でなければならないのです。

やってごらんなさい！

きっと、奇跡を見ることになるでしょう。

質問

1　私は、自分のことを幸せな人間であると見なしているでしょうか？（はい／いいえ）

なぜ、幸せだと思いますか？　なぜ、そうではないと思いますか？

2　私は、家出しようと今まで考えたことがあったでしょうか？（はい／いいえ）

なぜ、家出することを考えたのでしょうか？あるいは、なぜ、考えなかったのでしょうか？

3　自分にとって実際のニーズだ！　と私が思っているものには、何があるでしょうか？

それらを、選び出してみましょう。

4　自分にとってもっとも重要で現実的なニーズだと思っているのは、どのニーズでしょうか？

5　そのうち、もっとも急を要するニーズは、何でしょうか？

6　現在、私はどのようにして、自分の個人的なニーズを満たしているでしょうか？

7　私には、満たされていないニーズがあるでしょうか？（はい／いいえ）

どんなニーズでしょうか？

8　私は、何らかの中毒（タバコ・酒・セックス・仕事・麻薬など）に陥ってしまっているでしょうか？（はい／いいえ）

どのような中毒ですか？

9　自分がニーズを満たすうえで、私が家族から必要としていることは何でしょうか？

10　私にとって、自分たち家族の根本的なニーズは何だと思いますか？

11　私たち家族にとって、もっとも重要で現実的なニーズは何でしょうか？

12　自分たち家族のニーズを満たすため、私はどのように協力しているでしょうか？

私たちの抱いているよい価値観を発見し分かち合うために

家族専門の研究者たちのほとんどが言っていることですが、大半の家族にとって、その家族ならではのよい価値観を喪失したことに、その不幸の根本はあるそうです。

家族のよい価値観とは、何でしょうか？

秘められた可能性（ポテンシャル）です。家族である皆さんは、可能性そのものであり、同時に、皆さんが家族として抱いているものこそ、そのポテンシャルなのです。

すなわち、家族の一人ひとり：それぞれがユニークで特別な人間です。結婚している夫婦：家族という肢体にとって、夫婦は心臓（＝中心・核）です。子どもたち：将来へのかけ橋であり、その希望です。祖父母：家族の基礎、根本です。親戚・友人・隣人：このすべての人びとが、オープンで愛のある家族の「顔」です。

まさに私たちの家族こそ、かつても、今も、これからも、私たちの人生にとってもっとも重要なよい価値観です。

ところで、家族には、いろいろな種類のよい価値観が存在しています。個人的な価値観や共通の価値観、物質的なあるいは霊的な価値観、道徳的なそして宗教的な価値観、自然なそして超自然の価値観など……。

家族におけるいろいろなよい価値観は、発展し変化していくものです。そして、このよい価値観は、その変化のプロセスで、家族に葛藤をもたらすのです。

したがって、私たちが、自分たちの家族にあるよい価値観を発見することはきわめて重要です。しかし、それは、お互いの価値観を何としても相手に受け入れさせようとする動機からではなく、むしろ、自分たちなりの共通のよい価値観を見いだし、自分なりにもっている異なったよい価値観をそれぞれが受け入れる目的において重要なのです。

これこそ、まさに、家族生活にとってきわめて重要

な、この段階の目的といえます。自分が大切にしている、あるいは優先している「よいこと」は何か、まず選び出してから、次の質問に答えてみましょう。

質問

1　自分自身について、私がもっとも高い価値を置いているものは、何でしょうか？

2　人生において、私がもっとも高い価値をみているものは、何でしょうか？

3　家族の一人ひとりに関して、私がもっとも高い価値を見いだしているものは、どのような価値観でしょうか？

4　私の家族にとって、もっとも重要なよい価値観は、何でしょうか？

5　私が、自分の友だちの中にみている、もっともよい価値観は、何でしょうか？

6　人間に関して、私がもっとも大切な価値観だと思うのは、何でしょうか？

7　神と宗教について、私がもっとも高い価値を置いているのは、どのような価値観でしょうか？

私たちの「家」を「家庭」にしていくために

幸せな家庭であることは、人生において最高の価値観のひとつといえます。しかし、幸せな家族生活は、「いつのまにか生じてくる」ものではありません。最年少から最年長にいたるまで、家族のメンバーは皆、真剣に取り組まなければならないことがあるものです。

どのようにして？

アメリカの古い諺（ことわざ）にありますが、「家はレンガで建てるが、家庭は愛で建て上げていく」のです。したがって……。

家族における自己の存在意義を認識するには

これは、家族にとって、自分は、必須の存在であり、自分にとって、家族も、かけがえのない存在であることを、認識することです。家族と自分との間には、切

っても切れない緊密な交わりがあるのです。

責任を分かち合うには

家族は、神秘的な肢体（神秘体）です。しかるに、この生ける体を構成する一人ひとりのメンバーには、体全体を養い育てる、という責任があります。体を養うためには、各自に与えられた賜物や能力を使うのです。健全な家族ならば、そこには、権力を欲しいままにするボス的存在や、振り回されるだけの苛められ役は存在しないはずです。だれでも、その人の完成された姿にまで成長していくこと、さらに、自分なりの責任を分かち合うことが期待されます。

家事について頻繁に振り返るには

家族の者は皆、自分の能力に合わせて、自分の分担を引き受けねばなりません。家族で責任を分かち合うとは、家族のニーズに応え、家事を手伝う能力を意味します。これは、個人それぞれの問題ではありません。その「家族」の問題です。「お母さんのお皿」「お父さんのガラクタ」ではないのです。「家族のお皿」「家族のガラクタ」なのです。

質問

1　私は責任ある人間だ、と思っていますか？（はい／いいえ）

それを証しするどんなしるしがありますか？

2　私は自分の家族において、責任ある態度をとっているでしょうか？（はい／いいえ）

責任あると思うしるし、あるいは責任を放棄しているしるしをあげてみましょう。

3　どのような意味・次元で、私は責任ある人間になっていく必要があるでしょうか？

4　私は、自分をコントロールしてくれるだれかを必要としているでしょうか？（はい／いいえ）

5　私の家族のうち、おおむね、お目付け役になっているのはだれでしょうか？

6　私の家族には、積極的にかかわろうとする姿勢、協力が見られますか？（はい／いいえ）

7　私の家族では、だれかが無責任な態度をとることが許されてしまっているでしょうか？（はい／

いいえ）

8　私たちの家族で、家事分担の仕方でいちばんよいと思うのは、どのような方法でしょうか？

私たち家族のゴールを計画し実現するために

私たちの「家」を「家庭」にしていくための最高の手段のひとつ、それは、家族皆で家族の目標（ゴール）を設定することです。家族に信頼を置いている人たちにとって、家族の目標を決めるのが、その特徴です。健全で力強い家族になっていくのだ！　と大胆に夢をもちましょう。

家族の状況がどうあれ、はっきりしていることは、幸せな家族生活というものは、「何となくできてしまう」ようなものではありません。

家族のゴールを設定するために重要なのは、家族のメンバー一人ひとりの心の中には、偉大な存在に育っていく「種」と育ててやるべき「夢」がある、と信じることです。

さらに重要なことがあります。ひとつの家族といっ

ても、そこには、さまざまな種類の目標が存在することを認識しなければなりません。個人としては？　仕事の方法の開発や能力のグレード・アップをする。夫婦には？　結婚の霊性を深める。家族全体では？　家族の通じ合いのきずなを強化する。

それから、メンバーそれぞれの目標が相反するのは、よくあることだ！　と心得ておく必要もあります。

次に重要なのは、家族で一緒に集まることです。一緒に集まって、家族の目標を評価し、対立関係にあるゴールをしっかり見分けて、「私の夢・目標」から「私たちの夢・目標」にしていけるよう、バランスをとることが大切です。実際のところ、家族の夢・目標を実現するために、個人が誓約することは、自分自身の夢およびゴールに到達するための重要な鍵といえるものです。

質問

1　人生において自分が何を求めているか、私にはわかっているでしょうか？（はい／いいえ）

私の夢は、どんなものでしょうか？

2　私は、自分の夢を実現するための目標を設定していますか？（はい／いいえ）

それは、どんな目標ですか？

3　私がゴールに到達するため、何がその推進力となるでしょうか？

4　私が自分の目標に向かって進んでいけるよう、家族はどのように助けることができるでしょうか？

5　私の家族は、自分たちがどこに進んでいこうとしているのか知っているでしょうか？（はい／いいえ）

どこに向かっていますか？

6　私たち家族の目標は、何でしょうか？

私たちは、そこに向かおうとしているでしょうか？（はい／いいえ）

7　私たちは、半年ごとに集まるなどして、今後半年のうちに自分たちが実現させたい目標を紙に書き、分かち合っているなどしているでしょうか？（はい／いいえ）

もしそうならば、具体的に、それはどのような

助けとなっているでしょうか？
もししていないならば、私はどうしたらよいと思いますか？

8　自分たちの家族の目標として提案できるものは、何でしょうか？

私たち家族のルールをつくるために

しっかりしたきずなで結ばれた、共に暮らし成長していく人の集まり、これが、家族です。父母は、子どもたちの成長に心を配りながら、自分たちもまた成長していきます。この「家族する（！）」プロセスの中で、家族は、自分たちが何を望んでいるかを悟っていくのです。いわば、「家族の目標（ゴール）」。しかし、どうやって、そのゴールに向けて前進していけばよいかは、すでにはっきりわかってしまっているわけではないのです。家族には、何らかの規則（ルール）が必要です。

家族のルールというと、ときには規律、あるいは躾（しつけ）という物差しで測られ、発展していくことがあります。たとえば、「十時には、家に帰っていること！」というようにです。しかしいちばんよい規則（ルール）とは、次のようなものです。すなわち、その規則のおかげで、問題が起こる以前に家族のよい価値観、行い、日常生活が

確固たるものとなり、また家族の心からの通じ合いやきずなが深められるものです。例としては、「口論のときの各自の心得」などがあげられるでしょう。

健全な家族は、しばりつける規律を重んじるより、むしろ家族で作った自由なルールを尊重します。厳しい規律は、家族のルールが破られ、その行いが乱れてしまったときに使われるものです。規律には、「予防的」というより、起こったしまったことを「矯正」するという傾向があります。

ルールを効果的に機能させるためには？

最初の期待どおりに行動し、よい結果を生むため、家族のルールは、理に適っており、前向きで、わかりやすく、短く、融通が効き、具体的でなければなりません。覚えやすいことも大切です。

ルールが破られるのは避けられません。したがって、ルールを見直して、修正していく必要があります。前向きな修正がなされたにもかかわらず、結果がおもわしくないならば、罰則が必要となるでしょう。

また、自分たちの現実に合わせ、家族全員でルールをつくるのは適切なやり方です。

ルールは、家族のためにあるのであって、家族がルールのためにあるのではないことを、忘れないようにしましょう。

質問

1　家族が幸せになるために規則（ルール）が必要だ！　と私は思うでしょうか？（はい／いいえ）
　なぜ、そう思いますか？

2　私たちの家族で実行しているルールは、どのようなものですか？　それはだれがつくりましたか？

3　家族のルールのうち、実際に期待通りの効果を生んでいるのは、どのルールですか？　また、期待にそぐわないルールは、どれでしょうか？　なぜそうなのか、説明してみましょう。

4　私は、自分たち家族のルールを破っていますか？（はい／いいえ）
　なぜでしょうか？

5　私たち家族のルールは、強制されたものです

か？（はい／いいえ）
　どのように、強制されたか否か、ことばにしてみましょう。
6　私たち家族のルールに関して、具体的に提案したいことは何でしょうか？
7　家族ぐるみでルールを実践し続けるため、私たちは、どのようにして計画を練っていくことができるでしょうか？

家族ぐるみで楽しむために

　幸せな家族というものは、一緒に遊ぶ時間をもっているものです。
　ここまで、健全で活力溢れる家族に育っていくため、自分たちの家族について、たくさんのことを考えてきました。しかし、いちばん大切なことが、無視されてきたように思えます。それは、家族みんなで楽しむ能力です。
　家族そろってレジャーをする時間をとれば、よりよく通じ合うためのチャンスを手に入れ、きずなを強めるのに役立ちます。
　レジャーを共に楽しんだ体験は、生涯の思い出になりますし、その思い出は、その後何年にもわたって、自分たちなりの家族像をさらに生み育ててくれることでしょう。
　家族ぐるみの余暇の時間は、お互いに思いっきり楽

しむひとときです。

現代のたいていの家族には、単純に一緒にいて楽しむための、十分な時間がありません。そのために、ストレスでまいってしまうのです。

仕事にまつわることや、仕事が終わってからやることに追いかけ回されるのは、いとも簡単なことです。不規則な日々の生活に押し流されて、今日のほとんどの家族にとっては、家庭で余暇の時間を楽しむなど、ぜいたくになってしまっているようです。

具体的な努力が必要です。家族でレジャーを楽しむために、自由に使える時間をつくりださねばなりません。こう言えると思います。「一緒に遊ぶ家族は、一緒に成長していくものだ」と。

質問

1　どのようにしたら、幸せを得るために、家族でレジャーを楽しむことができるでしょうか？

2　私たちの家族では、余暇を楽しむ時間をスケジュールに取り入れているでしょうか？（はい／いいえ）

具体的には？

3　私が大好きな余暇の楽しみ方は何でしょうか？なぜ、それが好きなのでしょうか？

4　私が家族とすごした「最高の時間」といえば、いつのことだったでしょうか？

5　私たち家族は、レジャーを楽しむ際、全員で参加しているでしょうか？（はい／いいえ）もし、だれかが参加しないのでしたら、どうしてでしょうか？

6　私は、家族での余暇の時間に、どれぐらい積極的に関わっているでしょうか？

7　余暇の楽しみ方をいろいろにして、みんなが選択できるようにするには、どのようしたらよいでしょうか？

8　一緒に楽しくすごすことで、自分たちの家族は前向きになることができる！　と私は思っていますか？（はい／いいえ）

具体的に、そうだった体験を書いてみましょう。

家庭でお祝いをするために

家族のもっている、肯定的でユニークな部分に光をあてるのは、家族生活を豊かにするのに役立つ方法です。自分たちの肯定的な事柄についてお祝いをすれば、家族みんながエネルギーを得、勇気づけられて、肯定的とは言いがたいことに引きずられずにすむでしょう。問題や欠点でがんじがらめになってしまうと、家族はお祝いをする気も失せてしまうでしょう。

家庭でお祝いを設けることの目的は、家族そろって、自分たちにとって大切な出来事や伝統行事を記念することにあります。

何を、どのようにして、お祝いするのでしょうか？

まず第一に、私たち家族の創造主である神を祝うよう、私たちは呼びかけられています。祝祭日などには、みんな一緒になって、感謝と賛美を神に捧げます。

第二に、私たち家族のルーツ（先祖）を祝います。自分たち家族の伝統や儀式を執り行い、家族ならではの精神（霊性）を表わします。また、自分たちが、かけがえのない家族であることをも同時に祝います。こうして、伝統と儀式が、自分たち家系のならわしとなり、後世に伝えられていくわけです。

三番めです。今度は私たち一人ひとりの番です。家族生活で通常行われるお祝いです。すなわち、おめでた、誕生日、洗礼記念日、結婚式、何周年ごとのお祝い、肉体的霊的いやしの記念、卒業式、再会の歓迎会、送別会、父の日、母の日、敬老の日、特別の記念に。

質問

1　私は、家族でお祝いするのが好きですか？（はい／いいえ）
　どうしてでしょうか？

2　私がとても気にいっている家族のお祝いは、何でしょうか？

3　私たち家族ならではの伝統、あるいは儀式はどのようなものでしょうか？

4　私たちの友人の家では、どのような特別な伝統、あるいは儀式をもっていますか？

5　新しい家族の伝統、あるいは儀式を提案する気が私にはありますか？（はい／いいえ）

どのようなものですか？

6　一般的な出来事について、私たち家族では、どのような祝い方をすることができるでしょうか？

7　私たちは、祝祭日に神を祝うとき、どのようにしていますか？

神の祝いを改善する必要が私たちにはありますか？（はい／いいえ）

新たに何をしますか？　どのようにそれを祝いますか？

第三部　みことばを囲んで

幸せな家族ならば、
神を自分たちの中心に据えているものです。
幸せな家族は、
共に手をとりあって神を探求します。
幸せな家族は、
神の生けるみことばに共に聴き入ります。
幸せな家族は、
共に祈ります。
だからこそ、彼らは、共にいるのです。
家族が幸せな家庭である秘訣は、
神です。
もし、
私たちが幸せな家族をめざしているならば、
自分たち自身に
正直に問いかけてみることです。

▽私の家族で、
神は、大切にされているでしょうか？
▽私の家庭には、
神の居場所があるでしょうか？

▽私たち家族が、
神を中心にしていないのならば、
私たちには、何ができるのでしょうか？

このワークブック第三部の目的は、
読者の皆さんが、
家族ぐるみで
神を探究し、神にしたがうという、
すばらしい冒険を歩んでいけるよう
そのガイド役をすることです。
読者の皆さんが自ら体験するのです。
つまり、
私たち家族は、
神に近づけば近づくほど、
一致するものなのだ！　と。

第1章
聖　書

「食卓を囲んで」を通して、読者の皆さんは、たいへん意義深い体験をされたことと、私は確信しています。

しかし同時に、個人の内省と家族での分かち合いを通して、深遠な疑問も生まれたのではないでしょうか？

だれが、それにふさわしく答えてくれるでしょうか？　それをなされるのは、ただおひとり、神です。

神に出会うためには、どうすればよいでしょうか？

神は、信仰のみが証してくれる神秘です。信仰は、謙遜でかざらない人たちへの、神からの賜物です。

これこそ、まさに、救いの歴史を通して数えきれない信仰者たちが証している内容です。

彼ら信仰者は、神を探し求めていました。そして、日が明け初めるころ……、あるいは日暮れ……、あるいは真夜中に神の声を聴いたのです。

彼ら信仰者は、その声に心をこめて聴き入りました。そうして、そのみことばのうちに、人生の深遠な疑問に対する答えを見いだしました。

彼ら信仰者は、こうして、まったく新しい人格を得ました。まったく新しい家族になりました。まったく新しい人として生まれたのです。

神は、多くの方法ですべての人に語りかけておられます。

聖書……！

心の底から神に耳を傾けるために、聖書は、その最高の機会を提供してくれるものです。書き記されている神ご自身のみことばを通して、神の生ける声を聴きわけ、理解するのです。

生ける神の声は、私たちの良心の声の中に、あるい

は日常生活の何かの出来事の中に、私たちが味わう危機・痛み・苦悩を通して、私たちを取り囲む困っている人や貧しい人を通して響いてきます。

第三部は読者の皆さんと、皆さんのご家族を、「みことばを囲んで」という家庭での集いに招くためのものです。

聖書とは、何でしょうか？

「BIBLE（聖書）」ということばは、ギリシア語の「BIBLIA」が語源で、「BOOKS（本）」がその意味するところです。聖書は、神について書かれた古文書を集めたもので、二部構成となっています。「旧約」と「新約」の二種類です。「約」とは、神と人間との間に交わされた「誓約」を意味します。

旧約聖書（同時にユダヤ教の聖典）。ヘブライ語で書かれた宗教書を集めたものです。これらが書かれた期間には、九百年以上の幅があります。ここに収められているのは、英雄や出来事の歴史、法律、預言、祈り、深遠な文学・詩作などに及び、地上でのイスラエルの使命を探求した実りです。カトリック、ギリシア正教、聖公会では、総計四十六冊。プロテスタントの教会には、三十九冊の本があります。

新約聖書（キリスト者の聖典）。ギリシア語で記された二十七冊の本からできています。ここには以下のものが収蔵されています。

▽「四福音書」。「四冊の福音書」の意。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネによる「福音」と呼ばれています。ナザレのイエスの物語です。イエスの誕生、幼年期、その教え、その死と復活にまで及びます。

▽「使徒行録」。ペトロとパウロの働き、初代キリスト者共同体の歩みです。

▽二十一の書簡（手紙）。パウロ、ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、ユダから、各地の教会といろいろな人にあてたものです。福音書が完成する以前に書かれたもので、イエスの死後、二、三十年経過しています。ですから、初期のキリスト者によって、書かれました。

▽啓示の書（ヨハネの黙示録）。キリストと彼に結ばれたしたがう人たちの、サタンおよびその軍団に対する戦いを描いたもの。サタンの完全な敗北と、神の王国の究極の勝利が記されています。

新約聖書は、宣教のハンドブックです。ここには、クリスチャンの教会の誕生、成長、その教えが記されています。

いつの時代でも、聖書は、ベストセラーとして最大の出版部数を誇ってきました。アメリカ聖書協会では、一八一六年の創設以来、およそ三十億冊の聖書が印刷されてきたと見積もっています。印刷の技術が発明されてからは、約千八百五十か国のことばに翻訳されてきました。今日では、地球上のたいていの人たちは、母国語で（少なくとも部分訳で）読むことができます。

お勧めの聖書

聖書を手にとってみても、たいていの人は、どれを選んでよいか迷うことでしょう。次のリストを参考にしてはいかがでしょうか？

カトリックの訳

▽バルバロ訳（ラテン語からの訳）

▽フランシスコ会聖書研究所訳（ヘブライ語・ギリシア語に基づいた訳）

など

プロテスタントの訳
▽新改訳
▽日本聖書協会訳
など

カトリック・プロテスタント共訳
▽新共同訳（現在カトリック教会の典礼で使用されているもの）

聖書の著者はだれ？

テリー・ホールは、その著書「How We Got Our Old Testament（＝旧約聖書のなりたち）p.32」に、こう書いています。「四十人もの異なる著者、その二十もの異なる職種、彼らの十の国籍と千五百年という長い『時』の流れ、三つの使用言語、二千九百三十人もの登場人物と千五百五十一もの場所……。このすべてに監督の目を光らせるなど、編集者・出版社のだれひとりできはしなかった。」

この信じがたい本の著者は、王・政治家・漁師・祭司・予言者・医者・収税人・農夫・将軍・天幕作りのラビ（ユダヤ教の先生）にまで及ぶのです。四福音書には、大工転じて教師となった者の人生が詳細に描かれています。聖書は、「この人物は、人の形をとった実際の神であった」と証言しています。

ほんとうの意味で聖書を書いたのは、だれなのでし

よう？　また、なぜ、一冊の本にまとめあげたのでしょうか？　どのようにして、数千年もの間、聖書は生き残ってきたのでしょう？　はたして、私たちが「聖書」と呼んでいるこの書物には、まちがいや不完全はないのでしょうか？

もし、この最後の質問に「はい」と答えるならば、その人は、明らかに、「この本は、書かれるうえで、神に導かれた！」と信じていることになるわけです。逆に答えが「いいえ」ならば、聖書は人間の理性と努力によって構成されたもの、と信じていることになります。

正しいのはどちらでしょうか？　はたして、聖書は、神の思いを文字にしたものなのでしょうか？　その行間から、神が私たちに語りかけておられるというのでしょうか？　「神は、人間をご自分の手足として聖書を書かれたか、否か」などという問題が、死すべきはかない存在にすぎない私たちに、いったいどのようにしてわかるというのでしょう？　聖書は神感によって書かれているなどと、どうやって、いったいだれが知りうるのでしょうか？

これらすべての疑問に対する答えは、聖書の中にあるのです。聖書自身に、その鍵が隠されているのです。「神がそのメッセージを個人的に実際に伝えられたのだ！」と、書き手自身が臆さず明言している回数は、ある聖書研究者が数えたところ、三千八百回以上だそうです。例をいくつかあげてみましょう。

「主のことばが、私にくだった」（エレミア書一章4節）、「主のことばを聞け。ソドムの王子たちよ」（イザヤ書一章10節）、「すると、主のことばが、私に臨んだ」（エゼキエル書六章1節）、「ホセアにくだった、主のことば」（ホセア一章1節）、「主なる神は言われた」（ヨハネの黙示録一章8節）。

さらに、ヘブライ一章1～2節には、こうあります。「神は、昔、預言者たちを通して、いろいろな時に、いろいろな方法で先祖たちに語られたが、この『終わりの時代』には、おん子を通してわたしたちに語られました。神はおん子を万物の世継ぎと定め、また、おん子によって宇宙をお造りになりました」。

聖書の信憑性（真理）を証明するための、聖書に基づいたやり方は、まさにシンプルそのものです。つま

り、神の言ったことを実践すること。使徒行録十七章11節に、これが見られます。「（彼らは）熱心に（パウロとシラスを通して語られた）みことばに耳を傾け、果たしてそのとおりであるかどうか、毎日、聖書を調べていた」。

したがって、「だれが、聖書の真の著者であるか？」というこの問いに対する答えは、「神こそ、その真の著者である」ということになります。しかし、私たちは、自分たちの力でそれを証明することはできません。聖書の一ページ一ページに記されている神の掟を実践することによって、主張の信憑性を試さなければならないのです。そうすれば、「聖書とは、まさに、神のみことばなのだ！」と見いだすことになるでしょう。あるスポーツの選手が、かつてこう告白しています。「何年ものあいだ、聖書なんて何の意味もないと思っていた。砂をかむような味気なさ……。神が僕に語りかける手段としてこの本を使っている！　ってわかった途端、聖書が生き生きとしだしたんだ。」

なぜ、聖書を読むのでしょうか？

聖書がどのようなものであるかわかったならば、聖書を読む理由を、あれこれ取りざたする必要もないだろうと思います。しかし、万全を期して、聖書に対する考え方について、そのいくつかをご紹介したいと思います。聖書を自分の生活で大切に活かしている人はひじょうにたくさんおられますが、その中から、いくつかを取り上げてみました。

▽聖書は、生きている証しです。本棚で百科事典と一緒に埃（ほこり）にまみれる価値しかない本とは違うのです。

▽聖書は、単によい思想・物語が収められている以上の価値がある本です。聖書は、神の現存と力が目に見える形となったものです。

▽聖書は、神の生けるみことばです。だからこそ、歴史上の数多くの人たちは、聖書の中で、聖書を

通して、神が語られるのだ！　と信じてきたのです。

▽真の信仰者にとっては、聖書が、自分たちにとって自画像の役割を果たしてくれることを体験します。聖書の中に、自分自身が映しだされ、自らの生活が聖書と関係づけられることで、聖書を読むことはより深い意味をもつようになるのです。

▽パウロは、テモテへの第二の手紙三章16～17節の中でこう述べています。「聖書はすべて、神の霊感によるもので、人を教え、戒め、誤りを正し、正しさに導く教育をするために有益です。それによって、神の人は、あらゆる善い業を果たすことのできる、最適任者となるのです」。

▽確かに、神は、聖書に見られる掟を、何も介せず直接に啓示されたわけではありませんでした。人間の方がそれらの掟を発見できるよう、その力と才能とを神は人間に備えられたのです。

人間が自分たちでは発見することなどできなかった知識を、神の方から啓示してくださいました。その啓示こそ、聖書なのです。たとえば、人間は、自分たちが何であり、また、なぜこの地に生きているのか、自分たちで発見することができませんでした。つまり、人間の人生には真の意味があるのか、あるとしたら、人生の目的はいったい何なのか、わからなかったのです。

人間は、平和・幸せ・豊かな健康・真の成功に対する真理の道を発見することができないままでした。聖書は、このための知識を真に啓示してくれます。聖書は、真の知識にとって、その土台となるものです。

教皇ヨハネ・パウロⅡ世は、次のように教えておられます。「イエスのみことばを通して、私たちにまずわかること、そしてさらにわかってくることは、神の本性は、生命そのものであり、光そのものであり、愛そのものであり、三位一体であるということです。哲学者や神学者のだれひとりとして、神の本性を見極めることなどできません。みことばの託身であるキリストおひとりが、この究極の真理を啓示し、保証することがおできになります。したがって、だからこそ、創造者である神と人間に、愛のきずなが存在しているこ

とを、私たちは確信するのです。人類のすべては、神の愛から流れる永遠の脈動です」。

「イエスのみことばから、私たちは、永遠に変わらぬ道を知るのです。イエスだけが、ご自身の神的みことばを通して、私たちに絶対の約束を与えることがおできになります。すなわち、霊魂の不滅性と肉体の最終的な復活。その結果、私たちが生まれ、暮らし、時を超越した存在となって幸福へと向かっていくことには、すばらしい価値がある、と悟れるのです」。

▽もし今まであげた、どの根拠も皆さんに確信をもたらさなかったならば、聖書を心の眼で読んでみてください。そうすれば、神のみことばに出会うはずです。

聖書は、どのようにして読めばよいのでしょうか？

ひとつの事実があります。数多くの人が聖書をもっているのに、読んでいないという事実です。その理由を彼らはこう言います。「よく理解できないんです」。

事実、聖書は、一般の書籍とは違います。聖書はいつの時代でも神のみことばには違いないのですが、人間だった書き手は、二十世紀の人びとに向けて書いたわけではないのです。二千年から三千年前の人びとに対し、しかも、その時代の事柄について書いたのです。

ですから、現代の読者には、理解できないことがあるわけです。

そこで、導入や用語解説、関連参考箇所など、読むときの手助け・参照がついている聖書をもっていると役立つわけです。

というのも、「聖書は、どうやって理解したらいい

の？」と尋ねたのは、私たちが最初ではないからです。私たちは、同様の探求に専心した先人の実りを使わせていただけるわけです。以下に、役立つと思われるアイデアを紹介します。

▽聖書を選ぶときは、導入・脚注など、読者がかかえている問題を理解するのに役立つ編集がなされているものから選びましょう。

▽選んで読みましょう。まず最初は、最初から最後まで順々に読んでいこうとする代わりに、読みやすく興味がもてるものを選んで読んでいくのです。たとえば、詩編とか福音書などから読み初めます。

▽教会が定めている典礼暦にしたがって読みましょう。黙想（内省）のためにどこかの箇所を使うときは、日曜日に教会で読まれる箇所から選ぶことが勧められます。その時の説教や典礼から、ハッとさせられるようなインスピレーションを受けとることでしょう。

▽聖書を読む時間を決めます。充実したときをすごすためです。

▽聖書を開く前には、謙虚な心で祈りましょう。そうすれば、神は私たちの魂を清め、開いてくださることでしょう。すなわち、理性・情緒・意思を。

▽二回読みましょう。最初は、テキストを理性で読んでください。その後、今度は、心から神のみことばに耳を傾けましょう。神は、私たちの心に語りかけてくださいます。

▽正直な心で読んでから、自分自身に問いかけてみましょう。「神は私に、何を語ろうとしておられるのだろうか？」神のみことばは、私たちとは違い、空虚なものではありません。神のみことばは、あらゆる現実にとって、その土台となるものです。

これからの章の目的として中心となるのは、家族で一緒に聖書にアプローチする機会を提供することです。こうして、家族として、神の生けるみことばに聴き入ることができるようになるのです。

なぜ、家族で一緒に聖書を読むのでしょうか？

なぜなら、聖書が言っているように、神は「ご自身にかたどり、ご自身に似せて」（創世記一章26節）家

族を創造されたからです。さらに、その「神は愛だからです」（一ヨハネ四章8節）。ですから、神の似姿であるためには、愛のきずなのうちに生きなければなりません。

第2章
わくわくさせられる家族の物語

家族は、
神のデザインです。
神の発明です。
神の創造です。
神は、
家族の設計者として、
家族のあるべき姿をいだいておられます。
神である主は、
結婚と家族にとって、
最高の権威であられます。

ただおひとり神だけが、
家族が幸せになり、
また、よりいっそうそうなっていくために、
何をどうすべきか、ご存じです。
ご自身の発明であり、
夢である家族について、
神は、
何を言っておられるのか、
一緒に聴いていきましょう。
神から最高度に愛された、
そんな家族の物語を通して、
神に耳傾けていきましょう。
神の慈しみと愛に満ちた、
救いのご計画において、
私たち自身の家族は、
神からの
どのような選びのうちにあるのか
発見するよう、
共に努力いたしましょう。

いちばん最初の家族の物語

創造（創世記一章1、27～28節・二章24節参照）

はじめに、神はご自身にかたどって人を造られた。人を神にかたどって造り、男と女とに造られた。神はかれらを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、そして地を従わせよ」。

それゆえ、男は父母を離れて、妻に結びつき、ふたりは一体となるのである。

誘惑と堕落（創世記二章16～17節・三章4～6、23節参照）

神ヤーウェは人に命じて、「おまえは園にあるどの木の実を食べてもよい。しかし善悪の知識の木の実は食べてはならない。それを食べると、必ず死ぬであろう」と言われた。

しかしへびは女に、「いいえ、あなたがたは死にはしません。それを食べると、あなたがたの目が開かれて善悪を知り、神のようになることを、神は知っているからです」と言った。

そこで、女はそれを取って食べ、ともにいた夫にも与えたので、かれも食べた。（そこで神は）人をエデンの園から追い出された。

家族の危機（創世記四章1～16節参照）

人はその妻エワを知った。彼女はみごもってカインを産み、また、彼女はカインの弟アベルを産んだ。日がたって、カインはヤーウェに供え物として地の作物をささげた。アベルもまた、羊のういごを取り、そのあぶらみをそえてささげた。ヤーウェはアベルとその供え物とをよみされたが、カインとその供え物とはよみされなかった。カインは大いにおこり、顔を伏せた。

カインは弟アベルに、「野原へ行こう」と言った。さてふたりが野原にいる時、カインは弟アベルにとびかかって、かれを殺した。そこでヤーウェはカインに、「弟アベルはどこにいるのか」と聞かれた。カインは、「知りません。わたしは弟の番人なのでしょうか」と

答えた。ヤーウェは言われた、「なんという事をしたのか。聞け、おまえの弟の血が土からわたしに叫んでいる。おまえは地をさまよいさすらう者となるであろう」。

カインはヤーウェのみまえを退き、エデンの東、ノドの地に住んだ。

内省と分かち合いのために

1　これらの聖書の箇所を通して、神は、私に何を語ろうとしておられるのでしょうか？

2　神は、私たち家族に、何を語ろうしておられるでしょうか？

3　私たちは、それぞれ個人としてあるいは家族として、どのように神の呼びかけに応えていくつもりですか？

唯一救われた家族の話

人類の堕落（創世記六章5～7節参照）

ヤーウェは、人の悪が地上にはびこり、あらゆる心の思いが絶えず悪いことにばかり傾いているのを見て、地の上に人を造ったことを悔み、心を痛められた。ヤーウェは、「わたしは、創造した人を……、地のおもてから滅ぼそう。それらを造ったことを悔いるから」と言われた。

正しき者、ノア[*1]（創世記六章8、13～14、22節、七章1節参照）

しかし、ノアはヤーウェの心にかなっていた。そこで神はノアに言われた。「……おまえはゴーファ材で箱船を造れ。箱船の中にへやを造り、そのうちとそとをチャンで塗れ」。ノアはそのとおりにした。ノアはすべて神が命じたとおりにした。

ヤーウェはノアに言われた、「おまえとおまえの家族はみな箱船にはいれ。わたしはおまえを今の世の人の中で正しいと見たからである。」

救われた唯一の家族（創世記七章7、23節、八章14～20節参照）

ノア、むすこたち、妻、むすこらの嫁たちは、洪水を避けるためにともに箱船にはいった。ヤーウェは地の上の生き物をすべて、滅ぼされた。ノアと、箱船にノアとともにいたものだけが生き残った。

第二の月の二十七日に地はかわききった。そこで神はノアに言われた。「おまえは、おまえの妻、むすこたち、むすこたちの嫁らとともに箱船から出よ」。ノアは、むすこたちと妻とむすこたちの嫁らを連れて外に出た。すべての獣、すべての家畜、すべての鳥、地をはうすべてのものは、その種類ごとに箱船の外に出た。

さて、ノアはヤーウェのために祭壇を築き、すべての清い獣すべての清い鳥の中から取って、祭壇の上で燔祭をささげた。

誓約と祝福（創世記九章1、8～17節参照）

神はノアとそのむすこたちを祝福して言われた。「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」次に神はノアとそのむすこたちに言われた、「見よ、わたしははおまえたちとおまえたちのあとに続く子孫と誓約[*2]を立てる。

（＊1）フランシスコ会訳本文では「ノエ」。

（＊2）フランシスコ会訳本文では「契約」となっているこの語（当ワークブック原文では"COVENANT"）は、「誓約」と訳しかえてあります。日本語の「契約」ということばは、仕事上などの、条件つきの約束という意味合いをこめて使われることが多く、英語では"CONTRACT"に該当します。ここで神がされた「約束」は、相手の態度を問わず自らの約束を果たし続ける、という無条件・無私の姿勢がこめられているため、「誓約」と訳し、いわゆる「契約」との差を示そうとしたわけです。

内省と分かち合いのために

1　この物語は、私の家族での体験と、どのように

結びつくでしょうか？

2　この物語から、自分の個人的な生活を深められる事柄を、私は何か学んだでしょうか？（はい／いいえ）

3　私たち家族の生活について、何らかの発見があったでしょうか？

選ばれし者

神からの召し出し（創世記十二章1～4節、十五章1～6節参照）

ヤーウェはアブラムに言われた、
「おまえの国、おまえの親族、おまえの父の家を離れ、
わたしがおまえに示す地に向かえ。
わたしはおまえを大きな民にする。
わたしはおまえを祝福し、
おまえの名は祝福として唱えられる。
おまえによって、
地のすべての民はかれら自身を祝福する。」

アブラムはヤーウェの言われたとおりに出発した。

これらの出来事の後、ヤーウェはかれを外に連れ出し、「天を仰いで見よ。星を数えられるならば、数えてみよ」と言われた。またかれに、「おまえの子孫はあのようになる」と言われた。アブラムはヤーウェを

信じた。ヤーウェはそれを義としてかれに帰せられた。

イサクの誕生（創世記二十一章1～3節参照）

ヤーウェは、さきに語られたとおり、サラになされた。サラはみごもり、神が告げられた時になって、年老いたアブラハムに男の子を産んだ。アブラハムは、サラが自分に産んだ子をイサクと名づけた。

アブラハムの犠牲、そして神の約束（創世記二十二章1～19節参照）

これらの出来事のあとで、神はアブラハムを試みてかれに、「アブラハムよ」と言われた。アブラハムは、「はい」と答えた。神は、「おまえのむすこ、おまえの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、山々の中のわたしがおまえに示す山で、その子を燔祭としてささげよ」と言われた。

アブラハムは朝早く起きてろばに馬具をつけ、燔祭に用いるまきを割り、ふたりの若者と自分の子イサクを連れ、神がかれに示された所に向かって出かけた。かれらは神の示された所に着いた。アブラハムはそこに祭壇を築き、その上にまきをととのえ、その子イサクを縛って、祭壇のまきの上に載せた。アブラハムは手を伸ばして刃物を取り、自分の子をいけにえとして殺そうとした。その時ヤーウェの使いが天から、「アブラハムよ、アブラハムよ」と呼びかけた。アブラハムは、「はい」と答えた。み使いは、「その子に手を下すな。何もするな。今こそわたしは、おまえが神を恐れ、おまえのむすこ、おまえのひとり子さえもわたしのために惜しまないということを認める」と言った。

ヤーウェの使いがふたたび天からアブラハムに呼びかけて、言った。「ヤーウェはのたもう『わたしみずからにかけて誓う。おまえはこのようにして、おまえのむすこ、おまえのひとり子を惜しまなかったがゆえに、わたしはおまえを大いに祝し、おまえの子孫を空の星、浜のまさごのようにおびただしく増そう』」。

内省と分かち合いのために

1　これらの聖書の箇所を通して、主は、私たち家族に何を語りかけようとしておられると思いますか？

聖家族

ヨセフとマリア（ルカによる福音書一章26～38節参照）

さて、六ケ月目に、ガリラヤのナザレという町の一人のおとめのもとに、み使いガブリエルが、神から遣わされた。このおとめはダビデ家のヨセフという人のいいなずけで、名をマリアと言った。み使いは彼女のところに来て、「恵まれた者、喜びなさい。あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その名をイエス[*1]とつけなさい」。

そこでマリアはみ使いに、「どうしてそのようなことがありえましょうか、わたくしは男の人を知りませんのに」と言った。み使いは答えた。「聖霊があなたに臨み、いと高きおん者の力があなたを覆うでしょう。それゆえ、お生まれになる子は聖なる者で、神の子と呼ばれます」。そこでマリアは、「わたくしは主のはしためです。おことばどおり、この身になりますように」と答えた。

イエスの誕生（ルカによる福音書二章1～21節参照）

ところが、二人がそこ（ベトレヘム）にいる間に、マリアはお産の日が満ちて、男の初子を産んだ。そして、その子をうぶぎにくるみ、かいばおけに寝かせた。宿屋には、彼らのために場所がなかったからである。

割礼を施すべき八日目になったとき、みどり子をイエスと名づけた。

神殿に奉献されるイエス（ルカによる福音書二章22～40節参照）

両親は、みどり子を連れてエルサレムに上った。その子を主にささげるためである。

家族の苦難（ルカによる福音書二章41～52節参照）

さて、両親は、過越の祭りのときには、エルサレムへ上っていた。イエスが十二歳になられたときも、彼

らは祭りのならわしに従って都に上った。祭りの期間が終わって、帰路についたが、少年イエスはエルサレムに残っておられた。両親はそれに気づかなかった。それで、道連れの中にイエスがいるのだろうと思いこみ、一日の旅を終えてから、親戚や知人の間を捜し回った。しかし、見つからなかったので、イエスを捜しながらエルサレムまで引き返した。そして、三日目に、イエスが神殿の境内で、学者たちに囲まれて座り、彼らの言葉を聞き、また、彼らに質問しておられるのを見つけた。両親はイエスを見て驚き、母は、「あなたは、どうしてこんなことをしましたか」と言った。すると、イエスは、「どうして、わたくしをお捜しになったのですか。わたくしが自分の父の家にいるのはあたりまえだということをご存じなかったのですか」と仰せになった。しかし、両親はイエスが言われたことの意味がわからなかった。

それからイエスは、両親とともにナザレに下って行き、二人に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをことごとく心に留めていた。イエスは知恵も増し、背たけも伸び、ますます神と人とに愛された。

（＊1）フランシスコ会訳本文では「イエズス」。

内省と分かち合いのために

1　ナザレトの聖家族から、私たちは何を学ぶことができるでしょうか？

偉大な家族たち

イサクとレベッカの家族（創世記二十五章19～34節、二十七章1～45節参照）

イサクは、レベッカをめとった時、四十歳であった。イサクは妻が不妊の女なので、妻のためにヤーウェに祈願した。ヤーウェはその祈願を聞かれ、妻レベッカはみごもった。その子らが胎内で押し合ったので、彼女は、「こんなことでは、わたしはどうなるでしょうか」と言って、ヤーウェに伺いを立てに行った。ヤーウェは彼女に言われた。

「二つの民族がおまえの胎内にある。
二つの民はおまえの腹から分れて出る。
一つの民は他の民よりも強く、
兄は弟に仕えるであろう」。

月満ちて子を生む時になって見ると、胎内の子はふたごであった。はじめに出てきたのは、赤くて全身毛衣のようであったので、その名はエサウとつけられた。そのあとに弟がエサウのかかとを手でつかんだまま出てきたので、その名はヤコブとつけられた。

ヤコブの家族の繁栄（創世記三十五章1～29節、出エジプト記一章1～7節参照）

神はヤコブに、「立て。ベテルに上ってそこに住み、かつておまえが兄エサウからのがれていた時、おまえに現れた神に祭壇を築け」と言われた。ヤコブは自分の家族および自分とともにいるすべての者に言った、「おまえたちのところにあるよその国の神々を取り除き、身を清め、着物を替えよ。われわれは立って、ベテルに上りそこに祭壇を築こう。神は苦難の日にわたしを助け、わたしの歩んだ道でわたしとともにおられたから」。かれらは持っていたよその国の神々と耳につけていた輪とをヤコブに渡した。神はふたたびかれに現われ、かれを祝福された。神はかれに言われた、

「おまえの名はヤコブであるが、
もうおまえの名をヤコブと呼んではならない。
おまえの名はイスラエルである。

わたしはエル・シャッダイ（全能の神）である。
生めよ、ふえよ。
一つの民、多くの民がおまえから出て、
王たちもおまえから生れ出るであろう。」
ヤコブから生まれ出たものは、合わせて七十人である。イスラエルの子らは子を生み、おびただしくふえ、多くなって非常に強くなり、エジプトの地に満ちていた。

英雄的な片親家族
▽マッテアとその息子たち（マカバイ記上二章1～70節参照）
▽母親と七人の兄弟の殉教（マカバイ記下七章1～42節参照）

内省と分かち合いのために
1　以上の四組の家族のうち、私の家族にいちばん近いのは、どの家族でしょうか？
それはなぜですか？

第3章
神の掟

ほんとうに、
神は、
ご計画をもっておられるのでしょうか？

神は、
ご計画を
私たちに
啓示しておられるのでしょうか？

いずれにしろ、
神のご計画とは、何なのでしょうか？

神は、
私たちに
ご自身の掟を授けられましたか？

その掟とは、どんなものですか？

現代の家族にとって、
神の掟は、
力をもっているでしょうか？

私たちの家庭にとって、
神の掟は、
働いているでしょうか？

もっとも偉大な掟については、
どうでしょうか？

私たちは、どうしたら
主から賜ったもっとも重要な掟を
家庭で活かせるのでしょうか？

いったいどうしたら、
自分たちの家庭のワクを越えて、
主の掟の声を轟かせることが
できるのでしょうか？

絶対のこと！
もし、私たちが真に幸せになりたいならば、
家族ぐるみで聖書に立ち戻り、
神から、
教えを受けなければならないのです。

旧約聖書から

十戒（出エジプト記十九章16～25節、二十章1～26節・申命記五章1～33節参照）

シナイ山は全山煙った。ヤーウェが火のなかにあって山に下られたからである。モーセは民のところに下って、かれらに言った……。神は次のようにこのすべてのことばを仰せられた。

（第一戒）わたしは、おまえの神……。おまえはわたしのほかになにものをも神としてはならない。

（第二戒）おまえは、おまえの神の名をみだりに呼んではならない。

（第三戒）安息日を守りこれを聖とせよ。

（第四戒）おまえの父と母とを敬え。

（第五戒）おまえは殺してはならない。

（第六戒）おまえは姦通してはならない。

（第七戒）おまえは盗んではならない。

（第八戒）おまえは隣人について偽証してはならない。
（第九戒）おまえは隣人の妻をむさぼってはならない。
（第十戒）おまえは隣人のものはなにものも欲しがってはならない。

偉大な掟（申命記六章1～9節参照）

イスラエルよ、聞け。ヤーウェこそ、ただヤーウェのみがわたしたちの神である。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、ヤーウェを愛しなさい。わたしが今日、あなたに命じるこれらの言葉を心に留め、あなたの子供たちにそれらを繰り返し教え、あなたが家にいるときも、道を歩くときも、寝るときも起きるときも、それらを唱えなさい。

新たな誓約（エレミア書三十一章31～37節参照）

「その日が到来する」と主は言われる、

「イスラエルとユダの家に新たな誓約をするその日が。新たな誓約は、かつて彼らの先祖たちと交わしたものとは似ても似つかない。あのとき彼らは、私とのその誓約を捨て去った……。しかし、このたび私が行おうとしている誓約は、これである。すなわち、彼らの内面に私の法を置き、その心に書きいれる。私が彼らの神となり、彼らは、私の民となるであろう……。もっとも小さいものから偉大な者にいたるまで、すべての者が私を親しく知るようになる」。こう主は言われる。

内省と分かち合いのために

1　今日、神の掟には実効力があるでしょうか？（はい／いいえ）
　具体的に説明してください。

2　なぜ、ほとんどの人びとは、神の掟をないがしろにしているのでしょうか？

3　私たちは、家族として、神の掟を忠実に守っているでしょうか？（はい／いいえ）
　具体的に書いてください。

新約聖書から

ナザレのイエスの教え（マタイによる福音書五章17～48節参照）

あなたがたは、わたしが律法や預言者の教えを廃止するために来たと思ってはならない。廃止するためではなく、成就するために来たのである。

神の掟（マタイによる福音書十九章16～30節参照）

すると、一人の人がイエスに近寄って、「先生、永遠のいのちを得るには、どんな善いことをしたらいいでしょうか」と言った。イエスは仰せになった。「もしあなたがいのちに入りたいならば、おきてを守りなさい」。彼が「どのおきてですか」と聞くと、イエスは、

「殺してはならない。
姦通してはならない。
盗んではならない。
偽証してはならない。
父母を敬え。
また、隣人を自分のように愛せよ」

とお答えになった。この青年がイエスに、「わたしはそれらを皆、守っています。まだ何か欠けていることがありますか」と言うと、イエスは仰せになった。「もし完全になりたいならば、帰って、あなたの持ち物を売り、貧しい人びとに施しなさい。そうすれば、天に宝を蓄えることになる。それから、わたしについて来なさい」

もっとも偉大な第一の掟（マタイによる福音書二十二章34～40節参照）

ファリサイ派のうちの一人が、イエスを試みようとして、「先生、どのおきてが律法のうちで、いちばん重要ですか」と尋ねた。イエスは答えて、

「『心を尽くし、
精神を尽くし、
思いを尽くして、

あなたの神である主を愛せよ』。
これがいちばん重要な、第一のおきてである。
第二もこれに似ている。
『隣人をあなた自身のように愛せよ』。
すべての律法と預言者の教えはこの二つのおきてに基づいている」
と仰せになった。

新たな掟（ヨハネによる福音書十五章9～17節参照）

父がわたしを愛してこられたように、
わたしもあなたたちを愛してきた。
わたしの愛に留まりなさい。
あなたたちもわたしの掟を守るならば、
わたしの愛に留まるであろう。
わたしがあなたたちを愛したように、
互いに愛し合うこと、これがわたしの掟である。
友のために命を捨てる、
これにまさる大きな愛はない。

金言（マタイによる福音書七章12～23節参照）

何事でも、人から自分にしてもらいたいと望むことを、人にもしてあげなさい。これが律法と預言者の教えである。

内省と分かち合いのために

1　「もっとも偉大な第一の掟」についていえば、私たちは、家族として、どの程度生活に活かしているでしょうか？

2　「新たな掟」については、私たちは、家庭でこれを実践しているでしょうか？（はい／いいえ）
　具体的に描写してください。

3　神の掟にもっと忠実に生きるため、私たちは、何をすべきでしょうか？

第4章
知恵のことば

私たち一人ひとりと
それぞれの家族に、
神は、あることを望んでおられます。
そのことを知り、実践するのは、
やさしいことではありません。

実際面から見て、
神のご意志を識別し、
それを完全に果たすことは、
私たちだれにとっても、
ほんとうに難しい……。

言い換えれば、
私たちだれの人生にも、
深遠な動機づけを必要とするときが、
多々存在する、ということです。
私たちは、
自らの心の深みに備えられているそれを
発見し、実行していかなければなりません。
すなわち、神のご意志のみを生きるとき……。
謙遜で清い心をもって、
聖書を開き、
神のみことばに耳を傾けることこそ、
その鍵となるものです。
真の知恵のことばをもっておられるのは、
神だけです。

これから、
そのことを
身をもって体験していきましょう！

自分自身に関連するみことば

知恵を探し求めて（格言の書二章1～22節参照）

わが子よ、もしおまえが、わたしの言葉を受け入れ、私の命令を心に蓄え、知恵に耳を傾け、英知に心を配るなら……、そのとき、おまえはヤーウェを畏れることを悟り、神を知ることを見い出すだろう。ヤーウェはその口から出る知識と英知をお与えになるからである。

善・悪それぞれの道を識別するには（格言の書四章10～27節参照）

正しい者の歩みは暁の光のようだ。いよいよ輝きを増し、真昼となる。悪人の道は暗闇のようである。彼らは何につまずくかを知らない。お前の目は前を見つめ、おまえの視線を、おまえの前に注ぐようにせよ。右にも左にもそれるな。おまえの足を悪から遠ざけよ。

知恵、神への畏敬と正直さ（シラ書一章23～30節参照）

知恵を欲するならば掟を守れ。主は、それを惜しみなく与えてくださる。主を畏れることは、知恵であり、教えである。主がお喜びになるのは、誠実と柔和である。主を畏れる思いに逆らうな。二心を抱いて主に近づくな。人前で善を装うな。おまえの唇に心を配れ。さもないと主はおまえの秘密をあばき、おまえを辱める。

誠実と正義（シラ書四章20～31節参照）

時をよくうかがえ。悪から身を守り、自らを恥じるな。死に至るまで真理のために戦え。そうすれば、神である主が、味方して戦ってくださる。家族に対してはライオンのようであるな。しもべたちに対しては気まぐれであるな。物をもらうときには手を差し出し、返すときには手を引っ込めるな。

暴力を回避するために（シラ書十章6～13節、28節参照）

どのような目にあっても、いっさい暴力を振うな。

高慢は、主にも人にもきらわれる。不正は、そのいずれにも好まれない。主権は、民から民に移るが、その原因は高慢による暴力である。土と灰にすぎないものが、なぜ誇るのか。生きている間ですら、はらわたは腐りやすいのに。高慢の初めは主を離れることであり、人の心がその造り主から遠ざかることである。高慢の初めは罪であり、高慢にしがみつく人は、忌むべきものを、雨のように降らす。子よ、慎み深く自尊心を持ち、自分の真価を知って自らを評価せよ。

内省と分かち合いのために

1　私のお気に入りの「知恵のことば」には、どんなものがありますか？

なぜ、そのみことばを気に入っているのですか？

神に関連するみことば

神に畏敬の念をもつために（格言の書一章7節参照）

ヤーウェを畏れることは知識の初め、しかし、愚かな者は知恵と教育をさげすむ。

主により頼むには（格言の書三章1～12節参照）

わが子よ、忠実と誠実が、おまえから離れないように。これらを、おまえの首に掛けよ。そうすれば、おまえは神と人の面前で、恵みと良識を授かる。心を尽くしてヤーウェに寄り頼み、自分の聡明さに頼るな。おまえの行くすべての道においてヤーウェを認めよ。そうすれば、ヤーウェはおまえの歩みを導いてくださる。

主に従うために（格言の書八章32～36節参照）

だから今、子よ、わたしに耳を傾けよ。わたしの道

を守る者は幸い。わたしの教えを聞いて賢くなれ。これを拒んではならない。日々、わたしの門の戸口で見張り、わたしの門の柱の傍らで番をしている者は幸いだ。しかし、わたしを見失う者は、自分自身を損ない、私を憎む者は皆、死を愛する者である。

神に信頼するには（シラ書二章1～18節参照）

子よ、主のもとで仕えたいならば、おまえの心を試練に備えよ。心を正し、耐え忍べ。金は火で試される。主を畏れる人々よ、主の慈しみを待ち望め。永遠の喜びと慈しみを望め。主に寄り頼んで失望した者があろうか。

謙遜であるために（シラ書五章1～10節参照）

富に頼るな。「わたしは、じゅうぶん持っている」と言うな。本能と力にひきずられ、心の欲するままに歩むな。「罪を犯したが、何も身にふりかからなかったではないか」と言うな。主は忍耐強いからである。主に立ち戻るのを遅らすな。一日、また一日と、延ばすな。

知恵の祝福（シラ書六章18～38節参照）

子よ、若いころから教えを受け入れよ。主の掟に心を留め、常にその命令に心を致せ。主はおまえの心を強め、おまえの望む知恵を与えてくださるだろう。

神に立ち戻るには（シラ書十七章25節参照）

神に立ち戻り、罪を捨て去れ。

内省と分かち合いのために

1　以上の「知恵のことば」のうち、私たち家族にもっとも必要なものは、どれでしょうか？

その理由は何ですか？

隣人に関連するみことば

尊敬の心をもって接するために（シラ書七章28～36節参照）

おまえは、両親によって生まれたことを悟れ。彼らがおまえに与えたものに、何をもって報いることができようか。心を尽くして主を畏れかしこめ。また、主の祭司をあがめよ。貧しい者に援助の手を差し伸べよ。生きとし生ける者に恵みを施せ。死者のためにも恵みを拒むな。泣く者を避けるな。悲しむ者と共に悲しめ。病人を見舞うのをためらうな。そうすることによって、おまえは愛されるであろう。何事をするにつけてもおまえの終りの日を思え。そうすれば、いつまでも、罪を犯すことはあるまい。

施しを後回しにしないために（格言の書三章25～34節参照）

おまえの手が善を行うことができるときに、困っている人に、それを拒むな。おまえが物を持っているときに、隣りびとに「帰れ、出直してこい。あすあげよう」と言うな。

両親のことばに耳を傾けるために（格言の書一章8～19節参照）

わが子よ、おまえの父の教育に聞き従い、母の教えを棄ててはならない。それらは、おまえの頭の美しい花環、おまえの首飾り。

年配の人を敬うには（シラ書八章1～9節参照）

年老いた人を侮るな。わたしたちのなかにも、いずれ老人になる者があるのだから。知者の話を軽んぜず彼らの格言に常に親しめ。そこから教えを受け、偉い人々に仕える術を学べ。年寄りの話を、なおざりにするな。彼らもまた、その父祖から学んだのである。おまえは彼らから知識を学び、必要な時に、どう答えるべきかを学ぶようになるだろう。

友人を選ぶために（シラ書九章10～16節参照）

古い友を見捨てるな。新しい友は、彼とは比べものにはならない。新しい友は、新しいぶどう酒。それが、古くなったら、おまえは喜んで飲むだろう。罪びとの成功をねたむな。その末路がどんなものかを、おまえは知らない。正しい人たちを食卓の友とし、主を畏れることを誇りとせよ。

内省と分かち合いのために

1　正直に振り返ってみましょう。「知恵のことば」を通して神の声に聴いているうちに、私たち家族は、変化しつつあるでしょうか？（はい／いいえ）

第5章
深遠なたとえ話

"PARABLE"（たとえ話）は、
その語源を、
ヘブライ語の"MASHAL"にもっています。
この意味は、二種類あって、
ひとつは、含蓄のある短い物語
もうひとつは、神秘。
神が介入しておられる、
その神秘を表現するため、
現実の日常生活から題材を採り、
比喩しているのが、たとえ話です。
余分なディテールにこだわらず、
単刀直入に主題に言及していることが、
この、たとえ話の特徴でしょう。

ナザレのイエスは、
たとえ話というこのスタイルを
多用しました。

「イエスはこれらのことをすべてたとえ話で群衆に語られた。これは預言者を通じて、『わたしは口をひらいてたとえ話を語り、世の初めから隠されていることを告げよう』と言われたことが成就されるためである」（マタイによる福音書十三章34～35節参照）

福音書には、三十以上のたとえ話が記録されています。
たとえ話を読んでいくと、
神の国の神秘、
そして、
読者の皆さんそれぞれの家族に関して、
共に発見し分かち合う際に

役に立つものがあるはずです。
この冒険へのいざないとして、
ナザレのイエスご自身が、
みなさんに、希望に溢れるアドバイスを
くださっています。

「わたしはたとえ話で語る……。彼らは見ても見ず、聞いても聞かないから……」（マタイによる福音書十三章13節参照）

「あなたたちの目は見、耳は聞くから、幸いである。あなたたちによく言っておく。多くの預言者や正しい人はあなたたちが見ているのを見ようと望んだが、見ることができず、あなたたちが聞いていることを聞こうと望んだが、聞くことができなかったのである。」（マタイによる福音書十三章16～17節参照）

「聞く耳のあるものは聞きなさい」（マルコによる福音書四章9節参照）

タラントのたとえ話

（マタイによる福音書二十五章14～30節参照）

「天の国は次のように言えよう。ある人が旅に出るとき、そのしもべたちを呼んで、自分の財産を彼らに預けた。主人はしもべたちの能力に応じて、ある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラントを預けて、旅に出た。五タラント預かった者は、ただちに出かけて行き、それをつかって商売し、ほかに五タラントもうけた。同じように、二タラントの者も、ほかに二タラントもうけた。ところが、一タラント預かった者は、出て行って土を掘り、主人の金を埋めておいた。かなり日がたってから、しもべたちの主人が帰って来て、決算を求めた。そこで、五タラント預かった人が進み出て、別に五タラントさし出し、『ご主人さま、わたしに五タラントをお預けになりましたが、ごらんください。わたしはほかに五タラント

もうけました」と言った。主人は、「よくやった。善良で忠実なしもべよ。おまえはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。さあ、おまえの主人と喜びをともにしなさい」と言った。それから二タラントの人も進み出て、「ご主人さま、わたしに二タラントをお預けになりましたが、ごらんください。ほかに二タラントもうけました」と言った。主人は、「よくやった。善良で忠実なしもべよ。おまえはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。さあ、おまえの主人と喜びをともにしなさい」と言った。ところで、一タラント預かった人は進み出て言った。「ご主人さま、わたしは、あなたがきびしいかたで、自分でまかなかった土地の収穫を自分のものにし、自分でふるいにかけなかったものをかき集めるかたであることを知っています。わたしはこわかったので、出て行き、あなたのタラントを土の中に埋めておきました。ごらんください。これがあなたのものです」。すると、主人は言った。「なまけ者の悪いしもべよ。おまえは、わたしがまかなかった土地の収穫を自分のものにし、自分でふるいにかけなかったものをかき集めることを知っていたというのか。それなら、わたしの金を銀行に預けておくべきであった。そうすれば、わたしは帰って来たとき、元金に利子をつけて、返してもらえたのに。さあ、この男からそのタラントを取りあげて、十タラント持っている人に与えよ。持っている人は与えられて、さらに豊かになり、持っていない人は、持っている物までも取りあげられる」。

内省と分かち合いのために

1　ここで、主が教えようとしておられることは、何でしょうか？

2　私たちは、このたとえ話を個人として、あるいは家族としての生活に、どのように活かすことができるでしょうか？

放蕩息子のたとえ話

（ルカによる福音書十五章11～31節参照）

イエスは仰せになった。「ある人に二人の息子があった。弟が父に向かって、『お父さん、わたしのもらうべき財産の分け前をください』と言った。そこで、父は資産を二人に分けてやった。幾日もたたないうちに弟は全部のものをまとめて、遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩に身を持ちくずし、財産をむだ使いした。全部使い果たしてしまったとき、その地方にひどいききんが起こって、食べる物にも困り出した。そこで、その地方のある地主のところに行ってすがりつくと、その人は、彼を畑にやって豚を飼わせた。彼は、豚の食べるいなご豆で空腹を満たしたいほどであったが、食べ物を与えてくれる人はだれもいなかった。そこで、息子は本心に立ち返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、食べ物があり余っているのに、わたしはここで飢え死にしようとしている。さあ、出かけて、父のもとに行こう』。……そこで、彼は立って父のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父は息子を見つけて哀れに思い、走り寄って首を抱き、口づけを浴びせた。息子は父に向かって、『お父さん、わたしは天に対しても、あなたに対しても罪を犯しました。もう、あなたの子と呼ばれる資格はありません』と言った。しかし、父はしもべたちに言った。『……食事をして喜びあおう。この子は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから』と。そこで祝宴が始まった。さて、兄は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊り騒ぐのが聞こえたので、しもべの一人を呼んで、『いったい、これは何事だ』と尋ねた。しもべが『弟さんがお帰りになりました。弟さんを無事に迎えたので、お父上が、ふとらせた子牛をほふられたのです』と言うと、兄は怒って家に入ろうとしなかった。そこで、父が出て来て、なだめたが、兄は父に向かって言った。『わたしは、長年ずっとお父さんに仕え、一度も、言いつけにそむいたことがなかったのに、あなた

は、わたしが友人と祝宴を開くために子やぎ一頭もくださいませんでした。それなのに、このあなたの子が遊女どもと一緒にあなたの身代を食いつぶして帰って来ると、ふとらせた子牛を彼のためにほふります」。すると父は言った。「子よ、おまえはいつもわたしといっしょにいる。わたしのすべてのものはおまえのものだ。しかし、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、わたしが祝宴を開いて喜び合うのはあたりまえではないか」。

内省と分かち合いのために

1　このたとえ話を通して、イエスは私たちに何を教えようとしておられると思いますか？

2　私たち家族について、何か学べることがあるでしょうか？（はい／いいえ）

具体的には、何を学んだでしょうか？

ぶどうの実とその枝

（ヨハネによる福音書十五章1～17節参照）

「わたしはまことのぶどうの木、
わたしの父は園丁である
わたしについている枝で実を結ばないものは、
父がこれを切る。
しかし、実を結ぶものは、
もっと豊かに実を結ぶように、
父がきれいに刈り込む。」

「わたしが語ったことばによって、
あなたたちはすでにきれいになっている。」

「わたしに留まりなさい。
そうすれば、わたしもあなたたちに留まる。
ぶどうの枝が木についていなければ、

枝だけでは実を結ぶことはできない。
同じように、
あなたたちもわたしに留まらなければ、
実を結ぶことはできない。」

「わたしはぶどうの木で、
あなたたちは枝である。
人がわたしに留まり、
わたしもその人に留まるならば、
その人は多くの実を結ぶ。
わたしを離れては、
あなたたちは何もすることができない。
わたしに留まらないものがあれば、
木についていない枝のように、
外に投げ捨てられて枯れる。
そして、かき集められ、
火に投げ入れられて焼かれてしまう。」

「あなたたちがわたしに留まり、
わたしのことばがあなたたちに
留まっているならば、
望むものを、なんでも願いなさい。
そうすれば、かなえられるであろう。」

「父がわたしを愛されたように、
わたしもあなたたちを愛して来た。
わたしの愛に留まりなさい。
わたしが父のおきてを守って、
その愛に留まっているように、
あなたたちもわたしのおきてを守るならば、
わたしの愛に留まるであろう。」

「わたしがこれらのことを話したのは、
わたしの喜びがあなたたちにあり、
あなたたちの心が喜びに満たされるためである。」

「わたしがあなたたちを愛したように、
互いに愛し合うこと、
これがわたしのおきてである。」

「友のために命を捨てる、
これにまさる大きな愛はない。」

「わたしが命じることを行うならば、
あなたたちはわたしの友である。
わたしはあなたたちを友と呼ぶ。
父から聞いたことを皆、
あなたたちに知らせたからである。」

「あなたたちがわたしを選んだのではなく、
わたしがあなたたちを選んだのである。
あなたたちが出かけて行き、
実をみのらせるためである。」

内省と分かち合いのために

1　これらの箇所のうち、もっとも心に響くのは、どのみことばですか？
　なぜ、心に響くのでしょうか？

2　家族としての私たちに対して、主は何を教えようとしておられるのでしょうか？

短いたとえ話

二種類の家（マタイによる福音書七章24～29節参照）

「わたしの言葉を聞いて実行するものは皆、岩の上に家を建てた賢い人にたとえられる。雨が降り、大水となり、風が吹いて、その家を襲ったが、倒れなかった。その家は岩の上に土台を据えていたからである」。

「わたしの言葉を聞くだけで実行しない者は、砂の上に家を建てた愚かな人にたとえられる。雨が降り、大水となり、風が吹いて、その家に襲いかかると、家は倒れたが、その倒れようはひどかった」。

ふたりの息子（マタイによる福音書二十一章28～32節参照）

「あなたがたはどう思うか。ある人に二人の息子があった。彼は長男のところに行き、『息子よ、きょう

はぶどう園に行って働いてくれ』と言った。すると長男は『お父さん、承知しました』と答えたが、まったく行かなかった。次に、次男のところに行き、同じことを言うと、次男は『いやです』と答えた。しかし、あとで思いなおして、出かけた。この二人のうち、父の望みどおりにしたのは、どちらか」。彼らは、「次男です」と答えた。そこで、イエスは仰せになった。「あなたがたによく言っておく。徴税人や遊び女が、あなたがたより先に神の国に入るであろう」。

宝と真珠（マタイによる福音書十三章44～46節参照）

「天の国は畑に隠されている宝に似ている。それを見つけた人はそのまま隠しておき、喜びのあまり、持ち物をことごとく売り払い、その畑を買う。」

「また、天の国はよい真珠を捜し求める商人に似ている。その人は高価な真珠を一つ見出だすと、持ち物をことごとく売りに行き、そしてそれを買う。」

からし種（マタイによる福音書十三章31～32節参照）

「天の国は一粒のからし種に似ている。ある人がそれを取って畑にまいた。それは種のうちでいちばん小さいものであるが、成長したときは、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来てその枝に巣を作るほどの木になる。」

内省と分かち合いのために

1　これらのたとえ話のうちで、私がもっとも好きなものはどれですか？

その理由は？

2　自分たちの家族と関連させて、何か学ぶことがあるでしょうか？（はい／いいえ）

第6章
いやしの奇跡

「奇跡」
このことばは、
聖書的語法としての「しるし」「不思議」、
あるいはギリシア語で「力」を意味する
"DYNAMOS"に相当します。
こう言うこともできます。
「奇跡」とは、
通常では考えられない出来事です。
ナザレのイエスのもつ力を
はっきり現わすことによって、
「奇跡」は、
イエスを信じさせる動機として働き、
さらに、その人格に信頼を置くよう
人びとを導くものです。

現代の神学によると、
「奇跡」は、
通常の条件下では起こりえない
超自然的現象であり、
神の直接の介入によるものと
見なされるべきこと、としています。
「奇跡」の専門家たちは、
これに同意して、次のように言っています。
「奇跡」の概念は、
イエスと教会のもつ「新約」の
概念において、
神の力のひとつの機能として、
実際に生き生きと働いており、
きわめて重要なものである。
現代の私たちは、
奇跡を信じているでしょうか？

私たちの普段の生活に、
神が直接介入されることがあると、
認めているでしょうか？
主からいやしと救いをいただくために、
自分たちの家族・家庭に
来ていただく必要が、
私たちにはあるでしょうか？
すべてを超越して、主は普遍でおられます。
昨日も、今日も、明日も……。
神の愛溢れる力により頼み、
信頼と希望のうちに、
主を呼び求めましょう。

病人

イエスに触れた者はみないやされた（マルコによる福音書六章53～56節・七章37節参照）

人々は、その地方をくまなく駆け回り、イエスがおられると聞けば、どこへでも病人を担架にのせて運んで来た。そして、村でも町でも村里でも、イエスが行かれるさきざきで、人々は広場に病人を横たえ、せめてその着物のすそのふさにでもさわらせてくださるよう願った。触れた人は皆いやされた。

「このかたのなさることはすべてすばらしい。耳の聞こえない人を聞えるようにし、ものの言えない人を話せるようになさった」

あなたの信仰があなたを救った（マタイによる福音書九章20～22節参照）

するとそのとき、十二年このかた出血病を患ってい

る女が、うしろからイエスに近寄り、イエスの衣のふさに手を触れた。このかたの衣に触れるだけで治ると、心の中で思っていたからである。イエスは振り返って、彼女を見て、「娘よ、安心しなさい。あなたの信仰があなたを救ったのだ」と仰せになった。ちょうどそのときに、彼女はいやされた。

起きて、歩け（マタイによる福音書九章1～7節参照）

さて、イエスは舟に乗って湖を渡り、自分の町にお帰りになった。すると、人々は一人の中風の人を床に寝かせたまま、イエスのもとに連れて来た。イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に向かい、「子よ、安心しなさい。あなたの罪はゆるされた」と仰せになった。すると、律法学者のある者は心の中でこう思った。「この人は冒涜の言葉をはいている」。イエスは彼らの心の中を見抜いて、「どうして、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのか。『あなたの罪はゆるされた』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらがやさしいか。人の子が地上で罪をゆるす権能を持っていることを、あなたがたに知らせてあげよう」と言って、中風の人に向かい、「起きて床を持ち、家に帰りなさい」と仰せになった。すると、彼は立ちあがり家に帰って行った。群衆はこれを見て恐れ、これほどの権能を人間にお与えになる神をほめたたえた。

内省と分かち合いのために

1　私は、奇跡を信じ、奇跡が起こることを期待していますか？（はい／いいえ）

なぜでしょうか？

2　私たちの家族には、神の力が介入することが必要でしょうか？（はい／いいえ）

その理由は？

盲目の人

あなたのために、私に何をしてほしいのか？（マルコによる福音書十章46～52節参照）

イエスが弟子たちや大勢の群衆とともにエリコを立たれるとき、バルテマイという盲目の物乞いが、道ばたに座っていた。ナザレトのイエスだと聞いて、「ダビデの子イエスさま、わたくしをあわれんでください」と叫びだした。多くの人々はしかりつけて黙らせようとしたが、バルテマイはますます、「ダビデの子、あわれんでください」と叫び続けた。イエスは立ちどまり、「あの人を呼べ」と言われた。人々が盲人に、「安心しなさい。立ちなさい。あなたを呼んでおられる」と言って、彼を呼ぶと、盲人はマントを脱ぎ捨て、おどりあがってイエスのもとに来た。イエスが「何をわたしにしてもらいたいのか」とお尋ねになると、盲人は、「先生、見えるようにしてください」と言った。そこで、イエスは仰せになった。「よし、あなたの信仰があなたを救った」。するとたちまち、盲目の人は見えるようになり、イエスに同行した。

主よ、私たちをあわれんでください（マタイによる福音書二十章29～34節参照）

一行がエリコを立つとき、道ばたに座っていた二人の盲人が、イエスがお通りになるのだと聞いて、「主よ、ダビデの子よ、わたくしたちをあわれんでください」と叫んだ。群衆はしかりつけて黙らせようとしたが、二人はますます、「主よ、ダビデの子よ、わたくしたちをあわれんでください」と叫んだ。そこで、イエスは立ちどまり、彼らを呼んで、「何をしてもらいたいのか」とお尋ねになった。二人は、「主よ、わたくしたちの目を開いてください」と言った。イエスは哀れに思い、その目に手をお触れになると、彼らはすぐに見えるようになった。そして、イエスについて行った。

生まれつき目の見えぬ人（ヨハネによる福音書九章1～41節参照）

イエスは通りがかりに、生まれつきの盲人を見られた。イエスは、地面につばをはき、どろをこねて、その人の目に塗った。そして、「さあ、行って、シロアム（『遣わされた者』の意）の池で洗いなさい」と言われた。そこで、盲人は行って洗い、見えるようになって、帰って来た。幾人かのファリサイ派の人々は、これを聞いて、「わたしたちも盲目なのですか」と言った。イエスは仰せになった。「もしあなたが盲目なら、罪はない。しかし、今あなたがたは、『見える』と言っている。だから、あなたがたの罪はそのまま残っている」。

内省と分かち合いのために

1　私たちを霊的に盲目にさせてしまうことには、どんなものがあるでしょうか？

2　これらのみことばを通して、主は、私たちに何を語りかけようとしておられるのでしょうか？

とりつかれた人

とりつかれた少女（マタイによる福音書十五章21～28節参照）

ツロとシドンの地方生まれのカナンの女が現れて、「主よ、ダビデの子よ、わたくしをあわれんでください。娘が悪魔にひどく苦しめられています」と叫んだ。しかし、イエスはひと言もお答えにならなかった。弟子たちがイエスに近寄り、「この女を帰すようにしてください。叫びながらついて来ます」と頼むと、イエスは「わたしは、イスラエルの家の迷える羊のところにだけ、遣わされているのだ」とお答えになった。しかし、女はイエスのもとに来て、ひれ伏して、「主よ、わたくしをお助けください」と言った。すると、イエスが、「子どものためのパンを取って小犬に投げ与えるのは、よいことではない」とお答えになると、彼女は、「主よ、ごもっともです。しかし、小犬も主人の

食卓から落ちるパンくずを食べるではありませんか」と言った。そのとき、イエスは、「婦人よ、あなたの信仰はりっぱだ。あなたの望みどおりになれ」と仰せになった。娘はそのときから治った。

とりつかれた少年（ルカによる福音書九章37～43節参照）

群衆の中から、一人の男が叫んで言った。「先生、お願いです。わたしの息子を見てやってください。この子はわたしの独り息子です。霊が取りつくと、この子は突然叫び出します。霊はこの子にけいれんを起こさせ、泡を吹かせ、痛めつけて、なかなか離れないのです。お弟子たちに、この霊を追い出してもらうことを願いましたができませんでした」。イエスは答えて、「ああ、不信仰な、邪悪な時代だ。わたしはいつまであなたがたとともにおり、あなたがたに辛抱しなければならないのか。さあ、あなたの息子をここに連れて来なさい」と仰せになった。しかし、その子が来る途中で悪魔は彼を投げ倒してはげしくけいれんさせた。そこでイエスは汚れた霊をしかりつけ、その子をいやして父親にお渡しになった。

多くのとりつかれた人々（マタイによる福音書八章16～17節参照）

夕方になると、人々は、悪魔につかれた者を大勢、イエスのもとに連れて来た。イエスはひと言をもって悪魔を追い出し、また病人を皆いやされた。こうして、預言者イザヤを通じて言われた次のことが成就した。「彼はわたくしどもの煩いを身に受け、わたくしどもの病を背負った」。

内省と分かち合いのために

1　私は、神の力をどの程度信頼しているでしょうか？　説明してください。

2　私たちの家庭で起きた、いちばん最近の災い、あるいは非福音的な出来事としては、どのようなものがあったでしょうか？

ラザロの復活

（ヨハネによる福音書十一章1～44節参照）

イエスは弟子たちにはっきり仰せになった。「ラザロが死んだのだ。わたしがそこに居合わせなくてよかった。あなたたちの信仰を強めることができるからである」。イエスが行ってごらんになると、ラザロが墓に葬られてからすでに四日たっていた。マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた。マルタはイエスに言った。「主よ、もしあなたがここにいてくださったら、わたしの兄弟は死ななかったことでしょう。しかし、あなたが神にお願いすることは何でもかなえられる、とわたしは確信しております」。イエスは、「あなたの兄弟は復活する」と言われた。マルタが、「終わりの日の復活の時に、復活することは存じております」と言うと、イエスは仰せになった。

「わたしは復活であり、いのちである。
わたしを信じる者は、
たとえ死んでも生きる。
わたしを信じて生きている者は、
すべて永遠に死ぬことはない。
あなたはこれを信じるか」、

マルタは、「はい、主よ、あなたが、この世に来られるはずの神の子、メシアであることを、わたしは信じております」と答えた。

マリアはイエスのところにくると、イエスを見て、その足もとにひれ伏し、「主よ、もしあなたがここにいてくださったら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう」と言った。イエスは、彼女が泣き、いっしょにやって来たユダヤ人も泣いているのを見て、激しく感動し、心を騒がせて、「ラザロをどこに葬りましたか」とお尋ねになった。彼らは、「主よ、見に来てください」と言った。イエスは涙を流された。ユダヤ人は「なんと深くラザロを愛していたことだろう」と言った。

墓はほら穴で、石でふさがれていた。イエスが「石

を取りのけなさい」と言われると、死者の姉妹マルタは、「主よもう臭います。四日たっていますから」と言った。イエスは、「信じるなら、あなたは神の栄光を見ると、わたしは言ったではありませんか」と言われた。そこで、人々は石を取りのけた。イエスは天に向かって仰せになった。

「父よ、わたしの願いを
聞いてくださったことを感謝します。
あなたがいつも
わたしの願いを聞いてくださることを、
わたしは知っております。
しかし、わたしがこう言うのは、
あなたがわたしをお遣わしに
なったことを、
周りにいる人たちに信じさせるためです」

こう言ってから、イエスは大声で、「ラザロよ、出て来なさい」と叫ばれた。すると、死んでいた人が手と足を布でしばられたまま出て来た。その顔の周りには布が巻いてあった。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と仰せられた。

内省と分かち合いのために

1　私にとって、このみことばは重要なものでしょうか？（はい／いいえ）
　なぜ、そう思いますか？

2　自分たちの家族生活に、どのように関係づけることができるでしょうか？

第7章
よい知らせ――福音

現代、
数えきれないほど多くの人たちが、
「よい知らせ（GOOD NEWS）はいずこ？」
と必死にあがいています。
しかし、見いだすには、ほど遠い。
「よい知らせ（福音）」。
私たちの暮らすこの時代に、
「よい知らせ」なんてあるのでしょうか？
「よい知らせ」って、
どういうものでしょう？
「よい知らせ」って、みんなのためのもの？

二千年前から現在にいたるまで、
「よい知らせ」は存在していましたし、
今でも「然り」です。
ナザレのイエス！
聖書が明らかにしているように、
イエスこそ、
私たちだれもが待ち望んできた、
その人なのです。
イエスこそ、
預言されたメシア（油注がれた者・救い主）、
キリスト。
ほかにはいません。
生ける神の御子。
唯一の救い主。
彼こそ、主。
全人類のために死んだお方。
復活したお方。
前もって約束されたとおり、
世の終わりまで、
私たちと共に生きておられる、その人。

彼に信を置く人にとって、
イエスは、このすべてであり、
まだ信じていない人にとっても、
実は、そうなのです。
読者の皆さんは、
心からイエスを信じていますか？

驚嘆に値する啓示

神の国は近くある（マルコによる福音書一章15節参照）
「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」。

福音（ヨハネによる福音書三章1～21節参照）
「神はこの独り子を与えるほど、
この世を愛した。
それは、おん子を信じる者が
一人も滅びることなく、
永遠のいのちを得るためである。
神は独り子を世に遣わした。
それは世を裁くためではなく、
おん子を通して世を救うためである」。

偉大なる呼びかけ（ヨハネによる福音書十四章5～6節・ルカによる福音書九章23～27節参照）

トマスはイエスに言った。「主よ、どこにおいでになるのか…どうしてその道がわかりましょう」。イエスは仰せになった。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである」。

イエスは皆に仰せになった。「わたしの後に従いたい者は、おのれを捨て、日々、自分の十字架をになって、わたしに従いなさい。わたしのために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失ったり、損じたりするならば、なんの益があるだろうか」

イエスの再来（マタイによる福音書二十五章31～46節参照）

人の子が栄光に包まれ天使を従えて来るとき、人の子は栄光の王座につき、すべての民族は、その前に集められる。そして、人の子は、牧者が羊とやぎとを分けるように、彼らを二つに分け、羊を右に、やぎを左に置く。そのとき王は自分の右側の者に言う。「あなたがたは、わたしが飢えていたときに食べさせ、渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢屋にいたときに訪ねてくれたからである」。そのとき、正しい人たちは答えるであろう、「主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えておられるのを見て食べさせ、渇いておられるのを見て飲ませましたか。……また、いつあなたが病気であり、牢屋におられるのを見て、あなたを訪ねてあげましたか」。すると王は答えて、「あなたがたによく言っておく、これらのわたしの兄弟、しかも最も小さな者の一人にしたのは、わたしにしたのである」と言うであろう。

内省と分かち合いのために

1　これらの聖書の箇所で、もっとも私の心に響いたのはどれでしょうか？

なぜ響いたのでしょうか？

2　主は私たちの家族に、何を伝えようとしておられるのでしょうか？

具体的に書いてみましょう。

福音的価値観のすすめ

▽天の父が完全であるように、あなたがたも完全な者となりなさい。（マタイによる福音書五章48節参照）

▽あなたが祭壇の上に供え物をささげようとするとき、もし兄弟があなたに何か恨みを抱いているのを思い出したならば、供え物を祭壇の前に置いておき、まず行って兄弟と和解し、それからもどって供え物をささげなさい。（マタイによる福音書五章23～24節参照）

▽あなたは祈るとき、奥のへやに入って戸をしめ、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい。（マタイによる福音書六章6節参照）

▽あなたの家、あなたの家族のもとに帰りなさい。そして、主があなたをあわれみ、あなたにどんなに大きなことをなさったかを、ことごとく告げなさい。（マルコによる福音書五章19節参照）

▽わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、あなたがたを迫害する者のために祈りなさい。それは、あなたがたが天におられる父の子であることを示すためである。天の父は、悪人の上にも善人の上にも太陽を上らせ、また、正しい者の上にも正しくない者の上にも雨を降らせてくださるからである。（マタイによる福音書五章43～48節参照）

▽あなたがたは自分のために地上に宝を積んではならない。そこでは、虫が食い、さびがつき、泥棒が忍び込んで盗み出す。あなたがたは自分のために、天に宝を積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さびがつくことも、泥棒が忍び込んで盗み出すこともない。あなたの宝のある所に、あなたの心もあるからである。（マタイによる福音書六

章19～21節参照）

▽裁いてはならない。そうすれば、あなたがたも裁かれないだろう。あなたがたが人を裁くように、自分も裁かれ、あなたがたが量るそのますで、あなたがたにも量り与えられるのである。（マタイによる福音書七章1～6節参照）

▽もし完全になりたいならば、帰って、あなたの持ち物を売り、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を蓄えることになる。（マタイによる福音書十九章16～30節参照）

▽生まれつき結婚できない者があり、また人から結婚できないようにされた者があるが、天の国のために進んで結婚しない者もある。これを受け入れることができるものは受け入れなさい。（マタイによる福音書十九章12節参照）

▽もしだれかが、あなたの右のほほを打ったならば、他のほほをも向けなさい。（マタイによる福音書五章38～42節参照）

▽あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることはできない。また、灯をともしたとき、それをますの下に置く人はいない。燭台の上に置く。こうすれば、それは家の中のすべての人々のために輝く。このように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。そうすれば、人々はあなたがたのよい行ないを見て、天におられるあなたがたの父をほめたたえるであろう。（マタイによる福音書五章14～16節参照）

内省と分かち合いのために

1　これらの福音的価値観のうち、今私の心に響き、生かすべきものはどれでしょうか？

なぜ、そう思いますか？

2　私たちの家族生活に対する、何らかの勧められる福音的価値観があるでしょうか？（はい／いいえ）

生きているメッセージ

兄弟としての交わり（ガラテヤ六章1～10節参照）

互いに重荷を担い合いなさい。そのようにすれば、キリストの律法を全うすることになります。一人びとり自分の行ないを検討してみなさい。そうすれば、自分にだけは誇れても、他人に対して誇ることはできないでしょう。人はそれぞれ、自分自身の重荷を負っているからです。

霊的な生活（ローマ八章5～13節参照）

「肉」の指図のままに生きる者は、「肉」のことを思い、「霊」に従って生きる者は、「霊」のことを思います。「肉」の思いは死であり、「霊」の思いはいのちと平安です。

多様性と一致（一コリント十二章4～11節参照）

「霊」の特別な恵みにはいろいろの種類がありますが、恵みをくださるのは同じ「霊」です。奉仕にはいろいろの種類がありますが、仕えるのは同じ主に対してです。働きにはいろいろの種類がありますが、すべてのもののうちにすべての事をなさるのは、同じ神なのです。

家族のきずな（エフェソ五章19～21節、六章1～4節、一テサロニケ五章12～22節参照）

主に向かって心から歌いなさい。わたしたちの主イエス・キリストの名において、いつも、父である神にすべてのことを感謝し、キリストを畏れ敬う心をもって互いに従いなさい。

子どもたちは、主に結ばれた者として両親の言いつけに従いなさい。それは正しいことです。

父親は、子どもをいらだたせてはなりません。むしろ、主の精神に基づいた教育といましめによって、彼らを養い育てなさい。

互いに平和を保ちなさい。けじめのない生活を送る

人たちに忠告を与え、気の小さい人たちを励まし、か弱い人たちの面倒をみてあげなさい。だれに対しても寛容でありなさい。だれも悪を返すことがないようによく注意し、互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行なうよう励みなさい。

愛の賜物（一コリント十三章1～13節参照）

たとえ、山を移すほどの
完全な信仰があっても、
愛がなければ
わたしは何ものでもない。
愛は寛容なもの、
慈悲深いものは愛。
愛は、ねたまず、高ぶらず、誇らない。
見苦しいふるまいをせず、
自分の利益を求めず、怒らず、
人の悪事を数え立てない。
不正を喜ばないが、
人と共に真理を喜ぶ。
すべてをこらえ、すべてを信じ、
すべてを望み、すべてを耐え忍ぶ。
愛は、けっして滅び去ることはない。
引き続き残るのは、
信仰、希望、愛、この三つ。
このうち最も優れているのは、
愛。

内省と分かち合いのために

1　これらのメッセージのうち、私のお気に入りはどれでしょうか？
　なぜ、気に入っているのでしょう？

2　主は私たちの家族に、何を言おうとしておられるのでしょうか？
　具体的に！

励ましをもたらす約束

▽あなたがたが怠け者にならず、信仰と忍耐によって、約束のものを受け継ぐ人々に倣う者となるためです。（ヘブライ六章12節参照）

▽重荷を負って苦労している者は皆、わたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは心が柔和であり、謙遜であるから、わたしの軛（くびき）を受け入れ、わたしの弟子になりなさい。そうすれば、魂は安らぎを見出すであろう。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。（マタイによる福音書十一章28～30節参照）

▽渇く者はわたしのもとに来て、飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているように、その中から生ける水の川が豊かに流れ出るであろう。（ヨハネによる福音書七章37～38節参照）

▽求めなさい。そうすれば、与えられるであろう。捜しなさい。そうすれば、見つけるであろう。たたきなさい。そうすれば、開かれるであろう。（マタイによる福音書七章7～11節参照）

▽わたしは父に願って
いつまでもあなたたちといっしょにいてくれる
助け主を、
別に遣わしていただこう。
そのかたは真理の霊である。
この世は、
そのかたを見ようとも知ろうともしないので、
受けることができない。
あなたたちはその霊を知っている。
その霊があなたたちといっしょにおり、
あなたたちの中にいるからである。（ヨハネによる福音書十四章16～17節参照）

▽口で、イエスが主であると宣言し、心で、神がイエスを死者の中から復活させたことを信じるならば、あなたは救われるからです。「主の名を呼び求める者は、すべて救われる」のです。（ローマ十章9～13節参照）

▽二、三人がわたしの名によって集まっている所には、その中にわたしがいる。（マタイによる福音書十八章19～20節参照）

▽わたしは世の終わりまで、いつもあなたたちとともにいるのである。（同右二十八章20節参照）

▽先にいる多くの人が後になり、後にいる人が先になるであろう。（同右十九章28～30節参照）

▽あなたが施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。……隠れたことをごらんになるあなたの父は、報いてくださるであろう。（同右六章3～4節参照）

▽天地は過ぎ去る。しかし、わたしの言葉は過ぎ去ることはない。（同右二十四章35節参照）

▽あなたたちも用意しているがよい。思わぬ時に人の子は来るからである。主人が帰って来たとき、努めを果たしているのを見られるしもべは、幸いである。（同右二十四章44、46節参照）

▽行って場所を準備したら、またもどって来て、あなたたちをわたしの所に連れて行こう。そして、わたしのいる所に、あなたたちもいるようにしよう。（ヨハネによる福音書十四章3節参照）

内省と分かち合いのために

1　以上の約束のうち、私がもっとも親近感を覚えるのは、どれでしょうか？
　どうして、そう感じるのでしょうか？

2　これらの約束のうち、私たち家族が、心に留める必要のあるみことばは、どれでしょうか？

まことの幸せに関するみことば

幸いな人（マタイによる福音書五章1～12節参照）

自分の貧しさを知る人は幸いである、
　天の国はその人のものだからである。
悲しむ人は幸いである、
　その人は慰められるであろう。
柔和な人は幸いである、
　その人は地を受け継ぐであろう。
義に飢え渇く人は幸いである、
　その人は満たされるであろう。
あわれみ深い人は幸いである、
　その人はあわれみを受けるであろう。
心の清い人は幸いである、
　その人は神を見るであろう。
平和をもたらす人は幸いである、
　その人は神の子と呼ばれるであろう。
義のために迫害される人は幸いである、
　天の国はその人のものだからである。
わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、またあなたがたに対して偽りを言い、あらゆる悪口を言うとき、あなたがたは幸いである。小踊りして喜べ。天においてあなたがたが受ける報いは大きいからである。あなたがたより前の預言者も、同じように迫害されたのである。

▽あなたたちが見ているものを見る目は、幸いである。あなたたちに言っておく。多くの預言者や王たちは、あなたたちが見ているものを見ようと望んだが、見ることができず、あなたたちが聞いていることを聞こうと望んだが、聞くことできなかったのである。（ルカによる福音書十章23～24節参照）

▽見ないで信じる人は幸いである。（ヨハネによる福音書二十章29節参照）

▽幼な子たちをそのままにしておきなさい。わたしのところに来るのを止めてはいけない。天の国はこのような者たちのものだからである。（マタイによる福音書十九章13～15節参照）

▽わたしはあなたたちに平安を残し、
わたしの平安を与える。
わたしは、
世が平安を与えるようには与えない。
心を騒がせることも、恐れることもない。（ヨハネによる福音書十四章27節参照）

▽人間の理解をはるかに越える神の平安が、キリスト・イエスに結ばれているあなたがたの心と思いを守ってくださいます。（フィリピ四章7節参照）

▽主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。（フィリピ四章23節参照）

▽わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平安が、あなたがたにありますように。（一コリント一章3節参照）

内省と分かち合いのために

1　「幸いな人」のうち、私のお気に入りはどれでしょうか？
　どうしてですか？

2　私たちの家族にとっての幸せは、「幸いな人」に則したものでしょうか？（はい／いいえ）
　具体的に説明してください。

第四部　人びとに手をさしのべるために

家族は、孤立した存在ではありません。家族は、いつでも、ほかの人びととのかかわりの中で存在するものです。

しかし、私たちには、だれしも、狭い現実に閉じこもり、殻を作ってしまうことが、よくあるものです。私たちはいろいろな殻をもっています。経済的・政治的な側面で、宗教的な事柄で、そして、家族の生活において、殻に閉じこもるのです。

私たちには、忘れてはならないことがあります。すなわち、人生とは、一枚の布のようなもので、それは、人生のさまざまな側面によって織りなされている、ということです。

この意味から見て、家族が孤立して存在することなど、決してできないわけです。家族は、愛と生命そのものである主なる神によって創造されました。ですから、家族自身もまた、うずを描くように愛と生命を生み出し、こうして、世界を変革していく使命があるのです。

家族は、一人ひとりが、自分たちのことだけにとらわれてしまうのではなく、世界に目を向けていかねばならないのです。こうして、家族以外の人びととの分かち合いに生きるのです。

幸せな家族ならば、おしみなく、オープンな心で、まわりの人びとに手をさしのべるものです。「家族」として召されたのは、「他の人びとに奉仕するためである」と、幸せな家族は心得ています。したがって、まわりの人びとに心と行いを開いていくわけです。

どのようにして、彼らは、それを実践するのでしょうか？　幸せな家族は、それを実践するとき、自分たちだけの殻を破り、より広がりある世界に向け、スパイラルのような開かれた心でかかわりを求めていきます。

まず、親戚に、友人に、隣人に、さらに、地域共同体、街、国……、世界へと、歩んでいくのです。

目を覚ますときです！　実際に行動するときが来ました。

家族ぐるみで、

世界と向き合う心の準備はできましたか？

第1章
他の家族を発見するために

私たちのまわりの家族には、
何が起きているでしょうか？
他の家族と自分の家族とは、
同じような状況を抱えていますか？
他の家族は、
どんな問題、
どんなニーズ、
どんな可能性をもっているでしょうか？
他の家族のために、
私たちには何ができ、
また、何をすべきでしょうか？
何を？　どうやって？
いつ？　やればよいのでしょう？
このような発見に
読者の皆さんを導いていくのが、
第四部の目的として、中心となるものです。
この家族ぐるみの大冒険に
旅立たれることを、
皆さんに強くお勧めします。
この冒険は、家族一緒に
次のようなステップを歩んで進みます。

1　自分の家族の現実に基づいて内省します。
2　自分の家族のメンバーとの分かち合い。
3　その家族の分かち合いをとおして、主が何を語りかけようとしておられるのかを識別します。
4　実際の行いによって、主の呼びかけに応えていきます。これは、各自の才能や賜物を活かして実践するわけです。

さあ、はじめましょう！

大家族

注：これ以降のさまざまな問題に関する調査は、アメリカ合衆国で行われたものです。しかしながら、日本でも同様の問題が生じています。

大家族は、まったくなくなってしまったわけではありませんが、その姿を消しつつあります。一九八七年の統計が報告するところによれば、十八歳未満の子どものいる家族のうち、五人以上の子どもが家庭で一緒に暮らしているのは、わずか2パーセントにすぎません。一九六〇年には、8パーセントでした。

人口の推移を研究している学者たちは、大家族が姿を消しつつある原因のいくつかとして、人工的で効果がある受胎調整の普及、結婚や子育て時期の遅れの流行、女性の職場進出の増加などをあげています。

たくさんの子どもを抱えている場合、両親は、経済面や情操教育面で子どもに充分なことをしてやろうとして、てんてこ舞いになりがちです。しかし、五～六人あるいは十人の子どものいる親にインタビューしたところ、ひじょうに収入の少ない家族であっても、子育ての大きな喜びのおかげで、さまざまな重荷も苦にならないとのことでした。

また、ハートフォード大学心理学教授で、"Sibling Bond"（＝兄弟姉妹のきずな）の著者のひとりでもある、マイケル・カーン博士は、「大家族は、そうでない他の家族に比べると、家族としてのアイデンティティや家族としての連帯性などに関して、より豊かなセンスをもっているものだ。」と言っています。

ご自身も七人兄弟の六番めで、大家族の中で成長してきた人びとの家族療法に専門に携わる、シカゴに在住する家族セラピスト、マクガイヤー氏は、確信をもってこう言います。「大家族がもっている、協力の精神とお互いのきずなは、ひじょうに力強いものですよ。それが発揮されたときは、これ以上すばらしいことはありませんね！」

ゼルダ・ゴールドスミスさんと、その夫、ユダヤ教

のラビであるシェルダン・ゴールドスミス氏は、五人の子どもたちと一緒に、寝室二つ、浴室二つの、マンハッタンの小さなアパートに暮らしています。秘書の仕事に就いている妻のゼルダさん（40）は、「とっても、気楽な暮らしよ。」と言ってのけます。「難問を抱えているわけじゃないし、悲惨だ！　なんてこと、これっぽっちもありません。」彼ら家族の収入は、年収約五百万円です。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　大家族と聞くと、私は何を考えるでしょうか？

（大家族に関する意見）

2　私は、大家族で暮らしてみたいでしょうか？

（はい／いいえ）

なぜ、大家族がいいと思いますか？　あるいは嫌ですか？

3　私は、大家族を何組知っているでしょうか？

4　大家族の彼らにとって、もっとも大切なニーズは何でしょうか？

5　自分たちの知り合いである大家族に対して、何らかの手助けをすることが、私たち家族にはできるでしょうか？（はい／いいえ）

具体的には、どのようにしますか？

核家族

一戸建てや一件のマンションに、父親、母親、そして子どもたちが共に暮らす、いわゆる伝統的な核家族の場合、これもまた消滅しつつあるのでしょうか？

そんなことはありません。アメリカの統計局のレポートによれば、子どもの全人口のうち四分の三は、両親が共にいる家族に暮らしているとのことです。

アメリカ人の57パーセントは、結婚してのち、配偶者との生活を共にしています。

大人も子どもも合わせたアメリカ人では、その全体のおよそ三分の二が、夫婦それぞれの両親二組と一緒に暮らしています。

みなさんのまわりを見渡してください。知っているだけでも、親戚や隣り近所・友人や知人の中に、かなりの数の核家族がいることに気づくでしょう。

「結婚・家族に関する現代の運動や組織の多くは、有益なものである」というハッキリとしたしるしがあります。そのような運動の組織は、結婚・家族の生活をより豊かにしようとの目的で作られたもので、結婚する人たちの準備や、核家族の質の向上に貢献しています。

私自身の出身も、核家族です。とてもよい核家族でした。

私の親戚や友人のほとんども、核家族でした。

過去を思い出してみると、私の司祭としての自分の奉仕職は、スペインや他の国々にいる結婚生活、あるいは家族生活に捧げられたものでした。これが、土台となって、クリスチャン・ファミリー・ムーブメント（＝キリスト者の家族運動）や、マリッジ・エンカウンターが始まったのです。それらの奉仕の95パーセントは、核家族によってサポートされていたものです。

今見てみると、私が司祭職として実際に携わっている状況も同様です。

今後を展望してみると、私はこう見ています。現在の核家族こそ、将来の新しい家族にとって、その土台、

その橋渡しとして希望なのだ、と！

ですから、今度、「今の社会には、もう、核家族など死んだようなものだし、うまく機能しやしない」とだれかに言われたら、この統計を漫然と繰り返すだけではなく、核家族に育った自分たち自身の体験を証しすることが重要なのでしょう。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　いわゆる核家族と呼ばれる家族について、私はどう思っているでしょうか？

2　私には、核家族の知り合いがたくさんいますか？（はい／いいえ）

3　その核家族の人たちは、どのような人たちですか？

4　彼ら核家族の人たちが抱えている問題のさいたるものには、どんなものがあるでしょうか？

5　その核家族の人を助けるために、私たち家族にできること、あるいはすべきことには何があるでしょうか？

片親の家族

アメリカ統計局の一九八四年の統計によれば、子どものいる家族のうち、四件に一件は、片親で占められているとのことです。そして、一九九四年の数字は、その二倍に達するでしょう。

現在アメリカに住んでいる、十八歳未満の子どものうち、五人に一人は片親の家庭で暮らしています。さらに、これが、黒人やヒスパニック系住民になると、その比率は、二人に一人になります。これも、新しくできた統計局のレポート結果です。

片親家庭の増加は、かつての世代において、もっとも衝撃的な社会変化のひとつでした。統計局の報告では、過去二十年における、片親家庭が作られる主な要因は、未婚者の出産、夫婦の別居、離婚などにあるとのことです。

片親家庭も、「家族」です

片親の家族の人たちには、愛し愛される権利、さらに、安定した生活と将来を築いていく特別の権利があります。片親の家族のニーズに対して、私たちのだれも、無関心でいてよいはずがありません。

片親の家族の人たちは、聖書の中でも「特別な立場にある！」と見なされています。かつて、神が古代イスラエルを建国されたとき、片親の家族の世話に関し、数多くの掟を定められました。たとえば、モーゼが十戒を神からいただいたのち、イスラエルの子らに向けてこう教えています。「神は、親のない子や未亡人らのため、正義を呼びかけられる。そして、異国の民を愛され、食べるもの、着るものを彼らに賜る」（申命記十章18節参照）

新約聖書の中には、こうあります。「父なる神のみ前に純粋でほまれ高き宗教とは、これである。災難にあえぐみなしごややもめを訪れ、この世において自らを清く保つことである」（ヤコブ一章27節参照）。

したがって、もしみなさんが片親の家族であるのでしたら、その現実を受け入れてください。神は、特別なゲストとして、あなたがたの家庭を訪れてくださることでしょう。みなさんが必要としている特別なニーズを神に願い求めてください。そうすれば、特別のやり方で、神が、支えてくださるにちがいありません。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　片親の家族が現実に抱えているさまざまなチャレンジについて、私はどう感じ、また何を考えるでしょうか？

2　私の知っている範囲で、彼ら片親家庭が抱えている最大の問題あるいはニーズには、どのようなものがあるでしょうか？

3　知り合いの片親の家族に対し、私たち家族は、何をすることができ、あるいは何をすべきでしょうか？

再婚の家族

現在のアメリカにおいては、離婚や再婚は日常茶飯事です。最近では、十人の子どものうち一人は、継父母のどちらかと一緒に暮らしています。さらに、四人に一人は、十八歳になるまでに、継父母のいる家族で暮らすことになる見込みです。

「再婚の家族に何か問題があるのは避けられないことだし、それは、病んだ家族形態であると考えるのが普通でした。」こう言うのは、カリフォルニア在住の心理学者で、継父母のいる家族研究の先駆者として十二年前に本を著した、エミリー・ウィシャー博士です。しかし、最近十年のうちに、社会学者たちは、新たな見解をものにしてきています。すなわち、再婚の家族といっても、単に異なった家族形態のひとつなのだ、という見解です。つまり、彼らなりのパターンがあり、強さもチャレンジも独自のものがあるのです。

事実、両親の少なくとも一方がかつて結婚していたことのある家族は、今では、一千百万組にまでのぼっています。一九七〇年当時の八百九十万組から見ると、大きく増えたことがわかります。これらの家族のうち、五百万組は、十八歳未満の子どもを擁しているのです。テレビの映画番組や、全国系の放送、さまざまな書籍や雑誌に継父母のことが多くとりあげられるのに伴い、その数は増加してきました。

学校では、違った姓の二組の親の名を網羅して、引照付きの名簿を発行しています。結婚やパーティーなどの招待状を印刷するときなどに、新しいエチケットが反映されるようになってきました。すなわち、実の親か、継父母なのかを、わかるようにしておくことです。卒業式は、スタジアムなど大きな所で行われるのがしばしばですが、何組かの親のみならず、血のつながっていない兄弟姉妹や祖父母にいたるまで、再婚の家族みんなが、そろって参加することも容認されています。

アメリカ社会に再婚の家族が軒並み増加する事実は、ひじょうに新しい傾向なので、「継父母の責任と権利

について、やっと今、その定義をし始めたところです。」と、シラクーズ大学法学部教授サラ・H・ラムゼイは強調しています。さらに、彼女は、再婚の家族に対して、次のような質問を用意しています。

「新しく家族になった継父母のいる家族は、だれの家で暮らすつもりか？」

「彼ら再婚の家族は、どこの学校、あるいはどの教会に通うのか？」

「子どもの躾を預かっていくのは、だれか？」

「だれが、どの部分についての経済的負担をするか？」

「血のつながっていない兄弟姉妹の仲がうまくいかない場合はどうするか？」

以上の質問、あるいはこれに類する問題点を見ると、再婚家庭の複雑な状況がどれほどのものであるか、理解できます。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　再婚の家族のことを思ったとき、私は何を感じるでしょうか？

2　継父母のいる家族のニーズを援助する際、私たち家族には、どのようなことならできると考えられるでしょうか？

3　具体的には、私たちは家族として何をするつもりですか？

その方法は？

いつ実施しますか？

老齢化する家族

時代を反映する新たな徴候が見られます。ここ数年、老齢者人口の急激な増加が観察されています。一七九〇年から始まった合衆国の人口調査によれば、六十五歳以上の人口は、全体の2パーセントにしかすぎませんでした。しかし、一九〇〇年を前にして倍増し、4パーセントを数えるようになりました。さらに、一九八〇年には、11パーセントにまで跳ねあがりました。二〇三〇年には18パーセントになるだろう、と予想されています。人口数で言えば、五千五百万人。

かつての、年をとっていく人たちの生活は、どのようなものだったのでしょうか？　私たちが現在享受できるような、しっかりした医療体制がなかったため、健康を害することがしばしばありました。結果的に、当時の寿命は短かいものでした。

今日、劇的な変化を私たちは目のあたりにしています。70年代、80年代、さらには、なんと90年代をも生き延びる老家族が増えつつあります。老齢化の研究は、重要な専門分野として認められるようになりました。さまざまな分野の専門家たちも、今では、老人病専門家でもあります。

老齢にさしかかった夫婦たちの大部分が、長い期間、お互いに相手にうまく合わせながら、暮らしを共にするようになってきたことは、統計上においては示されています。

マーガレット・クラークとバーバラ・アンダーソンの緻密な研究は、彼らの著書"Culture and Aging Anthropological Study of Older Americans"（＝アメリカ老人の人類学的研究―その文化と老齢化）に書かれていますが、これによると、老齢者家族の夫婦が生活を分かち合う際に欠かすことのできない、五つの領域があげられています。

1　自律と自尊心。過去十数年の人生を振り返って、個人として、あるいは夫婦として歩んできた自分たちの人生を、老齢者自身がどう感じているかに

基づくものです。

2　満足できる他者との関係。その場かぎりでない友情があることは、自尊心を保つのに役立ちます。つまり、自分たちが周囲の人たちからふさわしい評価を得ていること、周囲から支えられ、励まされていることを、身をもって感じるからです。

3　理性と想像力への刺激。人間を人間たらしめることは、私たちには考える能力があり、理解し夢見る力を備えているということです。世間の活動的な生活から隠居すると、ぼーっとした無関心な淵に沈み込んでしまう危険がだれしもあるのです。

4　時宜を得た活動。退職してすぐのころは、夫婦がまだ元気ならば、自分たちの子どもや孫、親戚や友人を訪問して、世界旅行にでも出かけるよい時期といえるでしょう。

5　人生の何らかの分野に積極的にかかわること。私たちにはみな、何かに関心を抱き、熱意を失わない必要があるものです。

私は、個人的に次のように思います。1～5でできている、この5階建てのすばらしい家も、もし、夫婦ぐるみ、あるいは個人での、主なる神との関係が大切にされないならば崩壊してしまう危険にある、ということです。神こそ、この「家」の造り手なのです。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　老齢者の家族というと、私はどのようなことを感じ、また考えるでしょうか？

2　老齢者がいる知り合いの家族のために、私たちには、一緒に何かできることがあるでしょうか？

（はい／いいえ）

具体的にいえば、何ができますか？

第2章

コミュニティー[*1]に参加し一丸となって働くために

コミュニティーとして活躍するために、
具体的には、どうすればいいのでしょうか？

1　家庭内暴力というチャレンジに、
一丸となって向き合うことで！

家庭内暴力というチャレンジには、次のようなものがあげられます。

妻への虐待
児童虐待
カギっ子
親戚老齢者への虐待
アルコール中毒
麻薬中毒
家出あるいは家族遺棄
婚外性交渉
オカルト（魔術）
青少年非行、たとえば、
破壊行為・強盗・売春・麻薬密売・レイプ・殺人
……、さらに、自殺

2　家庭内暴力のルーツととりくむことによって！

家庭内暴力のルーツには、次のようなものがあげられます。

怒り
自己本位
プライド
社会からのプレッシャー、たとえば、
消費主義礼讃・消費者運動のグループ
マス・メディア……
家族の貧困、すなわち、
勤めに出る母親・失業・ホームレス……

宗教・信仰の欠如
不正の横行

3　問題から逃げ出さず、手をとりあって
　コミュニティー活動をすることによって！

まずは、自分自身の家族・家庭からスタートします。そして、次に、まわりの人びとと手を取り合います。問題をかかえ、傷ついている家族を助けに出かけましょう。彼ら家族は、私たちの同胞であり、あるいは、信仰共同体の友なのですから。

こうした誓約をすることは確かに難しくはありますが、緊急の課題であり、なんとしても成し遂げていく必要がある事柄です。

さあ、一緒に取り組みましょう。
ただちに！

（＊1）コミュニティー＝自分たちの暮らしに密着した地域社会、あるいは教会共同体などをさす。

第3章
家族へのチャレンジと直面し取り組むために

私たち家族が暮らしている地域社会で、
家族はどのようなチャレンジを
受けているでしょうか？
その現実に、
私たちは、
目を留めているでしょうか？
世界的に蔓延しつつある家庭内暴力に、
私たちは、意識的になっているでしょうか？
家庭内暴力の原因を、
私たちは理解しているでしょうか？

現代の家族問題として
もっとも共通のものとしては、
どんなものがあるでしょうか？
私たち家族は、
それらの問題と
真っ向から取り組んでいるでしょうか？
まず、自分自身の家族・家庭において、
問題を避けてはいないでしょうか？
自分たち自身の家族も含めて、
現代の家族において、
もっとも重要で緊急を要するニーズとは、
何でしょうか？
私たちが暮らす地域社会において、
仲間の家族がかかえている
最大の関心事は何でしょうか？
市民生活の関心事、あるいは、
信仰生活での関心事……。
私たちは、
自分たちの近隣共同体の家族再建に、
積極的にかかわっているでしょうか？

自分たちの所属教会の家族に対しては、
どうでしょう？

ひとことで言えば、
私たちには、
何ができ、
何をすべきなのでしょうか？
つまり、口だけではなく、
行いで示すべきなのです。
地域社会に暮らす私たち家族が
背負っている
チャレンジなのですから！

家庭内暴力

路上で暴力が横行しています。なぜでしょうか？つまりは、私たちの家族の中に暴力があるからです。つまりは、私たちの家庭内で暴力が存在しているからです。そして、つまるところ、私たちの心の中に暴力が渦巻いているからなのです。

現代社会において、家庭内暴力は、もっとも深刻な問題を内に秘めた暴力形態の一種でしょう。家族のだれかから不当な扱いを受けることに、その本質があります。

アメリカ合衆国では、警察の一一〇番に通報される三分の一が、家庭内暴力なのです。その内訳は次の通りです。

▽肉体に加えられる暴力。すなわち、平手打ち、強打殴打の連続、火傷（やけど）を負わせるなど。

▽ことばによる虐待。つまり、悪口雑言、侮辱、い

やがらせ。

▽情緒的心理的虐待。つまり、意図的に愛さない、世話することを拒む。

▽放任。つまり、必要な気配りや保護の欠如。

▽配偶者に対する虐待。つまり、肉体的・情緒的な酷い仕打ち。

▽子どもに対する虐待。子どもに怪我を負わせたり、痛めつける。

▽子どもに対する性的虐待。痴漢行為、レイプ、近親相姦。

▽年老いた親戚に対する虐待。無視、酷い仕打ち、孤立化させる。

しっかり念頭に置いておかねばならないきわめて重要なことがあります。それは、家庭内暴力という、この蔓延する災禍は、日の目を見ない傾向にあるということです。被害者たちが次のように感じてしまうがゆえに、報告されないのです。

▽事件そのものを「恥」と感じる。

▽言ったとしても、わかってもらえなかったり、無視されてしまうことを恐れてしまう。特に、子どもは、そう感じやすい。

▽現状を改善することを考えても、お先真っ暗に思ってしまう。

したがって、現代社会にますます猛威をふるうこの問題に、家族は、しっかり意識を向けねばなりません。では、どのようにして、意識的になればよいのでしょうか？

▽家族・家庭内での暴力を、事実として認識し理解する。

▽家庭内暴力が起こりそうな徴候を予見する。

▽家庭内暴力の原因を識別する。

▽自分たちの家族さらに他の家族を助ける手段を学習する。

▽助けを得るためにどこにいけばよいのか、その知識を得る。

▽毎日、正義と平和のために祈りを捧げる。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　家庭内暴力に関して、個人的に私はどのような知識をもっていますか？
　また、家庭内暴力に対して、何を感じるでしょうか？

2　ここに書かれていることを内省してみて、自分の家庭には、家庭内暴力の徴候があると思いますか？（はい／いいえ）
　どのような徴候があるでしょうか？

3　家庭内暴力に対抗する、実践的なステップとしては、どのようなものがあげられるでしょうか？

配偶者虐待

配偶者虐待。これは、夫や離婚した夫、あるいはつきあっている男性から、身体的・心理的暴力を女性が受けることをさして言います。今日のアメリカでは、報告されえないもっとも一般的な犯罪として、浮上してきているものです。

配偶者虐待の事実

その筋の権威は次のように見積もっています。

▽毎年、六百万人の女性たちが、配偶者からの虐待を受けています。このうち、半数は、法律上正式ではない内縁関係のカップルです。その多くが、身体的な傷害、心理的加虐に苦しんでいます。

▽暴行が原因で、二千から四千の女性が毎年亡くなっています。

▽結婚している人たちの半数までが、少なくとも一

回は暴行された経験をもっています。

▽妻が虐待された場合、十件に一件しか、警察に報告されていません。

▽妻への虐待は、いたるところで起こっています。市街地、市街近郊の田舎、都市のど真ん中のどこにおいても、また、あるゆる生い立ち、あらゆる宗教、あらゆる階層の家族において起こっている問題です。

▽妻への虐待が発端となり、まず、その家族のメンバーが傷つくだけでなく、彼らが暮らす社会全体に悪影響を及ぼします。事実、家庭内暴力が悪の温床となって、青少年非行・アルコール中毒・麻薬中毒などの犯罪が生まれてきます。また、一方では、家庭内暴力を調査しにいった警察が殺傷に及ぶことも起こりえます。

配偶者虐待の原因

配偶者虐待の実態は、たいへん複雑です。しかし、女性を虐待する人たちには、次のような特徴が見受けられがちです。

▽自分に対して貧困なイメージしかもっていない。

▽幼少期の生い立ちに酷い体験をしている。

▽男が独裁的な力を女性にふるうべきだ、という男性優越主義。

▽変わることに対する恐れがある。ストレスがたまっている。

▽自制心に乏しく、未成熟。

▽アルコールや麻薬の中毒。

▽信仰生活の欠如。

▽通じ合いが上っ面にすぎない。

▽仕事上で問題をかかえている。

▽社会的・経済的なプレッシャーに圧倒されている。

虐待されている女性には、何ができるでしょうか？

結婚にとどまること。結婚生活の通じ合いを強化させるなり、カウンセリングを受けたり、子どもに必要な助けを与える、あるいは祈るなどして、基本的な改善を試みることです。

結婚生活から離れる。その女性自身と子どものために新しい生活を築いていく道です。希望をもって前向

きに計画し、具体的な援助や支援を探します。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　配偶者虐待と聞くと、私は何を考え、またどのように感じるでしょうか？

2　配偶者虐待の問題をかかえている家族を、私は知っていますか？（はい／いいえ）

3　私たち家族は、彼らのために何かできるでしょうか？（はい／いいえ）

具体的には何を？

どのようにして実践しますか？

児童虐待

「児童虐待」とは、両親やそれに代わる保護者が暴行や遺棄を繰り返し、結果的に子どもに傷害を与え傷つけることを意味します。「児童虐待」は、いたるところで起こりえます。親の一方か、両親ともがかかわる場合もあります。具体的には、

▽身体的虐待。振り回す・叩く・火傷させる・あるいは、生活に必要なもの、たとえば十分な食料などを与えないなど。

▽情緒的虐待。温かさ・気配り・監督などの保護を与えない。

▽ことばによる虐待。たびたび怒鳴る・いじけさせる・からかう。

▽性的な虐待。近親相姦・レイプ・ポルノ写真・種々の性行為。

児童虐待の事実

毎日のように子どもたちが福祉管理官の保護下に置かれます。このような子どもたちは、親やこれに代わる保護者としての責任にある者から、打たれ、火傷を負わされ、ナイフなどで刺されたり、電気ショックを受けたり、何度も足蹴にされたり、乱暴に壁に投げつけられ、はては、性的な虐待を受けているのです。推定百万人の児童虐待や児童遺棄のケースが、毎年、アメリカ合衆国で発生しています。

結果的に、数えきれないほど多くの子どもたちが家出をし、路上で売春の毒牙にかかり、アルコールや麻薬、あらゆる犯罪の犠牲となります。児童虐待や児童遺棄の結果、多くの場合、自殺に追い込まれます。

児童虐待の原因

多くの場合、両親や保護者が対処しえなかった、過去・現在の問題やストレスがあり、その反動として児童虐待や児童遺棄が発生するものです。

たとえば、

▽「親業」に対する知識・認識の不足。

▽自分の情緒をコントロールできない。

▽非現実的な期待。

▽社会的に孤立している。

▽情緒の安定に不可欠なニーズが満たされていない。

▽幼少期の体験が貧困である。

▽困難な状況・危機の頻発。

▽アルコールや麻薬の問題。

児童虐待にどう対処すればよいのでしょうか？

朗報があります。虐待してしまう親たちも、前向きに努力し手助けを求めるならば、自らの行動を変えることができるのです。必要な助けを彼らが自ら得られるようにするには、どうすればよいでしょうか？

▽問題をかかえ傷心の家族に、「助けの手」をさしのべることで！　そうすれば和解が生まれ、手を取り合って危機と戦い生き抜くことができるでしょう。

▽ただちに問題解決に取り組み、適切な助言を受けるよう促すことで！

▽児童虐待のケースを発見し、助けることのできる

人に報告することで！「いのちの電話」など、適切なグループ、あるいは緊急の場合、警察へ。

▽児童虐待のさなかにいる家族のために祈りをささげることで！

内省し、分かち合い、行動していくために

1　児童虐待の問題の深刻さに、私は気づいているでしょうか？（はい／いいえ）

説明してください。

2　私たちの家族には、何らかの児童虐待が存在しているでしょうか？（はい／いいえ）

具体的に描写してください。

3　児童虐待の問題をかかえている家族に、真の意味で「助け船」をだすことが、私たち家族にはできるでしょうか？（はい／いいえ）

どのようにして？

カギっ子

長時間にわたってひとりぼっちで家にいなければならない子どものことを、「カギっ子」といいます。この用語は、十九世紀初頭に作られたことばで、家の鍵にひもをつけて首からつるしていた子どもをこう呼んだのが始まりです。

カギっ子にまつわる事実

現在、アメリカ合衆国に、七才から十三才までの「カギっ子」二百万人以上が存在していることを、ある調査は報告しています。最新の研究によれば、カギっ子は、しばしば、その年齢次第で、孤独に苦しむ、激しい不安におびえる、あるいはあまりの退屈さにあきあきするなどがわかってきています。幼い子どもたちの中には、悪夢で再三うなされる、どうしたらよいのか心配で、頭がいっぱいになってしまうなどの体験

に苦しんでいる子がいることも報告されています。ひとりっきりで、家に閉じこもってしまうのがその原因です。

専門家はカギっ子をこう分析しています。「カギっ子ほど、事故・火事・麻薬禍・青少年非行などの犠牲になる可能性が高い」と。親の監督・保護・指導がないまま家に放置されてしまう「カギっ子」は、学校でも失敗が多くなりやすく、加えて、年上の兄弟や子どもたち、あるいは大人から性的虐待を受ける可能性も高いと分析家は言っています。

両親が家にいたにしても、子どもの面倒がおろそかにされるならば、そのような環境も「カギっ子」を生み出します。親は子どもと同じ屋根の下に暮らしてはいるものの、真の意味で「家庭で共にすごしている」とは言えないわけです。

鑑別所や獄中は、家出などの非行少年でいっぱいです。彼らがこのような問題を起こすようになったのは、ほとんどの場合、両親の適切な指導と監督がなかったことがその原因です。

「カギっ子」の生み出される原因

「カギっ子」は、変化の激しい現代社会の産物です。このような現代社会では、

▽どんどんかさんでいく生活費を稼ぎ出すために、共働きをしなければならない家族は、増える一方です。

▽片親の家庭の数も、急速に伸びています。

▽子どもの保育プログラムはめったになく、あっても使いものにならないことが多い現状です。

「カギっ子」をなくし、その心の傷をいやすには？

安心できる家庭環境をつくりだすこと。その家族なりの規則を作り、大切な電話番号は控えさせ、緊急時の心得を教え、実際に演習し、また非常事態計画を作っておく。

心と心のかよった通じ合いを実践すること。一緒に話し合う時をアレンジしたり、電話連絡網を作ったり、時間通りに家に戻るとか、通じ合いがうまくできるようなやり方を工夫したり、分かち合った回数を数えておくなどをする。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　「カギっ子」というこの問題は、私にはおなじみですか？（はい／いいえ）
　その理由は？

2　自分たちの家族でも、知り合いの家族でも、このような問題が起きないよう未然に防ぐため、私たちには何ができるでしょうか？

3　今このような状況に苦しんでいる人を助けるため、私たち家族には何ができるでしょうか？

年老いた親戚に対する虐待

どの家族でも、年齢を重ねていくことと無関係ではいられません。なぜなら、生きるということは、年をとっていくことだからです。年老いていくことは、人生における、見逃すことのできない側面です。家庭は、まさに、いろいろな世代が出会いと協調を繰り返す「場」なのです。現代社会の老人を取り巻く現実に目を向けていきましょう。

老齢者の直面している現実

老齢者は脇に追いやられ、その秘められた可能性は無視されている社会……。これが私たちの暮らしている現代社会です。地域社会の最近の傾向を見ると、たいていが、若い人たちの家族で占められています。

今日の多くの家族には、年老いた人びとの活躍する場は、もはやありません。ひどい待遇を受けること数

知れず、ひとり寂しく暮らし、罵倒され、施設に置き去りにされるばかりでなく、自分の財産さえほかの人に食い潰されるなど、枚挙に暇がありません。

このような状態は、老齢者にとって、あまりにも深刻な苦しみのもとですし、その家族にとっても、精神の貧困を生み出す原因となっています。例をあげれば、老齢者たちとの親しい交わりの体験もないまま、子どもたちは大人になってしまうわけです。

老齢者が、「虐待を受けた」と言って訴え出ることは滅多にありません。というのも、自分を虐待するその張本人に、老齢者は、身体的にも経済的にも依存せざるをえない状況にありますし、親に辛くあたる子どもを育ててしまった己を恥ずかしくも思い、あるいは、施設に入れられてしまうのではないか……と恐れてもいるからです。こんなことでは、状況は悪化する一方です。

老齢者虐待の理由

この種の家庭内暴力が発生する、その要因として考えられるのは、

▽家族の中で老齢者はどのような役割を担っているかについて無知であること。さらに、家族のルーツを深め、人間らしい善い価値基準をしっかりさせ、また、ジェネレーション・ギャップを乗り越えるうえで、年老いた親戚がどれほどの役割を果たしうるかについて、気づいていないことがあげられます。

▽自己本位と「物」にとらわれた心、さらに、たとえば、自由気ままに好き勝手するための、いきすぎた便利さなどがあげられます。

▽経済的な原因も考えられます。経済に余裕がない、部屋が足りない、病気や特別の世話を必要とする年老いた身内の面倒を見る能力に欠けているなどです。

年老いた身内への虐待の予防と、その解決のためには？

ことばだけでなく、実際の行いをもって、尊敬と真の愛を表すことです。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　今日の老齢者について、私はどう考え、また感じているでしょうか？

2　私たち家族は、身内の老齢者の世話を心がけているでしょうか？（はい／いいえ）

　具体的に何をしているでしょうか？

3　疎外されている年老いた身内に、家族としての愛を分かち合うため、私たちは何ができるでしょうか？

アルコール中毒

アルコール中毒は病気です。病気であるがゆえに、これにかかった人は、自分でお酒を止めることが困難になります。アルコール中毒は、家族の病気とよく言われます。つまり、中毒者を抱えた家族が、その病人の苦悩、患い、フラストレーションを共有するからです。アルコール中毒を理解し対峙していくうえで、家族の役割ほど、重要なものはありません。中毒症状を示す家族の一員が回復するのは、その家族の助け合いがあってこそなのです。

アルコール中毒の実態

お酒を飲むのが当然の社会に、私たちは暮らしています。アルコール中毒の専門家によれば、アメリカで死因の第三位にあげられる病気は、アルコール中毒で、なんと、現代アメリカ人の一千四百万人以上が、この

病いに苦しんでいるそうです。

大人のうち十人に七人は、ときどきではあっても飲む機会があります。その十人のうち一人は、アルコール中毒にかかっています。アルコール中毒者のおよそ60パーセントまでが、少なくともその一方の親が、やはりアルコール中毒だったか、あるいは現在その病気に苦しんでいる、という事実があります。

アメリカのティーンエージャーでは、十人のうちほぼ九人までがお酒を飲んだ経験があります。このうち、十三歳から十七歳までの五人に一人は、結果的に飲酒癖から抜けられなくなったり、あるいは親や友人とのケンカ、長期の治療を必要とする問題、飲酒運転などの問題を抱えるようになっています。

お酒が絡んでいる車の事故は、ティーンエージャーの死の最大の原因となっています。飲酒や飲酒運転による彼らの死は、年間およそ五千件です。また、一方で、十三万件の傷害事件があります。

急性アルコール中毒の場合、アルコールは早い段階で血液に吸収され、脳に達することが医学的に証明されています。アルコール吸収が早ければ早いほど、心理的・身体的なコントロールは失われやすくなるのです。

なぜ、人はお酒を飲むのでしょうか？

▽肯定的で喜ばしい理由からお祝いのためにお酒を飲みます。また、嫌な考えや思い、思い出したくない人・出来事を忘れようとして飲酒します。

▽ティーンエージャーの場合は、自分が一人前だと主張しようとしたり、親などへの反抗を動機として、あるいは心や性・勉強の問題、家族や法律上の難題から逃げようとして飲酒に及びます。

▽幼少期の問題や、何らかの危機のため。

アルコール中毒に手をさしのべるには？

アルコール中毒は、治療可能な病気です。そこから抜け出すための唯一の手段は、お酒を止めることのみです。だからこそ、患者に対する援助が効果的で実りを結ぶには、家族一人ひとりの態度次第ということになります。

▽動機づけが必要です。患者自身が、現実をまっす

ぐ見つめ、「私は、回復するぞ！」としっかり心に決め、具体的な解決を目指せるよう、準備するわけです。信仰が動機として機能すれば、それが一番です。

▽医学的・心理学的・霊的な援助に本人を導くことです。医者、カウンセラー、ＡＡ（アルコール・アナニマス）、飲酒運転をしない友の会、地域社会としての助け、祈りやいやしのグループなどです。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　個人的に、私は、アルコールの問題を抱えていますか？（はい／いいえ）

具体的に書いてみましょう。

2　自分たちの家族にこのような問題が起きないようにするため、家族として何ができるでしょうか？

3　アルコールの問題を抱えている知り合いを具体的に助けるため、私たち家族は何をすべきでしょうか？

麻薬中毒

麻薬には、自然的なものと人工的なものがあり、人間の肉体とその機構、脳と神経系統および行動や感情に、習慣的な影響をもたらします。医療を目的として適正に使用される場合、麻薬は、新陳代謝のアンバランスを正し、病気を退治し、緊張や疲労あるいは苦痛を和らげる働きをします。しかし、もし、医療上の目的としてではなく、自然あるいは人工的な化学物質を服用するならば、これが原因となって、個人、家族、はては社会にまで問題をもたらす結果になるのです。

麻薬中毒の実情

アメリカにおける麻薬禍（まやくか）の問題は、今や国をあげての大問題であり、今なお蔓延しつつあるのが現状です。麻薬禍に関する国立研究所のデータには、次のようにあります。

▽毎年二十万人もの人びとが、麻薬がらみの事故、あるいは、麻薬による、心理的・身体的疾病のため、病院で治療を受けているとのことです。このうち、二万五千人が死亡しています。

▽毎年約五十万人が、麻薬に関係した犯罪のため摘発され獄中につながれています。

▽アメリカ人による麻薬使用はますます広がっており、この犯罪行為とその結果の医療および法的事業に使われる年間コストは、少なく見積もっても約十兆五千億円にものぼり、このため、生産性はグンと落ちています。

戦々恐々とせざるをえない憂うべき現実があります。それは、アメリカ人、とりわけティーンエージャーや青年と呼ばれる人たちの間で、突如として、法律で禁止されている物質の使用が増加しています。たとえば、マリファナ、コカイン、ヘロイン、アンフェタミン、睡眠薬、精神安定剤、幻覚剤などの非合法物質がそれです。さらに、法律で許容されてはいるものの、酒・タバコの使用も増えています。医学界では、全国的な広がりを見せるこの麻薬禍を、「疫病である！」と言っています。そのうえ今では、麻薬の流行は飛ぶ鳥を落とす勢いで、人づてに、あるいは友人から友人、兄弟から兄弟と広がっていき、あろうことか、親が子どもにドラッグを教えることも珍しいことではありません。

なぜ、人は、麻薬の乱用に走るのか？

こんな状態にまでなっても、人びとは、麻薬乱用の口実を見つけだします。「ぼくにとっては、健康促進薬さ！」「霊的な体験のために必要なんだよ」「退屈から解放されるためにはね」「不安や緊張をなくすために有用だよ」「一回きりでやめるよ」等々。口実の大半に、現実逃避の傾向が見受けられます。他方、麻薬への誘惑は、ますます強い力をもって蔓延しています。

麻薬常用者は助けを必要としています

彼らにとって、その一番の助け手になるのは、家族のメンバーです。

▽まず第一に、家族の者が麻薬禍に陥ってしまったその真の原因とルーツを探し求める、という段階

を踏まねばなりません。また、その人の問題・恐れ・関心などについて話し合うことが必要です。麻薬あるいは麻薬使用について友だちや仲間と話し合う必要もあるでしょう。さらに、信仰と希望に根ざして、麻薬禍に陥った人のため、また、その人と一緒に祈ることです。

▽第二に、問題があまりに深刻で家族の手に余る場合、あわてることなく、専門家の助けを求めてください。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　正直に言ってください。何らかの麻薬中毒の問題が私にはありますか？（はい／いいえ）

具体的には？

2　家族に麻薬の問題が起きないよう予防し、また、麻薬禍から足を洗うため、具体的に私たちには何ができるでしょうか？

3　麻薬禍に苦しむ人びとに、私たち家族は、具体的にはどのような助けの手をさしのべることができるでしょうか？

家出と家族遺棄

「家出」も「家族遺棄」も、私たちが暮らす社会に生じた家庭内暴力の、論理的帰結といえるでしょう。実際この問題は、アメリカの悲劇です。

その現実

▽新聞・雑誌・ラジオ・テレビなどの統計によれば、アメリカ合衆国および全国的規模で、百万人以上の男女（ティーンエージャーと青年）が毎年家出をしています。

▽そのうち、約五十万人の全国の若者は、親や親戚からの虐待を受け、そのため自発的、あるいは裁判所の命令によって、市立・州立・国立の施設の保護下に置かれています。このような若者のことを、若い労働者たちは、"throwaways"（「広告チラシ」の意。道端に捨てられているチラシのさま

を彷彿とさせる命名。ここでは「家族遺棄」と訳してある）と呼んでいる。つまり、自分の家から追い出された者、捨てられた者という意味である。

▽人権福祉管理局の役人は、家出した者のうち半数は、親から失踪届けが出ていないと伝えています。特に、親からの身体的虐待を受けていた場合は、その傾向が顕著です。

▽家出者避難所として大規模なある施設は、かかわった若者のうち家族に首尾よく戻ることに成功したのは、わずか10～12パーセントあまりにすぎないと報告しています。残りの90パーセントの子どもたちはいったいどうなるのでしょう。テレビ番組"Children of the Night"（夜を彷徨う子どもたち）のディレクター、ルイス・リーは次のように言っています。「家出した者のいくらかは、同じ境遇の仲間どうしが出会い、ホームレスの家族になっていくが、それ以外の若者の大部分は、生きていくために、盗み・売春・犯罪の道に踏み入り、そのようなものにすがって暮らしていかざるをえない」。

▽最後に、家出したもののうち、ごく一握りの若者だけが、仕事と住む場所にありつくことができ、自立した生活を築いていくわけです。

彼らが家を出た理由は？

この節の冒頭で述べた通り、家庭内暴力が家出などの原因の際たるものです。虐待されたり、アルコール・麻薬などの犠牲となった若者たちの場合は、特にそう言えるでしょう。しかし、他にも理由が考えられます。

たとえば、

▽結婚生活の崩壊。

▽家族の不一致。

▽真の愛と世話の欠如。

▽ないがしろにされ、孤独であると強く感じること。

▽学校での問題。

▽自尊心の不足。

▽性行為。

▽オカルト、魔術。

予防と解決を目指して

▽予防のためには、家庭内暴力はどのようなことでも避けること。温かくて、愛に満ち、喜びに溢れた家族の団らんをつくること。一緒に家族での祈りをする。

▽解決のためには、家のドアはいつも開いたままにして置くこと。助けや専門家の指導を仰ぐ。家族ぐるみで、深い和解を、しかも頻繁に実践すること。神のみことばに耳を傾け、定期的に時間をとって分かち合いをする。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　私は、家出を考えているでしょうか？（はい／いいえ）

具体的にどうぞ。

2　自分たちの家族で、実際の家出や家族遺棄があるでしょうか？（はい／いいえ）

説明してください。

3　家出や家族遺棄の渦中にある知り合いのため、私たち家族は、何をするつもりでしょうか？

婚外性交渉

「セックスを楽しもう」「もっと自由にセックスを」「新しい愛のモラル」「恋愛の自由」などという言い方がもてはやされ、「結婚していなくたって、セックスして何の問題があるわけ？」という風潮が現代社会では一般的になっています。このため、ティーンエージャーたちは、セックスに踏みきれない自分を恥ずかしいと思う始末です。そこで、こんなふうに結論づけるのです。「みんながやってるんだから……、ためらってるなんて私の方が変にきまってる。」

性の認識に対する不十分な教育環境のため、さらに、社会の風潮や仲間の目に逆らうのが怖くて、セックスについて誠実に内省し、識別するティーンエージャーはごく限られてきています。

▽「セックスは、美しいものである」「セックスは聖なるものである」「セックスは、神から賜った

すぐれた恵みのひとつである」「結婚は、神からの召し出しである」「童貞性（処女性）を保つことは、結婚および家族生活を成功させるために自らがする準備として、最高の道である」「生命（人生）は、神からの祝別である」「セックスの解放といっても、『ノー』と言う自由も含まれていることを忘れてはならない」

▽結論としては、結婚以外において性的な交渉をもつことは、まちがったことです。なぜなら、そこからは、何の「誓約」も生まれてこないからです。「誓約」には、「自分以外の人との、理性・意思・心のすべてを挙げて行う全人的な一致」を表わす具体的な行動が要請されるからです。したがって、婚外性交渉は、神のご計画にまったく反するものです。

婚外性交渉の事実

▽十代の妊娠。これは、現代アメリカ人の暮らしに蔓延してきている現象です。「セックス革命」の落とし子です。

▽同棲。最新の国勢調査のレポートによれば、今わかっているだけで、百万近い男女が同棲生活を営んでいます。当局は、このような同棲生活を"POSSLQS"と呼んでいます。Persons of the Opposite Sex Sharing Living Quarters（「異性が住環境を共用する」の意）の頭文字をとったものです。同棲は、二十五歳未満の年齢層がその大半を占めています。

▽人工妊娠中絶。アメリカ合衆国最高裁判所は、一九七三年に中絶を合法化しました。二千百万人を越える胎児が母親の胎内で殺されています。毎年アメリカ合衆国では、百五十万件と推定される中絶手術が行われています。21秒毎にひとりの赤ちゃんが殺されていることになります。合衆国で妊娠した子どもの三分の一が、中絶のために命を断たれているのです。また、すべての中絶手術の三分の一は、ティーンエージャーのものです。

生命（いのち）を重んじこれを選択するには

母親の胎内にいる胎児も、人間です。ですから、妊

娠を解消するためのもっともおだやかなやり方は、子どもを産むことです。中絶を避け、生命を重んじ、これを選択するために、妊娠したティーンエージャーに、モラルを重んずる合法的な四つの選択が考えられます。

▽結婚。その赤ちゃんの「親」に真の愛があるならば、結婚することです。

▽片親で子どもを育てる。真の愛のない結婚を避けるためです。

▽ティーンエージャーの親が産まれてくる子を育てる、あるいは養子にします。もし、その両親が望むならば。

▽産まれてくる子を養子に出します。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　セックスと愛について、私は何を感じ、考え、計画しているでしょうか？

2　私は「生命尊重派」でしょうか？（はい／いいえ）

なぜ、そうですか？　あるいはなぜ、そうではないのでしょうか？

3　ティーンエージャーで妊娠している子、あるいは、知り合いの未婚の母のために、私たち家族でできることがあるでしょうか？（はい／いいえ）

新興宗教や狂信的なグループ

新興宗教団体や狂信的なグループは危険なことがしばしばありますが、人間としてのニーズに深く響くものでもあります。現代の家族は、愛・世話・親密さ・オープンな心においてより豊かになり、神を家族生活の柱（中心）にしようとするとき、熱狂的な宗教団体から試みを受けることがあります。宗教団体や狂信的なグループからのこのような現象を、現在の家族・信仰に対する、神からの「おしおき」と考えるべきではありません。むしろ、「神のヴィジョン（視野・ご計画）にそった結婚・家族生活になるよう、自らを変え、刷新し、改善していってほしい」という、神からの呼びかけ、チャレンジと見なされるべきです。

この挑戦的な現実と直面するための唯一の手段は、結婚・家族生活に眠っている、愛の力強いエネルギーを発見し、それを解放することです。

ティーンエージャーもそれ以上の若者も、実際のところ、自分たちの探し求めているものを「家庭」で見つけるそのときまで、どこかよそにそれがないかと探し回ることでしょう。そしてしばしば、誤ったものを見つけて、「自分の探し求めていたものはこれだ！」と思い込んでしまうのです。北米の小国ガヤナの町ジョンストンで起こった事件をご存じでしょうか？

"Peoples' Temple" という宗教団体が、十五年ほど前に起こした事件で、数百人が集団自殺するという結末でした。

その現実

▽新興宗教ブームは何世紀にも渡ってあったものですが、特に一九六〇年以降、その数は爆発的に跳ね上がりました。現在アメリカ合衆国には、少なくとも二百五十の新興宗教団体や狂信的なグループが存在しています。アメリカ合衆国でもっとも一般的に知られているのは、

The Way

The Unification Church（統一教会）

The Moonies
Hare Krishna
The Children of God（神の子どもたち）
The New Age Movement（ニュー・エイジ運動）
です。

▽右にあげなかったものの中には、「サタニズム＝悪魔崇拝」、あるいは、オカルトや魔術的なグループが存在しています。たとえば、過去数年間に、アメリカ合衆国中の警察庁では、常識的には考えられない犯罪の現場についての報告がなされています。そういった現場には、動物の死体が残されていたり、時として、その動物の血が流された形跡が残っていることもあります。サタンの名における破壊事件や殺戮・自殺などもありました。また、そのいくつかの事件では、サタンに対する生け贄として人間が実際に犠牲になったケースもあったほどです。

▽多くの新興宗教や狂信的なグループでは、「洗脳」が施され、ひじょうに洗練されたスタイルの、社会的・心理的な手練手管を用い、新会員を勧誘し、引き入れるのです。そのような手練手管としては、団体のだれかによる「泣き落とし」や、以前の友人や家族、あるいは外界からの影響を一切シャットアウトするやり方などがあります。新興宗教の方法や接し方は、人格を破壊するそれであり、家族・社会を混沌に陥れていくものです。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　真の信仰と新興宗教には、どのような違いがあるでしょうか？

2　家族に対して、思いやりが増し、より責任をとるようになり、さらに寛大な心をもてるようになった、そんな自分自身の信仰体験や気づきには、どのようなものがあるでしょうか？

3　かかわりある地域社会のティーンエージャーや若者で、新興宗教や何らかの狂信的なグループに嵌まってしまった者のため、私たち家族には、何かできることがあるでしょうか？（はい／いいえ）

青少年非行

「おい、あのババアちょっぱって、ハッパやんね！」「ああ、いいぜ」。

読者の皆さんは、これがどういう意味かおわかりですか？「おい、あのおばあさんから、お金をひったくって、マリファナ・タバコを買って吸おうよ！」と言っているのです。悲劇的なことですが、人であふれかえる都市の雑踏では、このような会話とそれに続く犯罪が、毎日、数千回も繰り返されています。特に、アメリカ合衆国では目立っています。さらに悲惨なことは、このような犯罪にかかわっているのは、八歳から十八歳までの「子ども」だということです。正しい判断のできない子どもたちは、街の奥深く、ギャングたちの暴力が渦巻いている犯罪多発地区に組み込まれていくわけです。

青少年非行の現状

▽このような街の奥深く暮らす平均的な子どもたちは、政府プロジェクトとして住居費の補助を受けているアパートの三部屋を、三人から四人の兄弟姉妹が共用している現状です。

▽このような子どもたちは、通りの壁一面に落書きがあり、壊れたガラス片の散乱したような環境で成長していくわけです。たびたび言われることですが、このような街の子どもたちは、「通り（ストリート）」の中で、「ストリート」によって育てられるのです。そして、この「ストリート」は、血も凍る非情の教師としてふるまうのです。この若者たちは、「ストリート・チルドレン」として何をおもに学ぶのでしょうか？

――手当りしだいに破壊する。都市でのこの現象は増加する一方です。

――窃盗を行う。ひったくり・侵入強盗・自動車泥棒など。

――麻薬売買にかかわる。個人的に、あるいは組織がらみで。

――暴行および強姦事件。個人で、あるいは、チームを組んで。
――売春婦あるいは売春夫になる。
――殺人に一役買う。個人で、あるいは、ギャング仲間とグルになって。

▽あげくの果てに、子どもたちは、通称 Big House（ビッグ・ハウス＝大きな家）、つまり、牢獄か施設に送られ、そこでその多くがさまざまな「技術（！）」を「磨く（!!）」というわけです。

何かできることがあるのでしょうか？

はい、あります！　実際のところ、このような街で暮らす家族の多くが、そのような環境にもめげず、そこでのさまざまな誘惑やチャレンジを克服しています。「暗黒街」に暮らしていても、「暗黒街」が心の中にまで巣くってしまったのではないことを、彼らは証明しています。青少年非行を防止するため、私たちにもできることがあります。

1　家族での時間を優先することです。和解と分かち合いの「ひととき」です。

2　「主」こそ、家庭の中心であるようにすることです。聖書、そして、家族の祈りを大切にします。

3　家庭内暴力に打ち勝つため、他の家族と協力し合うことです。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　ストリート・チルドレンについて、私が感じること、考えることは何でしょうか？

2　私たちの家族は、青少年非行の事態を予防できた家族といえるでしょうか？　それとも、何らかの救済を必要としている家族でしょうか？　具体的に書いてみましょう。

3　知り合いの非行少年少女のため、具体的に私たちには何ができるでしょうか？

自殺

いのち！　これに比べられるものはありません。生活に、困難・苦悩・失望・悲劇・孤立が避けられないとしても、確実に言えるのは、「いのちとは意義深いものである」ということです。

自殺の実態

▽アメリカ合衆国ワシントン州にある、国内青少年自殺センターの代表取締役、シャーロット・ロスは、こう言っています。「毎日、十三人のティーンエージャーが自殺し、年に換算すると、五千人にものぼっている。毎年、五十万人の十代の子どもたちが自殺未遂。それと別に、さらに百万人が自殺を考えている。」

▽簡潔に言えば、自殺は少年少女の死因の第二位にあげられています。ちなみに、第一位は事故死です。しかし、車にひかれたり、銃の流れ弾にあたる、あるいは薬の投与過剰など、事故として報告されているものの多くは、実際は「事故」ではないのです。

なぜ、十代の子どもたちは、自殺するのでしょうか？

自殺から始まるわけではありません。自殺は、隠された深い鬱憤と苦悩が積もり積もった、最終到達地点なのです。自殺の原因は、個人やそれぞれのグループなどによって、多岐に分かれます。しかし、もっとも共通のものとしては、

▽結婚・家族における暴力。
▽社会一般あるいは仲間の目を気にする。
▽罪悪感や挫折感。
▽自分には価値がないという思い。
▽愛されていた者に拒否される。
▽現実からの逃避。
▽憤り。助けも希望もない状態。
▽アルコール中毒。
▽麻薬中毒。

▽失望。
▽復讐。
▽孤立。
▽身体的な苦痛。
▽学校での問題。

自殺を予見する警報

▽無軌道、無謀な行動に走る、あるいは自分を苛めるような行為をする。
▽アルコールや麻薬の乱用。
▽大切な関係を育てていく能力に欠けている。
▽家族・親戚・友人・恩師らから、社会的な縁を切る。
▽大切な人の死。また、そのことを思い出させる何周忌の法要など。
▽希望がない、救いがない、価値がない、混乱している、あるいは死への願望などが表現されるとき。
▽前途多難な恋や失恋をごく最近体験した。
▽個人的な関心事の追及をしなくなったり、生きる目標がない。

十代の子どもたちの自殺は、どのようにして防ぎうるのでしょうか？
▽自殺警報を見逃さない。
▽説教するのではなく、相手に心から聴く。
▽深い希望のうちに祈る。
▽信頼関係をもつ。
▽即座に助けを求める。
▽一緒にいて、行いを通して助ける。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　私には今まで、自殺を考えたり、実際に自殺未遂に及んだことがあったでしょうか？（はい／いいえ）
　なぜでしょうか？
2　自殺願望のあるだれかのため、私たちは何をしたいでしょうか？
3　家族から自殺者がでないようにするため、家族として、私たちには何ができるでしょうか？

第4章
家族問題のルーツと取り組むために

今まで、私たちが、
内省し、
分かち合い、
そして行動してきたのは、
「家族」共同体にとっての、
もっとも大切な問題・ニーズ・関心
にまつわる事柄でした。
さらに、
私たちは、
これらの問題の原因を探り、
希望をもって、
個人あるいは家族ぐるみの
実践的な誓約を立ててきました。
さて、今、
私たち家族の
内外にかかわる問題と取り組むため、
問題の本質である「原点（ルーツ）」を
探り出すときがやってまいりました。
現状を知ったところで、
「それで充分」とは言えません！
実際に大きな実りをもたらしたいならば、
根本（ルーツ）に
迫っていく必要があるのです！

怒り・自己本位・プライド

人生で私たちが味わうもっとも深い苦しみの体験は、三つあります。その三つが、私たちの心・家庭・社会に不幸をもたらすわけです。

怒り

「怒り」とは、感情あるいは情緒の働きの中でも「勢い」があるものですが、私たち人間ならばだれでも、ときどきは体験するものです。「怒り」と友好的につき合うこともできますが、さもないと、手のつけられない敵になってしまいます。どちらの結果になるかは、怒りをどのようにコントロールするか、さらに、それをどう表現するかにかかっています。自分の感じている怒りを適切に認識し扱うならば、障害を克服することができ、目標達成、問題解決、緊急事態回避、さらには、健康を維持することさえできるものです。しかしながら、怒りの感情を見落としたり、理解やコントロールを怠るならば、ストレスと不安の原因になってしまうでしょう。これでは、神経症的な状態へとひた走ることになるかもしれません。すなわち、絶望、寂寞感、鬱屈、孤立感、錯乱のような状態です。「怒り」に、どう対処したらよいのでしょうか？

「怒り」のコントロールを効果のあるものにするためには、その真の原因を見いだす必要があります。失敗、不貞、不忠実な態度、侮辱、恐れ、不一致、酷い仕打ち、抑圧などが、その原因となりうるでしょう。しかし、さらに掘り下げていきたければ、真心から自分たち自身の姿を直視し、自己本位やプライドが怒りの原因になっているか、さらには生活のどのような側面にそれが出てきているか、見つめねばなりません。

自己本位

自己本位は、先天性のもので、誕生のときからだれでももっています。自己本位は、愛の許容力をせばめてしまうものです。つまり、自己本位は、愛の対極に位置するものです。自己本位は、未熟でバランスを欠

いた利己的な愛なのです。あまりにも自分自身にこだわる姿勢です。自分自身の関心を満足することばかりにとらわれてしまうと、他人についてはまったく無関心になるものです。人を利用したりもらう一方で、与えることのない姿勢・態度が自己本位です。

他の人の自己本位を見つけるのは簡単なことです。しかし、実際の場合、自分自身の自己本位はよく見えないものです。

プライド

プライドは、私たちのだれもがもっている、もうひとつの生まれついての傾向です。プライドがあると、愛したり愛されたりすることが困難になってしまいます。他人と比較して、自分自身の能力についてあまりに買いかぶりすぎるところに、プライドの根があります。プライドは、自分自身のもっている美点を、傲慢さから喜ぶ態度です。プライドがあると、最高を求めすぎたり、なんでもかんでも自分の意のままにしたがったり、すべてうまくいかないと気分がおさまらなかったり、あれもこれも手に入れようと思ってしまったりと、結果として、容易に抑圧状況に陥ってしまうでしょう。

プライドも自己本位と同様、盲目です。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　怒りがわがもの顔にふるまうのは、私の人生や家庭のどの部分にでしょうか？

2　私たち家族の暮らしには、自己本位やプライドのはっきりした徴候が存在しているでしょうか？（はい／いいえ）

3　神経症や鬱状態に悩む知り合いの手助けになるために、私たち家族には何かできるでしょうか？

世間の目

怒り・自己本位・プライドは、確かに私たちの心の内側に巣くっています。しかしながら、現代の家族が安定に欠けているその原因はほかにも存在するのです。こちらのほうは、外因的な原因で、その名を「世間の目（社会からのプレッシャー）」と言います。さて、今まですでに、いくつかの問題について内省してきました。すなわち、離婚、セックス革命、人工妊娠中絶、アルコールや麻薬の問題などについてです。ここでは、消費社会（消費至上主義）、仲間（同輩）づきあい、マス・メディアに、焦点をあててみることにしまょう。

消費社会（消費至上主義）

疫病神のように広がるこの流行「消費社会」は、世のあらゆる人の心に影響を及ぼし、私たちがもっている価値観を根底からくつがえす考え方です。その本質は、「人生における最重要課題は、ものを手に入れ、所有することにある」というメッセージにあります。ひじょうに強い影響力をもっているため、現代人のほとんどがこの新しい「福音(!?)」にしたがっている有様です。そのあげく、物を手に入れることによって、自分自身の存在を稀薄にしてしまっているのです。このアイデンティティの危機は、現代社会に暮らす個人・夫婦・家族の多くの問題であり、根本的には、まさにこの「消費至上主義」という哲学（生き様）を出発点としているのです。では、消費社会の圧力に打ち克つにはどうすればよいのでしょう？　その克服の鍵は、「まことの信仰」に生きることにつきます。

仲間（同輩）づきあい

「仲間（同輩＝"Peer"）」は、"The New Webster Dictioary"によれば、「同じ階層に属するもの。似たもの。同等・対等（の人・もの）。仲間。」となっています。したがって、「仲間（同輩）」は、私たちにひじょうに関係の深い人たちということになります。ひじょうに密接なきずな（かかわり）があるわけですし、共

通部分が多い似た者同士でもあるからです。年齢に関係なく、だれでも、他人が何を考え、感じ、望んでいるのか、さらには、何を着、何をやっているのか気になるものです。家族にまつわる「仲間づきあい」を見ていくと、親同士のつきあい、子どもなりの仲間づきあいなど、すべての年齢層の「仲間づきあい」があることがわかります。

「仲間づきあい」は最高の親友、あるいは最悪の敵のどちらにもなる可能性を秘めています。仲間づきあいの質によっては、私たちだれもが充実して暮らせることもあり、あるいはその逆になってしまう危険もあるのです。私たちは、自分に偽ることなくこの違いをしっかり識別しなければならないのです。「赤信号、みんなで渡ればこわくない」式の生き方が、昔からよく知られている罠でしょう。特に、家族の若年の者は陥りやすく、簡単に、自分のアイデンティティを失う結果とあいなります。

しっかり心に留めておいてください。「仲間・同輩」に対して「いいえ」とはっきり言っても構わないのです。そうするか否かは、私たち次第です。私が何を決意選択するかを見ると、私にとっては何が重要か、私はどのような人間であるかが、そこに浮き彫りにされているものです。もし、混乱してしまったり、はっきりしないことがあるならば、家族の信頼できるだれか、あるいは親戚・友人たちに相談してみるとよいでしょう。心をしっかりもてば、自分自身のことをほかの人に左右されることもないはずです。

マス・メディア

マス・メディアには、出版、雑誌、ラジオ、映画、カセットテープ、家庭用コンピューター、ビデオ、テレビなどがあります。これらは、現代の家族に多大な影響力をもっています。これらマス・メディアは、今の世に神が人間を通して創造されたよい役割があるにしても、その大半は、家族の心を根底から台無しにしてしまっています。特に、テレビは、何の規制を受けることもなく乱用されています。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　現代のマス・メディアがもたらす影響力につい

て、私は、どのような考えをもっていますか？

2　私たち家族は、テレビから、どのような影響を受けているでしょうか？

3　知り合いの家族がかかえている問題、ニーズに無関心でないため、私たちは、どのようにしてマス・メディアを利用することができるでしょうか？

家族の貧困

「貧困」とは相対的問題であり、その定義も、人・立場・事情によって多岐に渡るでしょうが、人口統計学者の推定によれば、全世界の人口の四分の一は、貧困にあって暮らしているとのことです。

富んでいるアメリカ合衆国では、「貧困」はどうなっているでしょうか？

貧困の現状

▽家族の貧困。アメリカ合衆国では、二千五百二十万人以上の人が、貧困所得線（健康で文化的な最低限度の生活が送れる最低所得ライン）を下回った生活を送っています。

アメリカ人の子ども全体の四分の一、つまり、一千三百三十万人の児童が、貧困にあえいでいる現状です。

その半数以上は白人、三分の一が黒人、六分の一がヒスパニック系住民です。

アメリカに暮らす貧困層の半数は、片親世帯です。しかも、そのような片親家族の十件に一件は、母子家庭です。法律が定めているにもかかわらず、ほとんどの父親が扶養義務を怠っています。もし、なにがしか送金していたにしても、子どもの扶助で精いっぱいの額にすぎません。

▽働く母親たち。学童を抱えた母親全体の70パーセントが、家庭から出て働いています。ある母親は、家計をひとりで一手に引き受けなければならない立場にあり、また、生活費の高騰・インフレや失業の影響で、女性の稼ぎが必要になって働いている母親もいます。

男性と同じ職に就いても、彼女たちが稼ぐ額は、基本的に男性の三分の二というのが一般的です。貧しいアメリカ人の三人に二人は、女性ということです。

▽失業。家族の失業状況についての正確な統計は出版されていません。しかし、失業しているものの半数以上は結婚していると言っても、過言ではないと思います。さらに、ヒスパニック系や黒人に見受けられるような大家族では、親たちは、少人数の家族に比べ、高い失業率のためにより苦しんでいる現状です。

いずれにせよ、現在の失業レベルは、国中の家族生活をドン底に追い落とすものです。そのうえ、事実、私たちが暮らすこの社会のモラル低下にとって深刻な状況をもたらしています。これが原因で、希望は失われ、不景気で、何についてもどうでもよくなってしまい、不正が蔓延する結果になっています。無責任、妬み、無軌道な破壊行為、暴力さえも横行するようになってしまいました。私たちが、街や都市で毎日体験しているのは、まさにこのような状況です。

▽住居問題。低所得層の家族について、社会保障・賃金のどちらから考えてみても、低迷は今後も続

き先行きが暗いと言うなら、まして、悲惨な住宅状況、あるいはホームレスとして暮らしている現在の貧困家庭は、どうなってしまうのでしょうか？

内省し、分かち合い、行動していくために

1　貧困にあえぐ家族について、私は何を感じどのように考えているでしょうか？

2　今の生活水準をさらに簡素なものにするためには、私たち家族は、どのようにしたらよいでしょうか？

3　知り合いの貧しい家族のため、私たちには、何ができ、また何をすべきでしょうか？

信仰生活に対する無知

まことの信仰。これは、神が謙遜な人に賜る、かけがえのない贈物です。何もかもうまくいかないとき、まことの信仰があたかも接着剤やセメントのような役割を果たし、すべてを一致させてくれるのです。真の宗教に根ざした信仰。これは、自ら決意し神を選択する行為です。この信仰のおかげで、家族のメンバーは信じ合い、互いに関係（きずな）を保つことができるのです。家族が神に近づけば近づくほど、家族もよりいっそう親密になっていくのです。

とはいうものの、現代の家族・家庭の状況はいかがなものでしょうか？　まずは、自分たち自身の家族・家庭から見ていこうではありませんか？

その実態

現代のたいていの家族・家庭では、生き生きした信

仰など、まったくなりを潜めています。実際、唯一超越し、位格を備え、至高の力をもつ神がいるなどと、だれも信じてはいません。その代わりに現代の家族・家庭で崇拝されているかのような事柄として、金銭・社会的地位・名誉・学歴・家などの、いわば「神々」があげられます。

現実に目を向けると、現代の家族で、道徳・一致・神などに対して面と向かって反論を試みる人はいません。神への表立った反逆は見受けられません。しかし、真理・誠実・道徳・宗教・神の認識について、実際くい違いが存在していることは、はっきりしています。ことばでは言わずとも、日々の行いを通して、現代の家族は、自分たちの選びを表現しています。つまり、「よいもの」……「神々」を「所有する」という選択をです。

その徴候

家族が「神不在」の生活を送っている場合、その徴候は火をみるより明らかです。

▽神の生き生きした体験に関して、通じ合いがない。
　分かち合う内容がない。
▽親子共々、信仰教育がなされていない。
▽神が現存し働いておられることに、気がついていない。無関心。
▽神に対する畏敬の念、神に対する尊敬がない。
▽祈りがない。
▽聖書がない。本棚でホコリをかぶっている。
▽秘跡と無関係の生活。
▽神が与えてくださった十戒を知らない。無視し破っている。
▽ナザレのイエスの福音を知らない。無視し破っている。
▽教会の教えを知らない。無視し破っている。

結論。したがって、混乱・自己本位・不正・暴力・死が増える一方です。だれをも何をも尊重せず、平和がなく、希望はゼロの状態なのです。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　私は、心の底から神を信じているでしょうか？

（はい／いいえ）

なぜ、信じているのですか？あるいは、信じてはいないのでしょうか？

2　私たち家族は、神を中心に据えた生活を送っているでしょうか？（はい／いいえ）

具体的に説明してください。

3　自分たちの家族あるいは知り合いの家族において、信仰教育を充実したものにするため、私たちには何ができ、またどうすべきでしょうか？

不正

家族の不安定という状況の根底には、不正が存在しています。言い換えれば、家族の権利に対する侵害があるということです。

家族の権利とは、何でしょうか？

一九八〇年、カトリック教会をその母胎として、"Charter Of The Rights Of The Family"（家族権利憲章）が生まれました。私たち家族が内省し、分かち合い、具体的な行動に移せるよう、そこからの抜粋と要約を以下にしてみましょう。

第1条：すべての人は、結婚して家庭を築くにせよ、独身で生きるにせよ、自らの生きざまを自由に選択する権利を有している。結婚した者たちは、健全な家族生活を営むための、道徳的・教育的・社

会的・経済的に適した条件を、社会から期待すべきである。

第2条：真の結婚とは、「自由意思に基づく完全な合意」の権利が保証されているときにのみ、有効である。男女両性は、結婚における同等の尊厳と平等の権利を享受すべきである。

第3条：配偶者は、家族を築き、自然法にしたがう限り、産まれてくる子どもの数を決定し得るという、何人(なんぴと)も奪いえない権利を有している。家族は、子どもを養い育てるうえで、支援する権利をもっている。

第4条：人間の生命は、その妊娠の瞬間から、絶対の尊敬と保護を受ける権利を有している。中絶、胎児の実験、遺伝子操作などは、まったく許されるべきではない。

第5条：両親は、子どもの教育に関して、本来の、主要な、譲渡されえない権利を有している。加えて、公共の権威は、この権利を保障する社会構造を保障しなければならない。

第6条：家族は、家族として存在し進歩していく権利を有している。社会制度として「家族」がもっている尊厳と安定は、離婚によって著しく傷つけられる。

第7条：あらゆる家族は、独自の信仰を自由に生きる権利を有している。公けに礼拝する自由、不当な差別なく宗教教育を受ける自由があるべきである。

第8条：家族というものは、社会を築きあげるうえで、社会的・政治的な役割を担いうる権利を有している。他の家族との協力態勢を作りあげることは、この役割を効果的に果たすことである。

第9条：家族は、法律・経済・社会・国の所有地のそれぞれにおいて、また、公共事業に関して、家族に対する政策の恩恵を十分に受ける権利を有している。

第10条：労働条件および賃金は、家族の必要と権利を鑑みたものであるべきである。

第11条：家族は、家族を育てていけるだけの、相応な住居・基本的福祉・適切な環境をもつ権利を有している。

第12条：同等の権利は、移民・難民・出稼ぎ労働者にも、保証されるべきである。

第5章
愛の証し人として生きるために

身体的霊的なニーズ

さあ、このワークブックの最終地点です。生命と愛に満ちた真の共同体である「幸せな家族」は、知り合いのニーズに無関心ではありません。彼らの感じている孤独に共鳴し、したがって、今の世では忘れられている「慈愛」を実践します。身体的にも霊的にも、彼らのニーズを満たそうと努めます。「家族ぐるみで実践される愛」ほど、共同体としての特徴として最高のもの、力溢れる証しはほかにないでしょう。

動かしがたい真理があります。私たちは、「家族として、愛の証し人になるように」と呼ばれているのです。それも、口先ではなくて、特に「行い」を通してそうするようにと呼ばれたのです。いつでも、この使命は、私たちに与えられている個人的な賜物と、家族としての霊的賜物（カリスマ）によって行われます。では、どうやって、実践していけばよいのでしょうか？　以下に、皆さんで、内省し、分かち合い、行動していくために、ヒントとなる提案をいくつか載せておきます。

身体的ニーズ

▽空腹の人に。すぐに行って、食べものをさしだします。

▽渇いている人に。必要なときに、飲み物をさしだします。

▽着るものがない人に。相手への心配りを忘れないように、着るものを提供します。

▽獄中にいる人に。彼らを訪問し、その家族を援助します。
▽ホームレスの人に。よすがとなる場所を探すか、自分の家庭を提供します。
▽病人に。彼らを訪問します。とりわけ、助かる見込みのない病気の人を。
▽亡くなった人に。葬り、彼らのために祈り、その家族の支えになります。

霊的ニーズ

▽自分自身の誠実な生活を通して、罪に陥っている人を戒めます。
▽自分の賜物と時間を使って、知らない人に必要なことを伝えます。
▽知恵と祈りをもって、混乱し疑心暗鬼にとらわれている人をさとします。
▽心から耳を傾けて、苦しんでいる人を慰めます。
▽忍耐づよく、柔和に、まちがいを正します。
▽関係を完全なものへと修復しながら、受けた心の傷をゆるします。
▽生きている人、亡くなった方のために祈ります。友人も敵も両方のために。

内省し、分かち合い、行動していくために

1　私は、慈悲深く、愛のある人間でしょうか？（はい／いいえ）
　答えが肯定であれ否定であれ、何らかの徴候があれば、書いてください。

2　私たちは、家族ぐるみで、共同体に対する愛と平和の使者として証しを実践しているでしょうか？（はい／いいえ）
　「はい」「いいえ」どちらにしろ、それを示す適切なしるしを描写してみましょう。

3　苦しみにあえぐ知り合いを見て、彼らに救いの手をさしのべるため、私たち家族には、何ができまた何をすべきなのでしょうか？　具体的に、そのやり方・時を決めましょう。

第五部　さらに生かし続けるために

このワークブックの最後の章は、
次のことを目的としています。
すなわち、
読者の皆さんの中に燃え始めた
「愛の炎」をつねに消えないようにし、
またさらに、燃え立たせることです。
この第五部には、
すばらしいやり方・手段・道具が載っています。
これらを使って、
家族である皆さんは、
一歩一歩確実に成長していくことができます。

個人としての成長、
夫婦としての成長
家族ぐるみでの成長がものにできるのです。
そして、
言うまでもなく、
ほかの家族の仲間と分かち合うこともできます。
こうして、
私たちは皆、
よりよい家族へと育っていき、
世界はよりよいものへと
変化していくのです！

家族奉仕職

自分たちのアイデンティティを
見いだすことのできた家族は、
家族ぐるみでさらなる成長を遂げるため、
ほかの家族たちに
自分たちがもっている幸せの秘訣を
分かち合っていかねばなりません。
炎は、
燃え広がっていくときに限って、
光を発し続けることができます。
しかし、そうでなければ、
どんどん炎は小さくなって、
やがて消えてしまうでしょう。
ですから、
私たち家族は、
炎を消さないためにも、
行動するようにと、呼ばれているわけです。
私たち家族は、
ほかの家族に奉仕するよう、
呼ばれているのです。
すなわち、
近所づきあいで、
所属教会で、
地域コミュニティーにおいて、
そして、
この世という共同体において、
奉仕してほしい！　と呼ばれているのです。
別のことばで言えば、
家族奉仕職に
私たち家族は、呼ばれたのです。

ほかの家族のために奉仕するという、
家族ぐるみの冒険をするため、
ヒントとなるような実践的な提案を
いくつか、
以下の節にあげておきました。

近所づきあい・小教区

今まで見てきたとおり、私たちの地域共同体（近所づきあい）の家族には、たいへん強力な圧力と否定的な影響が及ぼされていることは、はっきりしています。私たち家族にとって、これはものすごいチャレンジなのです。

どう対抗すべきでしょうか？　近所づきあいとその枠を越えた家族共同体において、どうすればこのような悪影響を回避し、問題を解決し、家族の意識を高められるような、そんな、家族の意識化と家族に対する認識を、しかも家族ぐるみで、もてるようになるのでしょうか？

答えはこうです。自発的なほかの家族と手を組んで、一緒に、家族奉仕職の歩みをスタートすればよいのです。

家族奉仕職とは、次のようなものになるでしょう。つまり、ほかの家族を巻き込みながら、家族同士のギブ・アンド・テイクがあり、そこでは、必要な養成・援助・いやしが分かち合われるといったように……。

このように言うと、家族奉仕職は、ごく自然で自発的に生まれるかのように見えるでしょう。しかし、この冒険は、現実には、そんなになまやさしくはありません。家族奉仕職が真理に根ざし、堅固で、効果をもたらすものであるためには、しっかりとした動機づけがなされ、神のみことばにしっかり基づいたものでなければなりません。さらに、家族奉仕職は、「時のしるし」に隠されている神のご意志をも読みとっていかねばならないのです。

では、次に、家族奉仕職という、小教区のもっている偉大な使命について見ていきましょう。

私たちが認識しておかねばならないことがあります。それは、現在のほとんどの小教区において、家族奉仕職は不在だということです。家族奉仕職が不在である原因としては、次のようなものがあげられるでしょう。

▽小教区の構造が、基本的に、個人中心のものであ

る。

▽小教区のあらゆる奉仕も、個人的アプローチを基礎としている。

▽家族という視点の欠如。責任とか指導者を決める際に顕著である。

▽小教区主導のプログラム。どのプログラムにおいても、親子が別々に活動している。典礼、黙想会、信仰教育、祈りの体験、お祝いなど、どこでも別々。

私たちが、世界中を「ひとつの家族」にしたいと望むならば、さらに、家族こそ「新しい世界」の基盤になるよう望むならば、小教区こそ「家族の中の家族」にならねばなりません。

小教区を「家族」というこの観点からとらえると、司祭や指導者たちは根底から変化することを求められるでしょう。つまり、個人的なアプローチではなく、小教区が一丸となって家族に奉仕していくには、どのような方法ですべきか？　という課題への回答が迫られるのです。

その方法に対するいくつかの提案

▽家族を訪問するグループを結成します。こうして、家族が抱いている、関心・恐れ・ニーズ・価値観・期待・勧めなどを学習していきます。

▽家庭を中心としたプログラムの導入。家庭のパワーを発揮するために、「家族の夕べ」「食卓を囲んで」「みことばを囲んで」といった集まりをつくります。

▽教区に所属する家族を中心にしたプランを企画する。いろいろな種類の「ミニ・エンカウンター」を毎月開催する。夫婦のため、子どもたちのため、親子のため、「家族」のためと、いろいろな視点からのもの。

▽家族専門の奉仕者のための、定期的なトレーニングの企画を立て、実施する。

家族生活を豊かにするための実践

「家族生活を豊かにするための実践」といっても、
どういうことをいうのでしょうか？
「家族生活を豊かにするための実践」において、
そのプロセスは、
たえまない学習にあり、
その結果、
家族生活は発展し、
家族のもつ長所は
さらにすばらしいものになっていくのです。
「家族生活を豊かにするための実践」には、
体験をより深めていく意味があり、
それによって、
すでに心の中に隠されている力が
解放されていくのです。
「家族生活を豊かにするための実践」は、
ひとつの手段です。
これは技術として磨きをかけることができるもので、
このおかげで、
家族の通じ合いと家族の関係（きずな）はさらにいっそう
しっかりしたものとなるのです。
「家族生活を豊かにするための実践」は
心の内面に焦点を置くだけでなく、
外面的な活動的事柄にも
かかわっているものです。
「家族生活を豊かにするための実践」を積めば、
自分たち家族の中に秘められている
可能性に気づいて
実践することができ、
生命と愛と平和を、
らせん（スパイラル）のように
開かれた精神をもって、
伝えていくことができるでしょう。
家族が一体となって、
自分たちがもっている
すばらしい成長の可能性を

現実のものとすることが、
「家族生活を豊かにするための実践」の
目的とするところです。
幸いにも、
今日、
実践に役立ついろいろなものが
用意されています。
各種の書籍、雑誌などの素材です。
それだけではなく、
家族に関係する
たくさんのムーブメントが存在しています。
団体組織・ネットワーク・プログラムや
サービスが用意されています。

それでは、その中のひとつ
「FIRES（ファイアーズ）」を
紹介いたしましょう。

FIRES

FIRESは、
Family,（家族）
Intercommunication,（通じ合い）
Relationships,（関係）
Experiences,（体験）
Services.（奉仕）
の頭文字から来ています。

FIRESとは、何でしょうか？
FIRESとは、ひとつの夢です。私たちが暮らしているこの時代では、通信技術は目覚ましいスピードで発展しています。しかしながら、同時に、数えきれないほど多くの人間たちが、孤独・孤立の苦悩にあえいでいるのです。こんな時代において、FIRESには、大きな夢があります。家庭の中に隠され秘められ

ている「愛のエネルギー」を見つけだし、それを解放し、核融合のようなすばらしい愛の炎を燃え立たせたい！　という夢です。このような夢を共有できる家族たちに、ＦＩＲＥＳのプログラムはさしだされているのです。

ＦＩＲＥＳとは、ひとつの確信です

神のご計画に基づいた、心と心の通じ合いと関係（きずな）こそ、私たちの暮らしている現代社会に正義と愛と平和の革命を起こしうる「秘訣」なのだ！　という確信です。神のこのようなご計画は、聖書、そして、「時のしるし」を通して啓示されています。

ＦＩＲＥＳとは、ネットワークです

このネットワークには、次のような素材・プログラムが与えられています。

個人向け

セルフ・エンカウンター（ＳＥ）

：「自己との出会い」のプログラム。

ＳＡＤＥ（Sons and Daughters Encounter）

：若者のためのプログラム。

若者のレトルノ

：原則としてＳＡＤＥの体験者による、神との出会いをテーマにしたプログラム。

夫婦向け

マリッジ・エンカウンター（ＭＥ）

：夫婦のための「自己との出会い」のプログラム。

マリッジ・リ・エンカウンター（ＲＥ）

：原則としてすでにＭＥを体験した人が、子どもとの和解をテーマにして「自己と出会う」プログラム。

マリッジ・レトルノ（ＭＲ）

：原則としてすでにＭＥを体験した人による、神との出会いをテーマにしたプログラム。

「顔と顔とを合わせて（FACE TO FACE）」

：結婚している夫婦のためのワークブック。

家族向け

ファミリー・エンカウンター（FE）

：原則としてすでにFIRESのプログラムを体験している家族が、家族ぐるみで参加するプログラム。

食卓を囲んで

：家族による12の分かち合いを実践するワークブック。

その他

婚約者のエンカウンター（EE）

：つきあっているおふたり・婚約している人が参加し、夫婦の召命について深く内省し、その使命を識別するための「自己との出会い」のプログラム。

FIRESのプログラムは、全国各地で、それぞれの地域担当者によって開催されています。その開催日程・場所、およびFIRESプログラムの詳細のお問い合わせ、ならびに夫婦のためのワークブック『顔と顔を合わせて』ほかのご注文は、左記の宛先まで郵便にてご通知ください。

宛先

〒106　東京都港区六本木4―2―37

フランシスカン・チャペルセンター　気付

FIRES

おわりに

神は
創造してくださった。
神秘に満ち力溢れる愛のエネルギーを
生命と愛の源を

一人ひとりの心の中に
夢を
創造してくださった。
男・女・幼子・
ティーンエージャー・青年・
成人・老齢者
すべての心に

どの夫婦の心にも
創造してくださった。
人種を問わず
信者でも、信者でなくても
金持ちでも、貧しくとも
その心の中に

そして、どの家族のうちにも。
両親のいる家族でも、片親家庭でも、
義父母でも、国際結婚でも、
健康でも、病気でも、
その内面に

深く
共同体すべてのうちに。
社会・文化・宗教の違う、
あらゆる共同体のただ中に

われらそれを解き放つならば
地球はまったくさまがわりする。

暴力は消え失せ
新しき時代が到来する。
正義と、愛と、平和の曙。

神の創造にとって

その心臓
家族。

家族こそ、引き金となり、
神の賢明さと慈愛に満ちたみ旨のうちに社会は
ふたたび建つ。

個人でも、グループとしても、
自分たちに問いかけてみよう。
この愛のエネルギーが溢れ出るため
私たち家族にできること、
すべきことは、
何？　と。

家族のエネルギー ——より幸せな家族になるには——

1995年7月10日 初版発行 定価はカバーに表示してあります

著 者 ガブリエル・カルボ

監 修 ダナン・マーリー (O.F.M.)

翻訳協力 小松 益弘

発行所 サン パウロ

〒160 東京都新宿区四谷1の2

電 話 (03)3357-6401(代表)

版 元 (03)3359-0451

FAX (03)3351-9534

振 替 00120-0-62233

印刷所 (株)平河工業社

Printed in Japan. (落丁・乱丁はおとりかえいたします)

ISBN4-8056-1483-8 C0036